

埼玉県志木市

埋蔵文化財調査報告書 7

中道遺跡第38地点

中道遺跡第39地点

2016

埼玉県志木市教育委員会

埼玉県志木市

埋蔵文化財調査報告書 7

中道遺跡第38地点

中道遺跡第39地点

2016

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 尾崎 健市

ここに刊行する『埋蔵文化財調査報告書7』は、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査事業の調査成果をまとめたものです。

志木市は埼玉県の南東部に位置し、都心から25km圏内という距離にあるため、住宅建設を始めとする各種開発行為が非常に多い地になっています。

当市を地理的に見てみると、市域には、荒川・新河岸川・柳瀬川といった大きな3つの河川が流れていることから、古より水に恵まれた環境に恵まれていたものと想像できます。このことから、こうした柳瀬川・新河岸川に面した台地縁辺や荒川低地の自然堤防上には14カ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されています。

中道遺跡については、今までの調査成果から、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世までの幅広い時代にわたる複合遺跡であることが判明しています。特にこの遺跡で第1回目の発掘調査となった、第2地点は、かつて都市計画道路「富士見・大原線」（現ユリノ木通り）の建設工事に伴い実施されたもので、この調査を契機に中道遺跡の歴史的な重要性が見いだされたと言っても過言ではないでしょう。

さて、今回報告する中道遺跡第38・39地点は、平成7・8年度に共同住宅建設に伴い発掘調査が実施されました。この調査により、旧石器時代、縄文時代中期、古墳時代後期、中世以降の遺構・遺物が多く検出されました。中でも、古墳時代後期の22号住居跡は、火災に見舞われた住居であり、その際に柱や梁、そして屋根葺材などの木材が炭化した状態で検出されたという大変重要な発見となっています。

発掘調査・整理作業及び調査報告書刊行につきましては、関係各位の皆様からは多くのご協力をいただきました。ここに、心から感謝申し上げる次第です。

最後に、本書が埋蔵文化財の理解と認識を深めるとともに、志木市の歴史を学ぶための一助になれば幸いです。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する中道遺跡（県№09-005）の第38・39地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、志木市教育委員会の斡旋により、各開発主体者の事業者から志木市遺跡調査会が委託を受け実施した。整理作業及び報告書刊行は、志木市教育委員会が実施した。
3. 本書の作成において、編集は尾形則敏が行い、執筆は下記以外を尾形が行った。なお、中世以降の遺物については、朝霞市教育委員会の野澤 均氏にご教示を頂いた。
大久保聡 第2章第2節
深井恵子 第2章第3・4節の遺構、第3章第2・3節の遺構
青木 修 第2章第5節(2)、第3章第2節、第4節(2)・(3)
4. 遺物の実測は、星野恵美子・鈴木浩子・松浦恵子・増田千春・斑目ちひろ・宮川幸佳が行った。遺構・遺物のデジタルトレースは深井恵子・青木 修が行った。写真撮影は青木 修が行った。
5. 表土剥ぎ及び埋戻し作業については、株式会社大塚屋商店に委託し、重機オペレータは田中三二が担当した。
6. 旧石器・縄文時代の石器については、有限会社アルケーリサーチに実測を委託した。
7. 自然科学分析については、株式会社パレオ・ラボに委託した。
8. 本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターに一括して保管している。
9. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書刊行作業には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。
埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・（財）埼玉県埋蔵文化財事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館・富士見市立難波田城資料館
江原 順・加藤秀之・川畑卓人・隈本健介・齋藤 純・齋藤欣延・斯波 治・鈴木一郎
照林敏郎・中岡貴裕・根本 靖・野沢 均・早坂廣人・堀 善之・前田秀則・松本富雄
柳井彰宏・山本 龍・和田晋治・渡辺邦仁
10. 本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については、下記の通りである。
 - 周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）
中道遺跡第38地点／平成8年3月5日付け 教生文第3-575号
中道遺跡第39地点／平成8年3月5日付け 教生文第3-576号
 - 埋蔵文化財の発掘調査について（通知）
中道遺跡第38地点／平成8年3月5日付け 教生文第2-182号
中道遺跡第39地点／平成8年3月5日付け 教生文第2-183号
 - 埋蔵物の文化財認定について
中道遺跡第38地点／平成9年3月19日付け 教生文第6-67号
中道遺跡第39地点／平成9年3月19日付け 教生文第6-68号

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。
第1図 1:10,000「志木市全図」株式会社バスコ調製
第2図 1:2,500 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成15年8月発行
株式会社ゼンリンを一部改変
2. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
3. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。
4. ビット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるビットでも、おそらく後世のビットと思われるものには、数値を省略した。
5. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
6. 遺構挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内にその内容を示したが、遺物挿図版中のスクリーントーンは、土器の赤彩範囲を示す。
7. 土器一覧表「法量」項中にある表記については、以下のとおりである。また、現存値は〔 〕、推定値は（ ）を付した。
高：器高 口：口径 底：底径 厚：器厚
8. 第11・15・16・18・23・24表の縄文土器及び土製品の記述の中で使用した色調は、『新版 標準土色帖 1999年版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を参考にした。
9. 遺構の略記号は、以下のとおりである。
U=旧石器時代の石器集中地点 J=縄文時代の住居跡 H=古墳時代の住居跡
D=土坑 M=溝跡 W=井戸跡 P=ビット

志木市遺跡調査会組織（平成7・8年度）

〈役員〉

- 会長 秋山太蔵（志木市教育委員会教育長）（昭和63年7月～平成12年6月）
副会長 川目憲夫（志木市教育委員会教育総務部長）（平成7年4月～平成12年3月）
理事 神山健吉（志木市文化財保護審議会会長）
井上國夫（志木市文化財保護審議会委員）
高橋長次（ ” ）
高橋豊（ ” ）
内田正子（ ” ）
理事兼事務局長 並木勝司（志木市教育委員会教育総務部参事兼生涯学習課長）
（平成3年4月～平成8年3月）
鈴木重光（生涯学習課長）（平成8年4月～平成12年3月）

〈監査〉

- 監事 武川洋子（志木市郷土資料館長）（平成5年4月～平成8年3月）
萩原洋子（ ” ）（平成8年4月～平成14年3月）
鈴木憲三（社会教育指導員）（平成5年4月～平成9年3月）
佐藤茂（ ” ）（平成6年4月～平成10年3月）

〈事務局〉

- 担当課 志木市教育委員会教育総務部社会教育課（～平成12年3月）
事務局 尾崎健市（生涯学習課長補佐兼生涯学習課係長）（平成7年4月～平成10年3月）
岡本孝（生涯学習課係長）（平成3年4月～平成9年3月）
清水あや子（生涯学習課主任）（平成8年4月～平成12年3月）
佐々木保俊（ ” ）（～平成21年8月）
尾形則敏（ ” ）（～平成22年12月）

〈中道遺跡第38・39地点の発掘調査〉

- 調査担当者 佐々木保俊
調査員 内野美津江
調査補助員 東浦久美子・吉谷顕子
発掘協力員 足立裕子・阿部公子・阿部ふみ子・石田ヤス子・出雲佐智子・岩森都・
海野ひとみ・大野涼子・大平裕子・岸田純一・木村千枝子・熊谷秀子・
佐々木志野・白砂正・鈴木百合香・高倉光代・高橋恭子・塚田和枝・
永井真理・中村マキ子・二階堂美知子・服部達之助・久留浪子・広沢奈津子・
藤森栄・古田トシ子・松崎陽子・森文子・柳沢美子・矢野顕子・
油橋由美
整理協力員 伊野部三千子・岸田純一・鈴木美佐江・竹内美代子・成田しのぶ・斑目ちひろ・
宮川幸佳

志木市教育委員会組織（平成27年度）

教 育 長	尾崎健市
教育政策部長	原田隆一
生涯学習課長	松井俊之
生涯学習課主幹	井上茂
生涯学習課主査	尾形則敏
〃	武井香代子
生涯学習課主任	松永真知子
〃	徳留彰紀
生涯学習課主事	大久保聡
生涯学習課主事補	辻大輔
志木市文化財保護審議会	井上國夫（会長）
〃	高橋長次（委員）
〃	高橋豊（委員）
〃	深瀬克（委員）
〃	上野守嘉（委員）

〈整理作業〉

担当者	尾形則敏・徳留彰紀・大久保聡
調査員	深井恵子・青木修
調査補助員	星野恵美子・鈴木浩子
整理協力員	池野谷有紀・小林律・高田美智子・二階堂美知子・林ゆき子・ 増田千春・松浦恵子・村田浩美

目 次

はじめに

例 言／凡 例／志木市遺跡調査会組織（平成7・8年度）／志木市教育委員会組織（平成27年度）／目 次／挿図目次／表 目 次／図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 遺跡の概要	7
第2章 中道遺跡第38地点の調査	9
第1節 調査の経緯	9
第2節 旧石器時代の遺物	14
第3節 古墳時代後期・平安時代の遺構・遺物	20
第4節 中世以降の遺構・遺物	32
第5節 遺構外出土遺物	47
第3章 中道遺跡第39地点の調査	55
第1節 調査の経緯	55
第2節 縄文時代の遺構・遺物	55
第3節 近世以降の遺構・遺物	78
第4節 遺構外出土遺物	107
第4章 調査のまとめ	121
第1節 旧石器時代について	121
第2節 古墳時代後期の住居跡について	122

[付編] 自然科学分析

I. 中道遺跡第38地点におけるローム層中のガラス質火山灰	127
II. 中道遺跡第38地点出土炭化材の樹種	130

図 版
報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)	2	第41図	84号土坑出土遺物 1 (1/4・1/3)	74
第2図	中道遺跡の調査地点 (1/2,500)	10	第42図	84号土坑出土遺物 2 (1/3)	75
第3図	遺構分布図 (1/300)	13	第43図	86号土坑出土遺物 (1/3)	75
第4図	旧石器時代の遺物分布図 (1/300)	15	第44図	87号土坑出土遺物 (1/3)	75
第5図	2号石器集中地点—器種別分布図— (1/40)	16	第45図	土坑B群2類 1 (1/60)	90
第6図	2号石器集中地点—石材別分布図— (1/40)	17	第46図	土坑B群2類 2 (1/60)	91
第7図	2号石器集中部出土石器 1 (4/5)	18	第47図	土坑C群 1 (1/60)	91
第8図	2号石器集中部出土石器 2 (4/5)	19	第48図	土坑C群 2 (1/60)	92
第9図	20号住居跡・105号土坑 (1/60)	21	第49図	土坑E群 1類 (1/60)	93
第10図	20号住居跡出土遺物 (1/4)	21	第50図	40号土坑出土遺物 (1/4)	94
第11図	21号住居跡・カマド (1/60・1/30)	22	第51図	41号土坑出土遺物 (1/4)	94
第12図	21号住居跡出土遺物 (1/4)	23	第52図	44号土坑出土遺物 (1/4)	94
第13図	22号住居跡 (1/60)	24	第53図	45号土坑出土遺物 1 (1/4)	94
第14図	22号住居跡遺物・炭化材出土状態 (1/60)	25	第54図	45号土坑出土遺物 2 (1/4・1/2・1/3・4/5)	95
第15図	22号住居跡カマド (1/30)	26	第55図	47号土坑出土遺物 (1/4・1/3)	96
第16図	22号住居跡出土遺物 (1/4・1/3・1/2)	27	第56図	48号土坑出土遺物 (1/4)	96
第17図	20号溝跡 (1/80)	30	第57図	49号土坑出土遺物 (1/4・1/3・4/5)	96
第18図	20号溝跡出土遺物 (1/3・1/4)	31	第58図	50号土坑出土遺物 (1/4・1/3)	97
第19図	土坑B群2類 (1/60)	40	第59図	51号土坑出土遺物 (1/4)	97
第20図	土坑B群3類 (1/60)	40	第60図	52号土坑出土遺物 (1/4)	97
第21図	土坑C群 (1/60)	41	第61図	55号土坑出土遺物 (1/4・1/3)	97
第22図	土坑E群 1類 (1/60)	41	第62図	57号土坑出土遺物 1 (1/4)	97
第23図	130号土坑出土遺物 (1/4・1/2)	42	第63図	57号土坑出土遺物 2 (1/4・1/3・1/8・1/6)	98
第24図	2号井戸跡 (1/60)	44	第64図	66号土坑出土遺物 (1/4・1/3)	99
第25図	2号井戸跡出土遺物 (1/4・1/3)	45	第65図	73号土坑出土遺物 (1/4)	99
第26図	遺構外出土遺物 1 (2/3・1/3・1/4)	48	第66図	74号土坑出土遺物 (1/4)	99
第27図	遺構外出土遺物 2 (1/3)	49	第67図	1号井戸跡・出土遺物 (1/60・1/4)	100
第28図	遺構外出土遺物 3 (1/4・1/3)	50	第68図	遺構外出土遺物 1 (2/3・1/3)	108
第29図	遺構分布図 (1/300)	57・58	第69図	遺構外出土遺物 2 (1/3・1/4・2/3)	109
第30図	7号住居跡 (1/60)	60	第70図	遺構外出土遺物 3 (1/3)	110
第31図	7号住居跡出土遺物 1 (1/4・1/3)	61	第71図	遺構外出土遺物 4 (1/3)	111
第32図	7号住居跡出土遺物 2 (1/3)	62	第72図	遺構外出土遺物 5 (1/3・1/4)	112
第33図	7号住居跡出土遺物 3 (1/3)	63	第73図	遺構外出土遺物 6 (1/4・1/3・1/6)	113
第34図	7号住居跡出土遺物 4 (1/3)	64	第74図	遺構外出土遺物 7 (1/3・4/5)	114
第35図	7号住居跡出土遺物 5 (1/3)	65	第75図	ローム層中の藍物組成	128
第36図	7号住居跡出土遺物 6 (1/3)	66	第76図	22号住居跡の炭化材の出土状態 (1/40)	131
第37図	土坑 (1/60)	71	第77図	機動細胞珪酸体の模式図	133
第38図	58号土坑出土遺物 (1/3)	72			
第39図	65号土坑出土遺物 (1/3)	72			
第40図	68号土坑出土遺物 (1/4・1/3)	73			

目 次

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覽…………… 1	第17表 7号住居跡出土土器一覽…………… 69
第2表 中道遺跡第38地点の発掘調査工程表…………… 12	第18表 縄文時代の土坑出土土器一覽(1)…………… 76
第3表 2号石器集中地点出土の石器一覽…………… 19	縄文時代の土坑出土土器一覽(2)…………… 77
第4表 20号住居跡出土土器一覽…………… 28	第19表 縄文時代の土坑出土土器一覽…………… 77
第5表 21号住居跡出土土器一覽…………… 28	第20表 中世以降の土坑一覽…………… 101
第6表 22号住居跡出土土器一覽(1)…………… 28	第21表 土坑・井戸跡出土の陶磁器・土器一覽(1)…………… 102
22号住居跡出土土器一覽(2)…………… 29	土坑・井戸跡出土の陶磁器・土器一覽(2)…………… 103
第7表 20号溝跡出土土器一覽(1)…………… 31	土坑・井戸跡出土の陶磁器・土器一覽(3)…………… 104
20号溝跡出土土器一覽(2)…………… 32	土坑・井戸跡出土の陶磁器・土器一覽(4)…………… 105
第8表 中世以降の土坑一覽…………… 43	土坑・井戸跡出土の陶磁器・土器一覽(5)…………… 106
第9表 土坑・井戸跡出土の陶磁器・土器一覽…………… 46	第22表 遺構外出土の旧石器・縄文時代石器一覽…………… 115
第10表 遺構外出土の旧石器・縄文・弥生時代石器一覽…………… 51	第23表 遺構外出土の縄文土器一覽(1)…………… 116
第11表 遺構外出土の縄文土器一覽(1)…………… 52	遺構外出土の縄文土器一覽(2)…………… 117
遺構外出土の縄文土器一覽(2)…………… 53	遺構外出土の縄文土器一覽(3)…………… 118
第12表 遺構外出土の弥生～平安時代の土器一覽(1)…………… 53	第24表 遺構外出土の縄文時代土製品一覽…………… 118
遺構外出土の弥生～平安時代の土器一覽(2)…………… 54	第25表 遺構外出土の弥生・古墳時代の土器一覽…………… 118
第13表 遺構外出土の陶磁器・土器一覽…………… 54	第26表 遺構外出土の陶磁器・土器一覽(1)…………… 119
第14表 中道遺跡第39地点の発掘調査工程表…………… 56	遺構外出土の陶磁器・土器一覽(2)…………… 120
第15表 7号住居跡出土土器一覽(1)…………… 67	第27表 土坑・遺構外出土の銭貨一覽…………… 120
7号住居跡出土土器一覽(2)…………… 68	第28表 ローム層中の藍物組成…………… 128
第16表 7号住居跡出土土製品一覽…………… 69	第29表 22号住居跡出土炭化材の樹種…………… 131

図 版 目 次

<p>図版1 中道遺跡第38地点</p> <p>1. 調査区近景 2. 基本土層 3. 2号石器集中地点出土状態 4. 20号住居跡 5. 20号住居跡・105・106号土坑 6. 21号住居跡 7. 21号住居跡遺物出土状態 8. 21号住居跡貯蔵穴</p> <p>図版2 中道遺跡第38地点</p> <p>1～5. 22号住居跡遺物出土状態</p> <p>図版3 中道遺跡第38地点</p> <p>1・2. 22号住居跡炭化材出土状態 3. 22号住居跡炭化物出土状態 4. 22号住居跡貯蔵穴 5. 22号住居跡カマド 6. 22号住居跡 7. 20号溝跡</p> <p>図版4 中道遺跡第38地点</p> <p>1. 89号土坑(B群2類) 2. 99号土坑(B群2類)</p> <p>3. 113号土坑(B群2類) 4. 93号土坑(B群3類)</p> <p>5. 102号土坑(B群3類) 6. 103号土坑(B群3類)</p> <p>7. 98号土坑(C群) 8. 104号土坑(C群)</p> <p>図版5 中道遺跡第38地点</p> <p>1. 118号土坑(C群) 2. 130号土坑縦坑部(E群1類)</p>	<p>3. 130号土坑主体部(E群1類) 4. (C-3・4)グリッド 5. 2号井戸跡 土層 6. 2号井戸跡 7. 21号溝跡</p> <p>図版6 中道遺跡第38地点</p> <p>2号石器集中部出土土器</p> <p>図版7 中道遺跡第38地点</p> <p>1. 20号住居跡出土遺物 2. 21号住居跡出土遺物</p> <p>図版8 中道遺跡第38地点</p> <p>22号住居跡出土遺物</p> <p>図版9 中道遺跡第38地点</p> <p>1. 20号溝跡出土遺物 2. 89号土坑出土遺物 3. 130号土坑出土遺物</p> <p>図版10 中道遺跡第38地点</p> <p>2号井戸跡出土遺物</p> <p>図版11 中道遺跡第38地点</p> <p>遺構外出土遺物1</p> <p>図版12 中道遺跡第38地点</p> <p>遺構外出土遺物2</p>
---	--

図版13 中道遺跡第38地点

遺構外出土遺物3

図版14 中道遺跡第39地点

1. 調査区近景 2. 7号住居跡 3・4. 7号住居跡遺物出土状態 5. 58号土坑 6. 65号土坑 7. 68号土坑 8. 68号土坑遺物出土状態

図版15 中道遺跡第39地点

1. 84号土坑 2. 87号土坑 3. 56号土坑 (B群1類) 5. 60号土坑 (B群1類) 5. 38号土坑 (B群2類) 6. 51号土坑 (B群2類) 7. 59号土坑 (B群2類) 8. 64号土坑 (B群2類)

図版16 中道遺跡第39地点

1. 69号土坑 (B群2類) 2. 72号土坑 (B群2類) 3. 41号土坑遺物出土状態 (C群) 4. 47号土坑 (C群) 5. 49号土坑 (C群) 6. 49号土坑遺物出土状態 (C群) 7. 50号土坑 (C群) 8. 54号土坑 (C群)

図版17 中道遺跡第39地点

1. 67号土坑 (C群) 2. 70号土坑 (C群) 3. 73号土坑 (C群) 4. 土坑 東から (B群2類・C群・D群) 5. 土坑 西から (B群2類・C群・E群) 6. 57号土坑縦坑部 (E群1類) 7. 57号土坑主体部 (E群1類) 8. 1号井戸跡

図版18 中道遺跡第39地点

7号住居跡出土遺物1

図版19 中道遺跡第39地点

7号住居跡出土遺物2

図版20 中道遺跡第39地点

7号住居跡出土遺物3

図版21 中道遺跡第39地点

1. 58号土坑出土遺物 2. 65号土坑出土遺物 3. 68号土坑出土遺物

図版22 中道遺跡第39地点

1. 84号土坑出土遺物 2. 86号土坑出土遺物 3. 87号土坑出土遺物

図版23 中道遺跡第39地点

1. 38号土坑出土遺物 2. 40号土坑出土遺物 3. 41号土坑出土遺物

図版24 中道遺跡第39地点

1. 42号土坑出土遺物 2. 43号土坑出土遺物 3. 44号土坑出土遺物 4. 45号土坑出土遺物1

図版25 中道遺跡第39地点

1. 45号土坑出土遺物2 2. 47号土坑出土遺物

図版26 中道遺跡第39地点

1. 49号土坑出土遺物 2. 48号土坑出土遺物 3. 50号土坑出土遺物 4. 51号土坑出土遺物 5. 52号土坑出土遺物 6. 55号土坑出土遺物1

図版27 中道遺跡第39地点

1. 55号土坑出土遺物2 2. 57号土坑出土遺物1

図版28 中道遺跡第39地点

57号土坑出土遺物2

図版29 中道遺跡第39地点

1. 57号土坑出土遺物3 2. 62号土坑出土遺物 3. 66号土坑出土遺物 4. 72号土坑出土遺物 5. 73号土坑出土遺物

図版30 中道遺跡第39地点

1. 74号土坑出土遺物 2. 75号土坑出土遺物 3. 1号井戸跡出土遺物 4. 遺構外出土遺物1

図版31 中道遺跡第39地点

遺構外出土遺物2

図版32 中道遺跡第39地点

遺構外出土遺物3

図版33 中道遺跡第39地点

遺構外出土遺物4

図版34 中道遺跡第39地点

遺構外出土遺物5

図版35 中道遺跡第39地点

遺構外出土遺物6

図版36 中道遺跡第38地点

中道遺跡第38地点 ローム層中のATの火山ガラス

図版37 中道遺跡第38地点

中道遺跡第38地点出土炭化材の電子顕微鏡写真

図版38 中道遺跡第38地点

中道遺跡第38地点出土炭化物の植物珪酸体

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形と遺跡

(1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりをもち、面積は9.05km²（注1）、人口約7万3千人の自然と文化の調和する都市である。

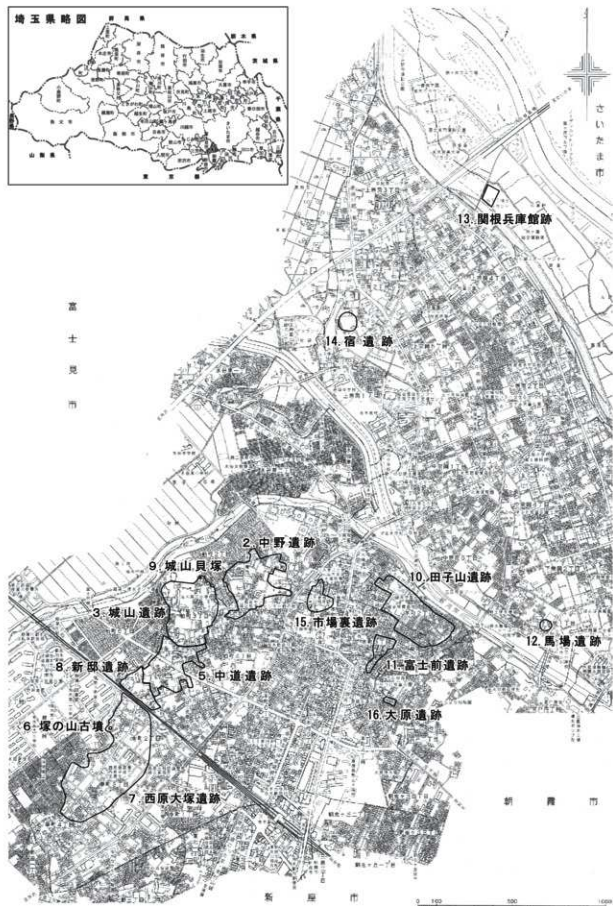
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新邸遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、

№	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	65,780㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	81,310㎡	畑・宅地	城郭跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、跡込関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、跡込関連遺物等
5	中道	52,980㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形竪溝墓、土坑墓、地下室、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800㎡	林	古墳?	古墳?		なし
7	西原大塚	163,930㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形竪溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	20,080㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形竪溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット跡等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900㎡	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	74,030㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形竪溝墓、ローム探掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	12,000㎡	宅地	集落跡	縄文、弥（後）～古（前）、平安、近世以降	住居跡、土坑?、溝跡?	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800㎡	畑	集落跡	古（前）	住居跡?	土師器
13	関根兵庫船跡	4,900㎡	グラウンド	船跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700㎡	田	船跡	中世	溝跡・井桁状構造物	木・石製品
15	市場裏	13,800㎡	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡・方形竪溝墓・土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大原	1,700㎡	宅地	不明	近世以降?	溝跡	なし
合計		502,710㎡					

平成27年12月28日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 市域の地形と遺跡分布(1/20,000)

平成27年12月28日現在

関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した12遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた14遺跡である（第1図）。

（2）歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノ木通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅴ層・Ⅵ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6（1994）年度には2ヶ所、平成7年（1995）度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層のⅣ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

また、城山遺跡では、平成13（2001）年に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層のⅣ層上部とⅦ層の2ヶ所で石器集中地点が検出され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの挟入石器・剥片など32点が出土している。平成20・21年に発掘調査が実施された第62地点（道路・駐車場部分）でも1ヶ所の石器集中地点が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。最新では、平成23（2011）年に発掘調査が実施された第71地点では、石器集中地点2ヶ所、礫群9基が検出され、特に礫群については、市内において初の発見例につながった。

2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6（1994）年に発掘調査が実施された城山第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18（2006）年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された早期末葉（条痕文系）の10号住居跡1軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で燃糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。最新資料では、平成23（2011）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から燃糸文系土器・石器がまとめて出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で住居跡（黒浜式期）、城山遺跡では住居跡（諸磯式期）が検出され

ている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で180軒以上の住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも2基の土坑が検出されている。最新資料では、平成25（2013）年度に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点から、市内初の柄鏡形住居（敷石住居）1軒が検出され、注目される。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行3c式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が約600軒確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。平成24（2012）年に発掘調査が実施された第179地点からは、遺存状態は良好ではないが、市内初の銅剣が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土している。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

なお、以上のうち、西原大塚遺跡122号住居跡出土の動物形土製品1点と西原大塚遺跡17号方形周

溝墓から出土した、鳥形土製品1点と壺形土器4点の計5点は、考古資料として、平成25年3月1日付けで、市指定文化財に指定されている。

4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的に新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で200軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整形円形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられている。

5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「富」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器環や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。平成20・21（2008・2009）年の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶が2枚とその近くからは鉄鎌1点と土錘1点が出土しており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例として、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡として100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群（入間市）の製品と南比企窯跡群（鳩山町）の製品という生産地の異なる須恵器環が相伴して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

なお、以上のうち、城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか9点の遺物と城山遺跡第241号住居跡出土の富壽神寶ほか2点の遺物は、考古資料として、平成25年3月1日付けで、市指定文化財に指定されている。

6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『館村日記』（註2）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では、『延国雑記』（註3）に登場する「大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、「大塚十玉坊」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山 1988・2002）。

また、平成7（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成8（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点では、鋳造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鋳型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。また、平成13（2001）年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成6（1994）年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、鎧の札である鉄製品1点と鉄鎌1点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ビット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村日記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7（1995）年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村日記』に記載がある「大塚千手堂」であ

り、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院しょうりんざんからんのくにだいじのいん松林山観音寺大受院」関連遺構として、今後は体系的な究明が必要とされるであろう。

7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鎌などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの錆着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第2節 遺跡の概要

中道遺跡は、志木市柏町5丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1kmに位置している。本遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地しており、標高は北端で約13m、南端で約14m、低地との比高差は約7mである。遺跡の現況は都市計画道路富士見・大原線（ユリノ木通り）の開通とともに各種開発が盛んに行われ、畑地は急激に減少している。

また、本遺跡では、これまでに76地点の調査（平成27年12月28日現在）が実施され、旧石器時代、縄文時代中期、古墳時代中・後期、平安時代、中・近世に至る複合遺跡であることが判明している。

最後に、本遺跡の特色を時代別にまとめると、以下のとおりである。

- 旧石器時代 石器集中地点は、第2地点から3ヶ所、第39地点から1ヶ所が検出されている。第2地点では立川ローム層のIV層上部・VI層・VII層で文化層が確認されている。
- 縄文時代 第65地点から早期後葉（条痕文系）の住居跡1軒（10J）が検出されている。中期後葉の住居跡としては、第2・12・13・39・65地点で検出されている。完形の土器を出土する土坑としては、第2地点の11Dがある。
- 弥生末～古墳初頭 第65地点から弥生時代末葉～古墳時代前期の方形周溝墓1基が検出されている。方形周溝墓の発見は、本遺跡では初めてとなる。
- 古墳時代 前期の住居跡としては、第36地点の18Hがある。中期の住居跡は、第37地点から1軒（19H）検出されている。この住居跡は、カマドを有する住居跡としては、市内最古（5世紀中葉）で、煙道が長い特徴をもち、東北地域との関連が指摘できる。後期の住居跡は、第2・12・13・21・33・38地点で検出されている。時期としては、7世紀中葉に比定される。
- 平安時代 住居跡は、第2・12・21・41地点で検出されている。その他として、第41・56・58地点からは溝跡が検出されている。第41地点の23Hからは、炭化材（クリ材を主体）や炭化種子塊（イネ）が出土しており、特筆すべきである。
- 中・近世 墓坑的な性格の遺構として、第2地点から人骨を出土した土坑2基（16・18

D)と地下式坑2基(16・19D)、第26地点からは人骨と六文銭を出土した土坑2基(28・29D)、第37地点からは人骨と六文銭を出土した土坑1基(37D)がある。また、第37地点からは、鏡蓮華文をもつ13世紀代の青磁盤を出土した道路状遺構1本(1M)が検出されている。

その他として近世では、第2・13・26・27・36・38・39・44・56・65地点から、土坑・溝跡・ピット群を中心とした遺構が多く検出されている。第2地点では4棟の掘立柱建築遺構が確認されている。

【註】

- 註1 平成26年度「全国都道府県市区町村別面積調」により、9.06㎢から変更された。
- 註2 『館村旧記』は、館村(現在の志木市柏町・幸町・館)の名主宮原仲右衛門仲愼が、享保12～14(1727～1729)年にかけて執筆したものである。
- 註3 『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年(1486)6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐる、駿河甲斐にも足をのぼし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

【引用文献】

- 神山健吉 1988「廻回雑記」に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察『郷土志木』第7号
- 2002「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号

第2章 中道遺跡第38地点の調査

第1節 調査の経緯

(1) 調査に至る経過

平成7年11月、ダイア建設株式会社（代表取締役社長 下津 寛徳）から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ土木工事計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市柏町5丁目2950-1・35（面積1,019.82㎡）と柏町5丁目2946-1・2（面積1,209.91㎡）の2箇所に共同住宅建設を実施するというものである。

これに対し、教育委員会は当該土木工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である中道遺跡（コード11228-09-005）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を実施した上で、当該地における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
2. 上記2の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

なお、今回の2箇所における計画については、それぞれ以下の2つの地点名を付け、同時に進行し、対応することになった。

遺跡・地点名	地 番	面積 (㎡)
中道遺跡第38地点	志木市柏町5丁目2950-1・35	1,019.82
中道遺跡第39地点	志木市柏町5丁目2946-1・2	1,209.91
合 計		2,229.73

(2) 確認調査の方法とその後の経過

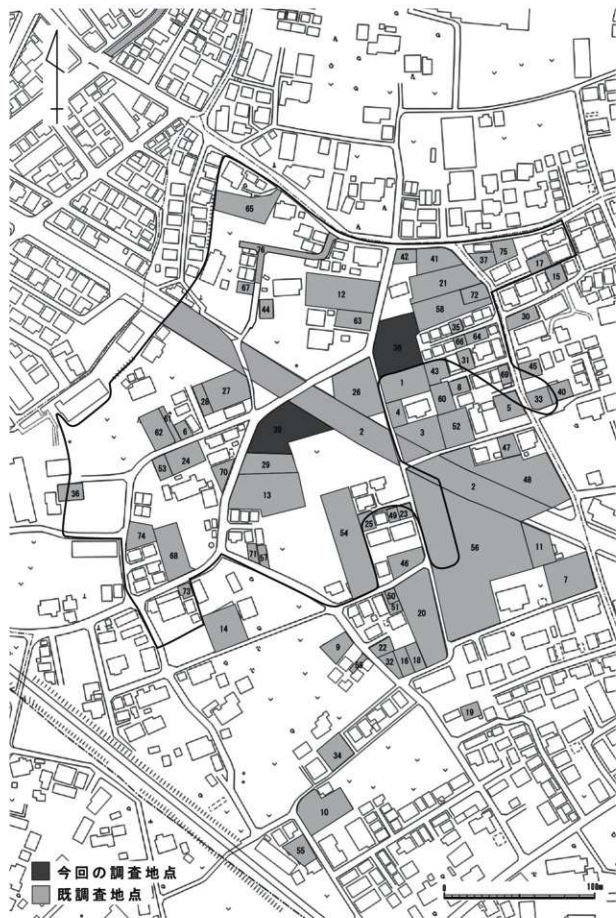
平成7年12月1日、教育委員会は、ダイア建設株式会社より埋蔵文化財確認調査依頼書を受理し、

12月7日に確認調査を実施した。確認調査は上記両地点の調査を実施することになり、最初に第39地点の調査を実施し、終了後に第38地点の調査を実施する日程とした。実際、第39地点は12月7日に開始し、同日完了し、第38地点は翌12月8日に実施し、同日完了した。

まず、第39地点の確認調査は、調査区長軸のほぼ東西方向に合わせ、幅1.5mのトレンチを4本（1～4 Tr）設定し、バックホーを使用して表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、縄文時代中期の住居跡1軒、古墳時代後期の住居跡2軒、中世以降の溝跡3本・土坑4基などの多くの遺構を検出した。

次に、第38地点の確認調査は、調査区長軸のほぼ南北方向に合わせ、幅1.5mのトレンチを4本（1～4 Tr）設定し、バックホーを使用して表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、縄文時代の土坑や古墳時代後期の住居跡4軒、中世以降の溝跡2本、その他土坑などを調査区ほぼ全域で検出した。

教育委員会は、この結果を直ちに依頼者であるダイア建設株式会社に報告し、埋蔵文化財の保存措置



第2図 中道遺跡の調査地点(1/2500)

平成27年12月28日現在

について協議を行った。その結果、結論的には第38・39地点ともに記録保存のための発掘調査を実施することに決定した。そして、教育委員会では、ダイア建設株式会社に対し、発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を幹旋した。

平成7年12月22日、ダイア建設株式会社から第38・39地点の埋蔵文化財発掘届が提出され、平成8年1月31日には遺跡調査会から両地点の埋蔵文化財発掘調査届が教育委員会に提出されたため、教育委員会は、同日、これらの届出書を埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

平成8年2月5日、遺跡調査会は、ダイア建設株式会社と第38・39地点それぞれの地点を併せ埋蔵文化財保存事業委託契約を締結することになり、これにより、2月5日から遺跡調査会を主体として、まず第39地点の発掘調査を開始することになった。第38地点については、第39地点の進捗状況により調査を開始することとし、3月13日から発掘調査を開始した。

(3) 発掘調査の経過

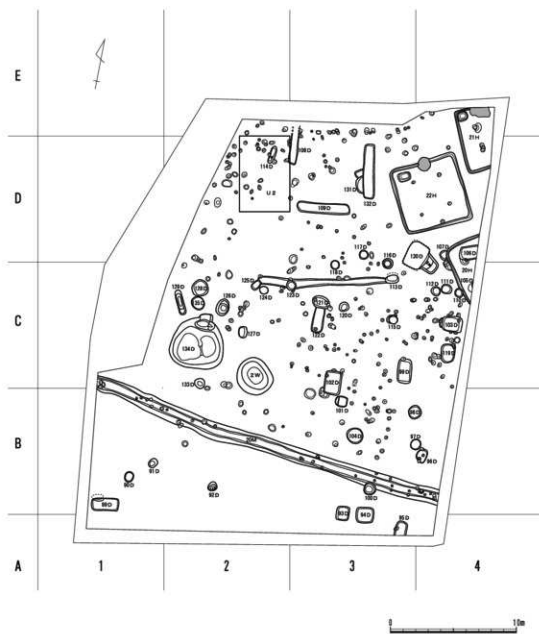
ここでは、第38地点の発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第2表の発掘調査工程表に示した。

- 3月13日 本日より重機（バックホー）による表土剥ぎ作業を開始する。残土については、ダンブ・ブルドーザーを使用し、第39地点へ搬出する。
- 14日 表土剥ぎ作業に併行して、人員導入を行い、調査区の基準点測量と一部遺構確認作業を開始する。
- 18日 調査区南半部にほぼ東西方向に走向する溝跡（20M）と中世以降の土坑（89～99D）の精査を開始する。
- 3月下旬 重機による表土剥ぎ作業は19日に終了した。新たに中世以降の土坑（100～119D）の精査を開始する。さらに、古墳時代後期の住居跡（20H）の精査を開始する。
- 4月上旬 中世以降の土坑（120～133D）の精査を開始し、12日までに精査を終了した。130Dは近世の地下室であった。さらに、井戸跡（2W）の精査を開始し、9日には精査を終了する。新たに古墳時代後期の21Hの精査を開始する。また、旧石器時代の石器集中地点（2U）の精査を開始する。
- 中旬 21Hの精査を終了し、新たに古墳時代後期の22Hの精査を開始する。特に22Hについては、焼失住居であり、住居全体の床面及び覆土中から多くの炭化材が出土した。
- 下旬 2U・22Hの精査を行う。中世以降の土坑（134・135D）の精査を終了する。22Hの炭化材は、30日にパラロイドB-72（アクリル樹脂）を含浸させ、サンプリングを行った。
- 5月上旬 2U・22Hの精査を行う。22Hは10日からカマド精査を開始する。
- 5月13日 22Hについては、カマドの実測・写真撮影を終了し、精査を完了する。
- 17日 2Uの精査を終了する。本日をもってすべての精査を完了する。

第2章 中道遺跡第38地点の調査

	平成8年3月				4月						5月		
	15日	20日	25日	30日	5日	10日	15日	20日	5日	30日	5日	10日	15日
表土剥ぎ作業	3.13												
89D	3.18		3.27										
90D	3.18		3.27										
91D	3.18		3.27										
92D	3.18												
93D	3.18		3.28										
94D	3.18		3.28										
95D	3.18		3.28										
96D	3.18		3.27										
97D	3.18		3.27										
98D	3.18		3.28										
99D	3.18		3.27										
100D		3.21		3.28									
101D		3.21		3.28									
102D		3.21		3.28									
103D		3.21		3.27		4.2							
104D				3.28									
105D			3.26										
106D			3.26										
107D			3.26		4.1								
108D			3.26		4.1								
109D			3.26		4.1								
110D			3.26		4.1								
111D			3.26		4.1								
112D			3.26		4.1								
113D			3.26		4.2								
114D			3.26		4.2								
115D			3.26		4.2								
116D			3.26		4.2								
117D			3.26		4.2								
118D			3.26		4.2								
119D			3.26		4.2								
120D					4.3								
121D					4.3								
122D					4.3								
123D					4.3								
124D					4.3								
125D					4.3								
126D					4.3								
127D					4.3								
128D					4.3		-4.12						
129D					4.3		-4.12						
130D						4.9							
131D							-4.12						
132D							-4.12						
133D							-4.12						
134D								4.17					
135D									4.24				
20M	3.18												
21M					4.4								
2W				4.1									
20H			3.26										
21H				4.4									
22H							-4.12				5.13		
石器集中地点						4.9							5.17

第2表 中道遺跡第38地点の発掘調査工程表



第3図 遺構分布図(1/300)

第2節 旧石器時代の遺物

(1) 概要

旧石器時代の調査は、(C-2)グリッドで遺物包含層精査中にナイフ形石器(第26図1)が検出されたことから実施された。(C-2)、(C-3)、(D-2)、(D-3)グリッド内に試掘坑を設定し、立川ローム第X層までの掘削を行った結果、(D-2)グリッドで2号石器集中地点(2U)が確認できた(第4図)。今回検出された文化層は、立川ローム第VI層と考えられる。

(2) 基本層序

今回の調査における基本層序は、立川ローム第II層から第X層まで確認できた。

第II層 明茶褐色土(赤褐色スコリアを僅かに含む)。黒色土とローム層との漸移層。

第III層 黄褐色軟質ローム層(ソフトローム層)である。ローム層のソフト化が著しく、層厚は30～40cm程である。

第IV層 黄褐色硬質ローム層(ハードローム層)。層厚は18～40cm。ソフト化の進行が著しい。

第V層 暗黄褐色土層(立川ローム層第I黒色帯)である。色調から明瞭に判別するのは難しく、部分的に確認しづらい箇所もある。層厚は約16cmと未発達である。

第VI層 黄褐色土層(いわゆるAT包含層準)であり、層厚は20～24cmである。本層上部が今回検出された文化層検出層準。

第VII層 暗黄褐色ローム層(立川ローム層第II黒色帯上半部)であり、層厚は20cm前後である。

第VIII層 黄褐色ローム層である。第IX層の上層部にブロック状に存在する。非常に散漫であるため、検出できない場合も多い。

第IX層 暗黄褐色ローム層(立川ローム層第II黒色帯下半部)であり、層厚は30～36cmである。

第X層 黄褐色ローム層。

(3) 石器集中地点

2号石器集中地点

概要(第4～6図)

本石器集中地点は、(D-2)グリッド北側に位置し、南北3.82m×東西2.75mの範囲で広がる。出土した石器は総数54点で、その内訳はナイフ形石器1点、楔形石器2点、二次加工の有る剥片2点、微細剥離の有る剥片1点、剥片20点、砕片26点、石核2点である。そのうち、15点について図示を行った。石器石材の内訳は、黒曜石が27点、黒色安山岩24点、珪質頁岩3点である。そのほかには、破砕礫が8点、自然礫が1点検出されている。

石器・礫の出土層位は立川ローム層第IV層下部から第VI層下部にかけて上下に幅があるが、垂直分布の集中域は立川ローム層第VI層である。遺物の出土状況については、器種別分布(第5図)では、全体的に散漫に分布しているが、分布範囲の北側で砕片が、南側で剥片がやや多く出土している傾向がみられる。ナイフ形石器、楔形石器は分布範囲の北側から出土している。接合関係については、黒曜石の接合資料が1個体(接合資料1)で、3点の資料からなり、垂直分布の上下差で32.5cmある。黒色安山

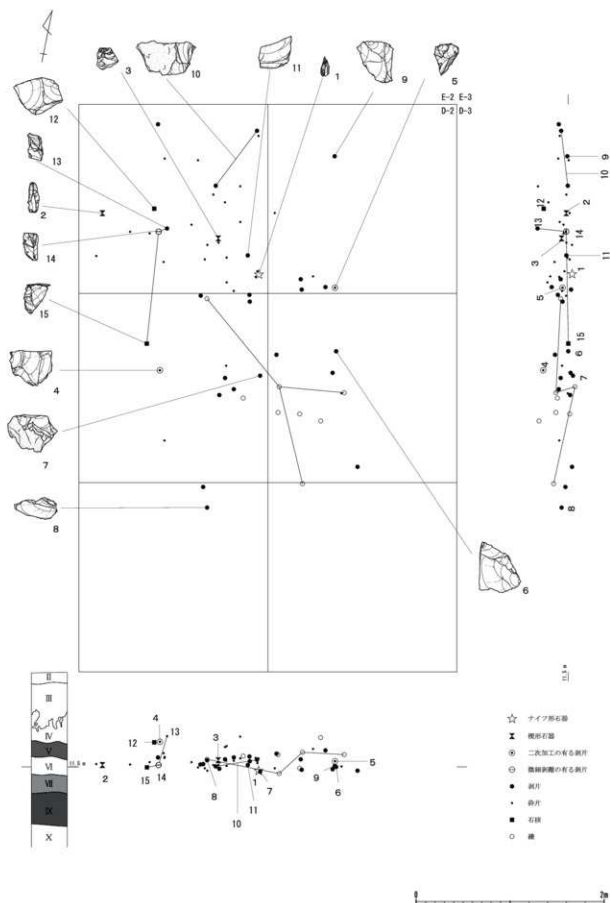


第4図 旧石器時代の遺物分布図(1/300)

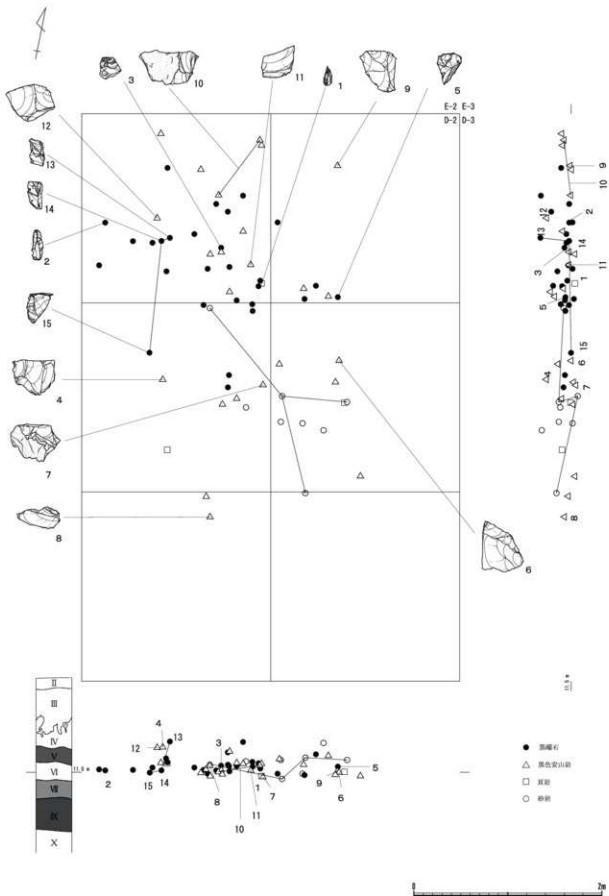
岩は1個体で、垂直分布の上下差で7cmある。礫は1個体あり、垂直分布の上下差で22.5cmある。石材別分布(第6図)では、黒色安山岩は分布範囲全体に散漫に出土している。黒曜石は分布範囲の北側に集中する傾向があり、珪質頁岩は分布範囲中央から南側に点在している。

遺物 (第7・8図、第3表)

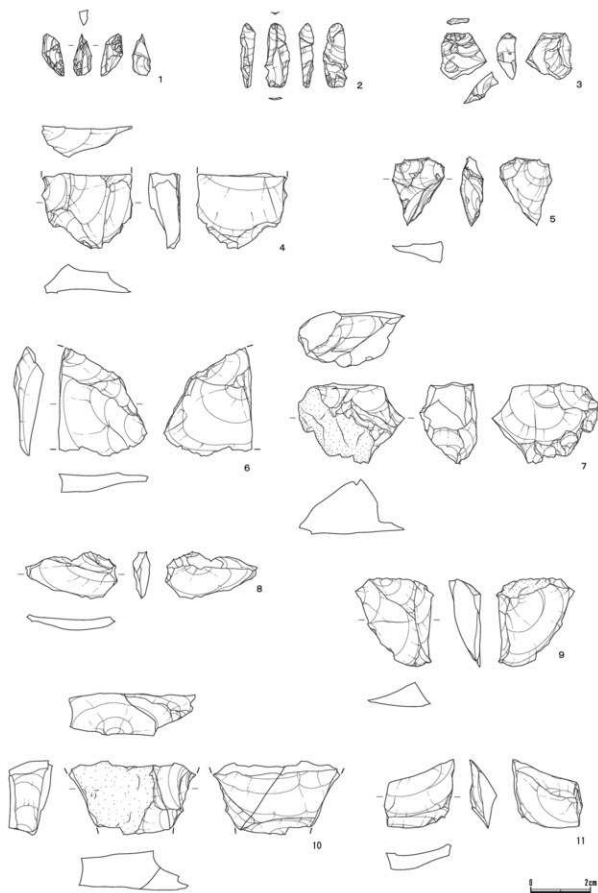
1はナイフ形石器の先端部である。左右側縁に裏面からの剥離が施され、正面の稜上から剥離が施されている。裏面は素材面のみである。石材はチョコレート色の珪質頁岩である。2・3は黒曜石製の楔形石器である。2は、上下両端が擦れたように潰れた稜線となっている。上下方向の剥離面が認められる。正面右方向の剥離面は、上下方向の剥離面と風化具合が異なり、ややくすんだ面である。3の上端面は、擦れたようにくすんだ面である。正面稜線の一部が擦れて潰れたようになっている。4・5は二次加工の有る剥片である。4は黒色安山岩で、裏面下端部に剥離が施されている。5は黒曜石で、裏面から側面部に剥離が施される。6～11は黒色安山岩製の剥片である。6・7・9・10に原礫面が観察される。10は上下両端が欠損しており、折面で接合が認められる。12は黒色安山岩製の石核である。上面に原礫面が認められる。剥離面の観察から、不定形剥片が作出されている。13～15は黒曜石製で、互いに接合し、16(接合資料1)となる。13は剥片、14は側縁に微細剥離の有る剥片、15は剥片素材の石核であり、上部と右側面部を折損している。剥離順序は13→(14の背面の剥離面)→14→(14と15との隙間)→16(石核)である。15は16の折損面を打面として剥離されている。



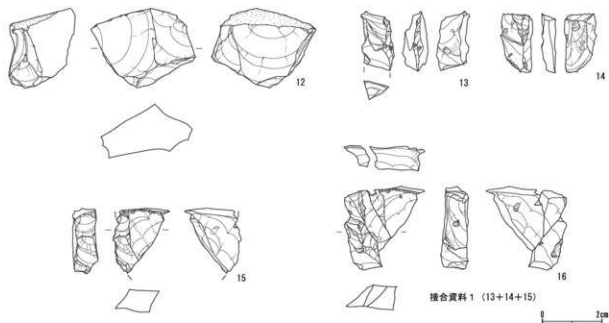
第5図 2号石器集中地点-器種別分布図-(1/40)



第6図 2号石器集中地点—石材別分布図—(1/40)



第7図 2号石器集中部出土石器1(4/5)



第8図 2号石器集中部出土石器2 (4/5)

図版番号	器種	石材	遺存状況	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第7図1	ナイフ形石器	珩質頁岩	先端部	1.46	0.60	0.81	0.5	
第7図2	楔形石器	黒曜石	完形	1.40	0.84	0.49	0.7	
第7図3	楔形石器	黒曜石	完形	1.52	1.51	0.69	1.7	
第7図4	二次加工の有る剥片	黒色安山岩	上部欠	(2.51)	2.89	1.15	7.4	
第7図5	二次加工の有る剥片	黒曜石	打面欠	(1.84)	2.10	0.71	1.6	
第7図6	剥片	黒色安山岩	左側欠	3.31	(2.72)	1.03	6.4	礫面あり
第7図7	剥片	黒色安山岩	完形	2.70	3.62	1.86	15.6	礫面あり
第7図8	剥片	黒色安山岩	完形	1.44	2.96	0.40	1.7	
第7図9	剥片	黒色安山岩	完形	2.85	2.77	0.84	5.4	礫打面
第7図10	剥片	黒色安山岩	上下欠	(2.52)	4.27	1.49	12.4	礫面あり
第7図11	剥片	黒色安山岩	完形	2.14	2.28	0.82	3.0	
第8図12	石核	黒色安山岩	完形	2.37	3.52	2.58	17.2	
第8図13	剥片	黒曜石	下部欠	1.88	1.22	0.85	1.4	接合資料1
第8図14	微細剝離の有る剥片	黒曜石	完形	1.97	1.08	0.50	1.1	接合資料1
第8図15	石核	黒曜石	右側欠	21.05	18.78	9.28	2.6	接合資料1 / 微細剝離有り / 剥片素材の石核

図版番号	接合%	石材	遺存状況	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第8図16	接合資料1	黒曜石	—	2.72	2.68	0.88	5.20	13+14+15と接合

(単位: cm, g)

第3表 2号石器集中地点出土の石器一覧

第3節 古墳時代後期・平安時代の遺構・遺物

(1) 概要

古墳時代の遺構は、後期の住居跡3軒(20～22H)が検出された。住居跡の分布は、3軒が調査区北東隅にまとまっており、すべて7世紀中葉と同時期に存在していた可能性がある。

平安時代の遺構は、溝跡1本(20M)が検出された。20Mはおおよそ東西方向に走向角度をもつ断面形が箱葉研形を呈するものである。

(2) 住居跡

20号住居跡

遺 構 (第9図)

[位 置] (C・D-4) グリッド。

[検出状況] 105～107・110Dに切られる。

[構 造] 平面形：方形か。規模：不明/確認面からの深さ55cm前後。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝：上幅12～20cm/下幅5～15cm/深さ6～12cm。床面：住居内側に硬化した面が確認できた。

柱穴：P1・P2が主柱穴と思われる。P1はほとんどが調査区外にあり詳細不明。P2は深さ59cm。

[覆 土] 10層に分層できた。

[遺 物] 土師器環形土器が出土した。その他、炭化種実2点(モモ)が出土した。

[時 期] 古墳時代後期(7世紀中葉)。

遺 物 (第10図、第4表)

[土 器] (第10図1～3、第4表)

1～3は土師器環形土器である。

21号住居跡

遺 構 (第11図)

[位 置] (D・E-4) グリッド。

[検出状況] 住居の東側～北側は調査区域外である。

[構 造] 平面形：方形か。規模：不明×5.14m/確認面からの深さ47～53cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：不明。壁溝：上幅12～20cm/下幅5～9cm/深さ7～15cm。床面：住居中央部に硬化面が確認できた。カマド：北壁に位置し、北側は調査区域外である。主軸方位はN-20°-W

／幅130cm。灰褐色粘土により、袖部と天井部が構築されていたと考えられる。燃焼部は15cm程窪んでいた。貯蔵穴：北西コーナーに位置する。平面形は隅丸長方形。長軸85cm/短軸76cm/深さ67cm。

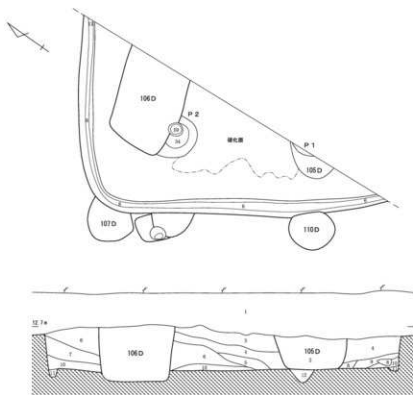
周囲に5cm程の段を有する。柱穴：P1・P2が主柱穴と思われる。深さ65・62cm。

[覆 土] 11層に分層できた。

[遺 物] カマド右袖から貯蔵穴にかけて土器がまとまって出土した。

[時 期] 古墳時代後期(7世紀中葉)

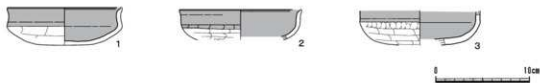
遺 物 (第12図、第5表)



- 1層 跡面上。
- 2層 緑褐色土 ローム粒子を僅かに含む、105D層上。
- 3層 緑褐色土 ローム粒子を僅かに含む。
- 4層 赤褐色土 ローム粒子を僅かに含む。
- 5層 緑褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 6層 赤褐色土 ローム小ブロックを含む。
- 7層 赤褐色土 ローム小ブロックを含む。
- 8層 緑褐色土 盛土ブロック。
- 9層 緑褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、盛土ブロックを含む。
- 10層 緑褐色土 ローム粒子を多く含む。
- 11層 緑褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 12層 緑褐色土 ローム粒子を多く含む。



第9図 20号住居跡・105号土坑(1/60)



第10図 20号住居跡出土遺物(1/4)

[土 器] (第12図1～6、第5表)

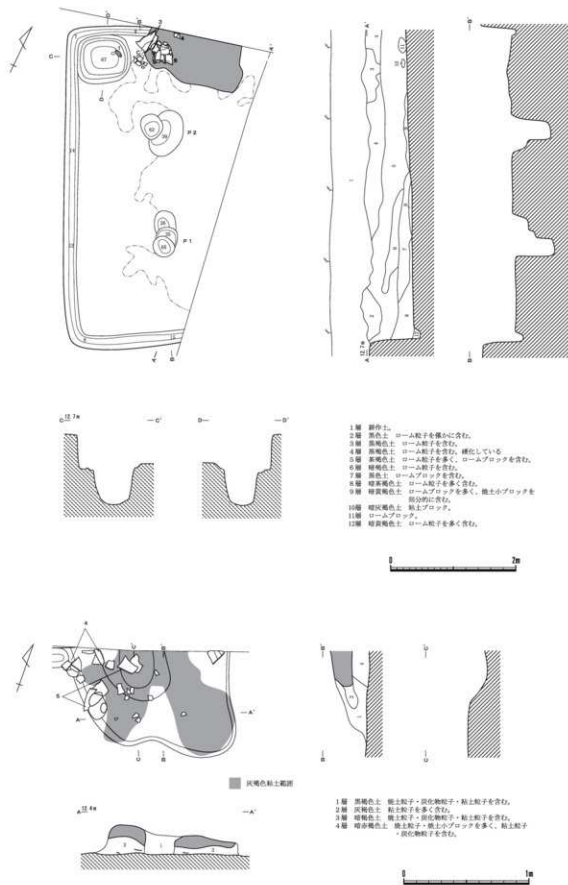
1・2は土師器坯形土器、3～5は土師器甕形土器、6は土師器甕形土器である。

22号住居跡

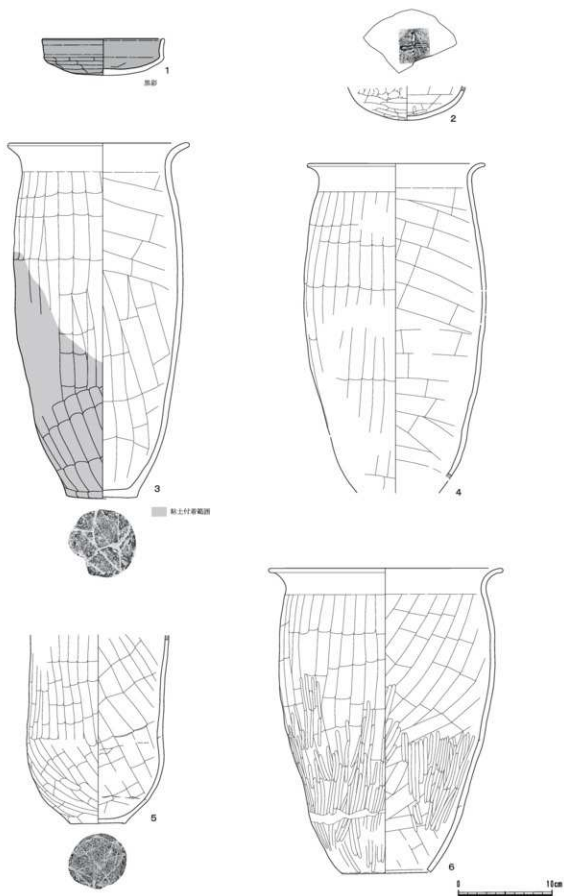
遺 構 (第13～15図)

[位 置] (D-3・4) グリッド。

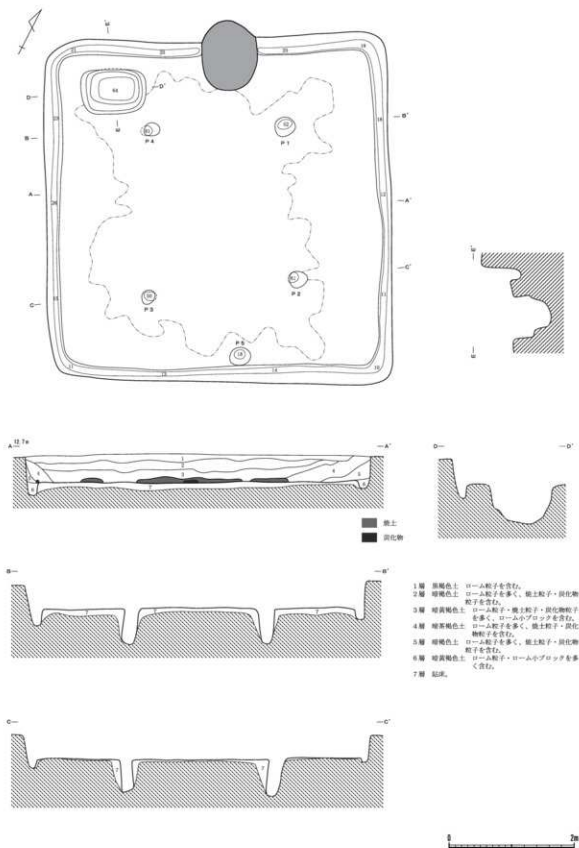
[構 造] 平面形：方形。規模：長軸5.55m/短軸5.50m/確認面からの深さ40～48cm。壁：東壁



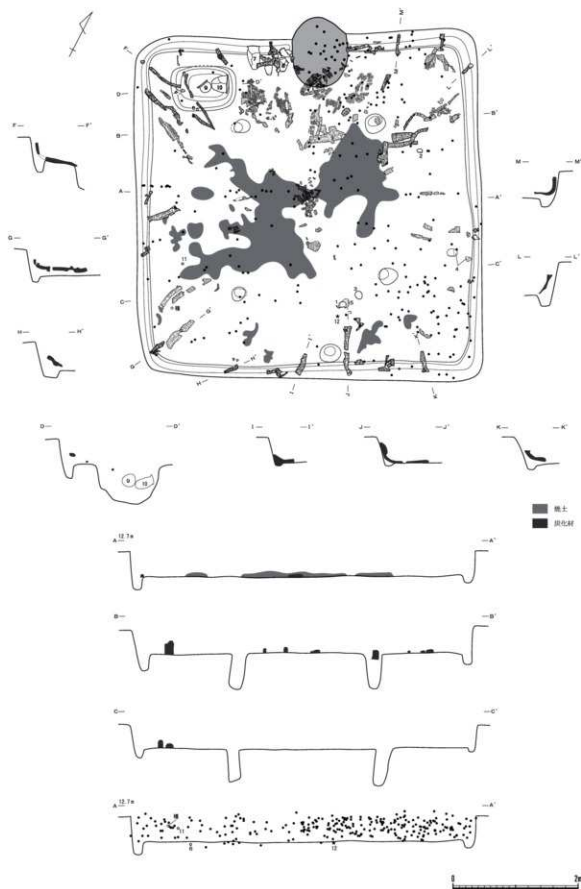
第11図 21号住居跡・カマド(1/60・1/30)



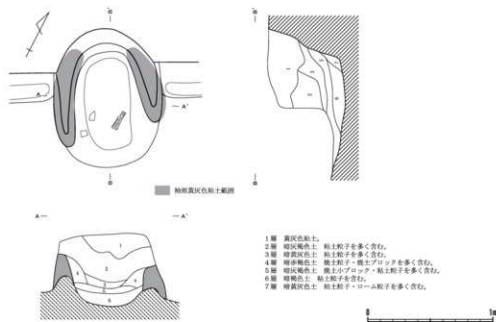
第12図 21号住居跡出土遺物(1/4)



第13図 22号住居跡(1/60)



第14図 22号住居跡遺物・炭化材出土状態(1/60)



第15図 22号住居跡カマド(1/30)

はほぼ垂直に立ち上がるが、それ以外は75°程の角度で立ち上がる。長軸方位：N-30°-W。壁溝：上幅12~20cm/下幅8~12cm/深さ10~26cm。床面：住居中央に硬化した面が確認できた。カマド：北壁のほぼ中央に位置する。主軸方位はN-28°-W。長さ108cm/幅85cm/壁への掘り込み30cm。袖部はロームを馬蹄形状に掘り残し、その上に粘土を被覆して構築されたと思われる。貯蔵穴：北西コーナーに位置する。平面形は隅丸長方形。長軸105cm/短軸74cm/深さ64cm。柱穴：P1~P4が支柱穴と思われる。深さ50~61cm。入口施設：P5が入口梯子穴と考えられる。深さ18cm。

〔覆 土〕 6層に分層できた。

〔遺 物〕 住居全体の広い範囲から土器が出土した。また、滑石製の勾玉未製品1点が出土した。

〔時 期〕 古墳時代後期(7世紀中葉)。

〔所 見〕 床面及び広い範囲から炭化材が検出されたことから、焼失住居と思われる。炭化材の樹種同定の分析結果は、付編130ページを参照。

〔遺 物〕 (第16図、第6表)

〔土 器〕 (第16図1~11、第6表)

1~6は土師器坏形土器、7・8は土師器甕形土器、9は土師器鉢形土器、10は土師器甕形土器、11は須恵器坏蓋形土器である。

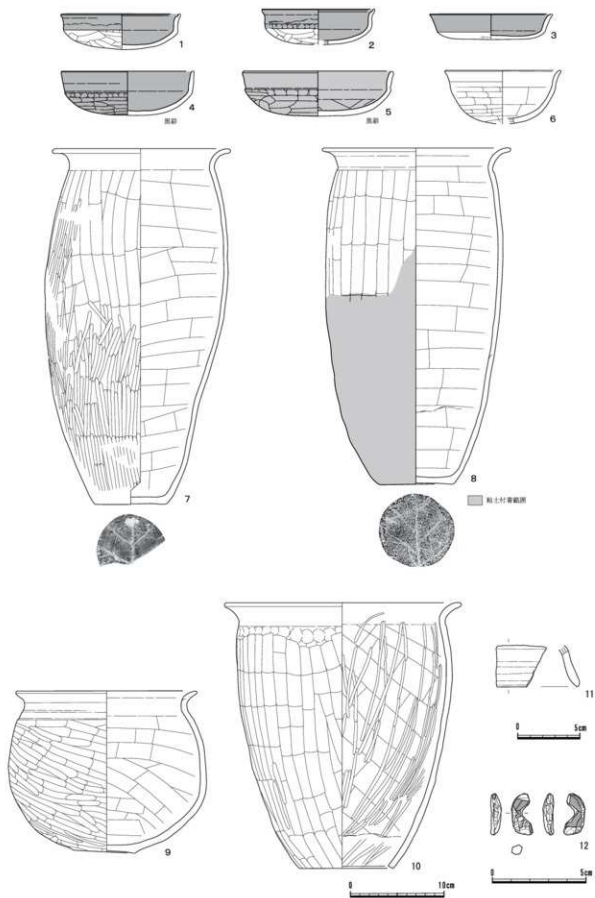
〔石製品〕 (第16図12)

12は滑石製の勾玉である。未成品と思われる。長さ2.2cm・最大幅1.6cm・厚さ5.5cm・重さ1.6g。表面には粗い成形痕が観察できる。

(3) 溝 跡

20号溝跡

〔遺 構〕 (第17図)



第16図 22号住居跡出土遺物(1/4・1/3・1/2)

検出番号	器種	法量 (cm)	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第10図1	土師器 環	高 4.0 口 12.2	いわゆる比企型環/内面口唇部に沈線あり/口縁部と底部との境に稜をもつ/内面及び口縁部外面は赤彩が施される/人間系土師器	胎土は暗赤褐色	茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面:口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	覆土中	60%
第10図2	土師器 環	高 [3.2] 口 (12.8)	いわゆる比企型環/口唇部に沈線あり/口縁部と底部との境に稜をもつ/内面及び口縁部外面は赤彩が施される/人間系土師器	胎土は暗赤褐色	砂粒・小石を含む	内面:口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	覆土中	10%未満
第10図3	土師器 環	高 [3.7]	いわゆる有肩環/口縁部と底部との境に段をもつ/内面及び口縁部外面は赤彩が施される	胎土は淡黄褐色	砂粒を多く、石英・角閃石を含む	内面:口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、底部は粗いヘラ削り/外面口縁部直下に指頭成形痕が残る	覆土中	20%

第4表 20号住居跡出土土器一覽

検出番号	器種	法量 (cm)	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第12図1	土師器 環	高 3.9 口 13.0	いわゆる有肩環/口縁部は直立尖味にやや外反する/口縁部と底部との境に段をもつ/全面黒彩/在地系土師器	胎土は暗褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母・小石を含む	内面:口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	貯蔵穴	完形品
第12図2	土師器 環	高 [3.7]	有縁杯か/口縁部を欠損する/無彩/内面底部には十字状の線刻か/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子を含む	内面:底部はヘラナデ/外面:ヘラ削り/外面口縁部直下に指頭成形痕が残る	覆土中	底部のみ40%
第12図3	土師器 甕	高 37.6 口 19.2 底 7.6	長甕/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境はスムーズ/最大径は口縁部にもつ/外面に粘土付着/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ	カマド左 袖上部	70%
第12図4	土師器 甕	高 [34.8] 口 18.8	長甕/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境はスムーズ/最大径は胴部位にもつ/外面に粘土付着/在地系土師器	暗褐色	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラナデ(スリッパ)	カマド左 袖の上部	口縁部～胴部 下半 60%
第12図5	土師器 甕	高 [20.0] 底 5.8	長甕/胴部下半に凹みをもつ/底部に木炭灰あり/外面に粘土付着/在地系土師器	暗茶褐色	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母・小石を僅かに含む	内面:ヘラナデ/外面:ヘラ削り	カマド内 部～底 部60%	胴部中 部～底 部60%
第12図6	土師器 甕	高 32.4 口 24.8 底 9.4	底部は筒板け式/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境はスムーズ/最大径は口縁部/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内外面:口縁部は横ナデ、以下は粗いヘラナデ(外面はスリッパか)後胴部に粗いヘラ磨き調整	カマド左 袖上部	ほぼ完 形品

第5表 21号住居跡出土土器一覽

検出番号	器種	法量 (cm)	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第16図1	土師器 環	高 3.8 口 12.6	いわゆる比企型環/内面口唇部に沈線あり/口縁部と底部との境に稜をもつ/内面及び口縁部外面は赤彩が施される/人間系土師器	胎土は暗赤褐色	砂粒・小石を多く含む	内面:口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り/外面口縁部直下に指頭成形痕が僅かに残る	住居中央 から北壁 寄りの床 面上	ほぼ完 形品
第16図2	土師器 環	高 [3.8] 口 (12.0)	いわゆる比企型環/内面口唇部に沈線あり/口縁部と底部との境に稜をもつ/内面及び口縁部外面は赤彩が施される/人間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	砂粒・小石をやや多く含む	内面:横ナデ、底部はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り/外面口縁部直下に指頭成形痕が残る	住居中央 から北壁 寄りの床 面上	30%
第16図3	土師器 環	高 2.7 口 (13.0)	いわゆる比企型環/扁平タイプ/内面口唇部に沈線あり/口縁部と底部との境に稜をもつ/内面及び口縁部外面は赤彩/人間系土師器	胎土は暗赤褐色	茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面:横ナデ、底部はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	住居中央 から北壁 寄りの床 面上	60%

第6表 22号住居跡出土土器一覽(1)

図号	器種	法量 (cm)	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第16図4	土師器 杯	高 4.7 口 14.1	いわゆる有段杯/口縁部は外傾する/口縁部と底部との境に段をもつ/全面黒彩/在地系土師器	胎土は暗褐色を基調	砂粒をやや多く含む	内面:回転ナデ/外面:口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面口縁部直下に指頭成形痕が残る	東壁近くの床面上	80%
第16図5	土師器 杯	高 4.8 口 16.0	いわゆる有段杯/口縁部は外傾する/口縁部と底部との境に段をもつ/全面黒彩と思われる/在地系土師器	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、石英・角閃石・金雲母を僅かに含む	内面:口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面口縁部直下に指頭成形痕が残る	住居中央から北壁寄りの床面上	70%
第16図6	土師器 杯	高 5.7 口 (12.3)	深身タイプ/口縁部は外反する/口縁部と体部の境に稜をもつ/無彩/在地系土師器	明黄褐色	砂粒をやや多く含む	内面:口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ	貯蔵穴の南側床面上	30%
第16図7	土師器 甕	高 37.6 口 18.9 底 7.6	長身/口縁部は外反する/最大径は胴部上半にもつ/底部に木葉痕あり/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を含む	内面:口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ後傾いへら削り調整	カマド左側の床面上	60%
第16図8	土師器 甕	高 35.6 口 20.0 底 7.9	長身/口縁部は外反する/口縁部と体部の境に段をもつ/最大径は口縁部にもつ/外面に粘土付着/底部に木葉痕あり/在地系土師器	暗褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ後削り調整	カマド左側の床面上	90%
第16図9	土師器 鉢	高 17.1 口 19.1 底 6.5	口縁部はやや「コ」の字状/最大径は胴部下半にもつ/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下は斜方向にヘラナデ	貯蔵穴内	完形品
第16図10	土師器 甕	高 28.1 口 25.8 底 9.8	筒抜け式/口縁部は外反する/最大径は口縁部にもつ/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ後へら磨き調整/外面:口縁部は横ナデ、以下はいいいなヘラナデ(スリッパか)/外面口縁部直下に指頭成形痕が残る	貯蔵穴内	完形品
第16図11	須恵器 杯蓋	高 [3.3]	無蓋高杯の可能性あり/外面天井部と口縁部との境に稜をもつ/内面に自然輪がかかる	灰白色を基調	砂粒を含む	ロクロ目	覆土中	口縁部小破片

第6表 22号住居跡出土土器一覧(2)

[位置] (B・C-1~4) グリッド。

[構造] 100 Dに切られる。規模:調査区を直線的に横断する状況で走行しており、確認できる範囲では、長さ28.6m/上幅110~138cm/下幅32~44cm/深さ52~70cm。断面形は整った箱葉研状で、溝底は平坦である。壁の立ち上がりは65°前後である。走向方位: N-85°-W。

[覆土] 4層に分層できた。

[遺物] 弥生時代後期~古墳時代前期、古墳時代中・後期、平安時代の土器が出土した。

[時期] 平安時代(9世紀後葉)。

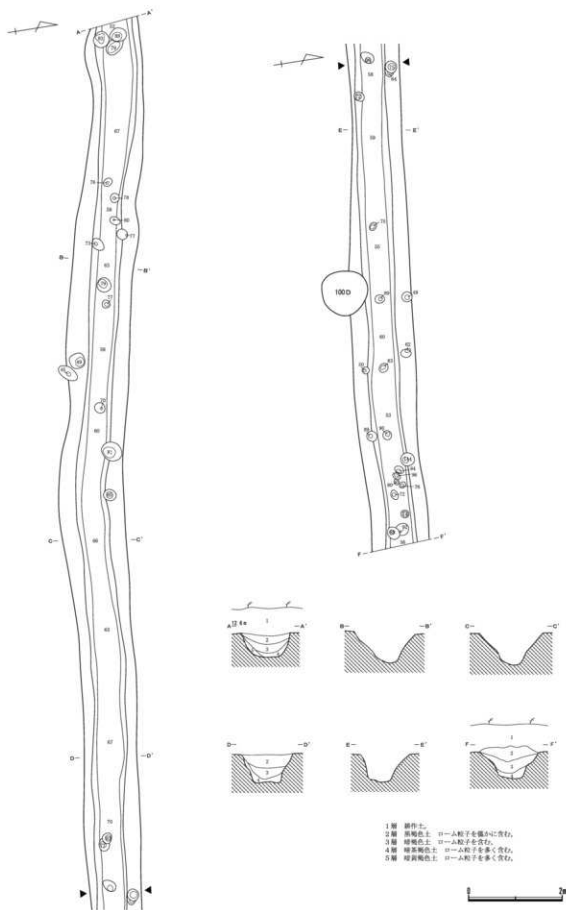
[所見] 出土遺物の時期にばらつきがあるが、特に中世以降の陶磁器類は出土していなかったことを重視し、ここでは最新の遺物から平安時代の遺構として取り扱った。

遺物 (第18図1~3・5・11・14~17、図版9-1、第7表)

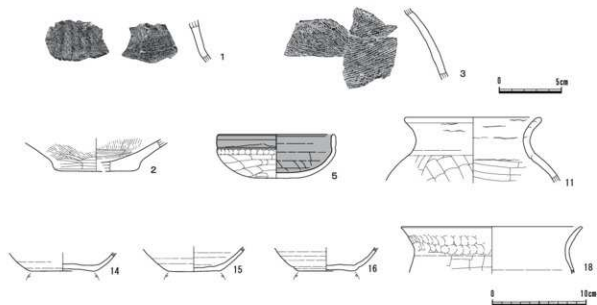
1~3は、弥生時代後期~古墳時代前期の土器で、1は高環形土器、2は壺形土器、3は甕形土器。

4~13は、古墳時代中・後期の土器で、4は土師器高環形土器、5~9は土師器環形土器、10~12は土師器甕形土器、13は土師器甕形土器である。

14~19は、平安時代の土器で、14~16は須恵器環形土器、17~19は土師器甕形土器である。



第17図 20号溝跡(1/80)



第18図 20号溝跡出土遺物(1/3・1/4)

碑図番号 図版番号	器種	法量 (cm)	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	時期
第18図1 図版9-1-1	高杯	高[3.2]	脚台部/脛部は広がる/外面赤彩	胎土は暗黄褐色	黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	内面: ハケ目調整/外面: ヘラ磨き調整	甕土中	脚台部破片	弥生後期~古墳前期
第18図2 図版9-1-2	甕	高[3.0] 底[9.0]	平底/裏面がやや摩耗しており赤彩かどうかは不明	暗茶褐色	砂粒をやや多く含む	内外面: ハケ目調整	甕土中	胴部下半~底部30%	弥生後期~古墳前期
第18図3 図版9-1-3	甕	—	頸部~胴部上半/頸部はややくびれる	暗褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子を含む	内面: ヘラナデ/外面: ハケ目調整	甕土中	頸部~胴部上半破片	弥生後期~古墳前期
図版9-1-4	土師器高杯	高[3.5]	有段高杯/脛部は外反する/内外面赤彩/人間系土師器か	胎土は暗黄褐色	砂粒をやや多く、角閃石・小石を含む	内外面: 横ナデ	甕土中	脚台部破片	古墳中期(5c中葉)
第18図5 図版9-1-5	土師器環	高4.7 口[12.4]	有段環/口縁部と底部の境に強い段をもつ/内外面赤彩/外面口縁部は赤彩	胎土は暗黄褐色	砂粒を多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面: 口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面: 口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り/外面口縁部直下に指面押痕に成形痕が僅かに残る	甕土中	40%	古墳後期(6c前葉)
図版9-1-6	土師器環	—	底部小破片/内面及び外面体部上半に赤彩/いわゆる比企型環/人間系土師器	胎土は暗赤褐色	砂粒・小石を含む	内面: 横ナデ/外面: ヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	甕土中	底部小破片	古墳後期(6c前葉)
図版9-1-7	土師器環	高[3.5]	口縁部と底部との境に段/口縁部途中に横/内外面黒彩/いわゆる有段口縁環	胎土は淡茶褐色	砂粒をやや多く、石英・角閃石を含む	内面: 口縁部は横ナデ/外面: 口縁部は横ナデ	甕土中	口縁部~底部破片	古墳後期(7c前~中葉)
図版9-1-8	土師器環	高[3.8]	口縁部と底部との境に段/口縁部途中に横/内外面黒彩/いわゆる有段口縁環	胎土は暗茶褐色	砂粒を含み、石英・角閃石を僅かに含む	内面: 口縁部は横ナデ/外面: 口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	甕土中	口縁部~底部破片	古墳後期(7c前~中葉)
図版9-1-9	土師器環	高[3.7]	有段環/口縁部と底部との境に段をもつ/内外面黒彩/いわゆる須恵系環身横環	胎土は灰茶褐色	砂粒を含み、角閃石・雲母を僅かに含む	内面: 口縁部は横ナデ/外面: 口縁部は横ナデ	甕土中	口縁部~底部破片	古墳後期(7c前~中葉)
図版9-1-10	土師器甕	高[3.0]	長甕/口縁部は外反する/在地系土師器	黄褐色	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	内外面: 横ナデ	甕土中	口縁部破片	古墳後期(7c中葉)
第18図11 図版9-1-11	土師器甕	高[7.0] 口[14.6]	丸甕/口縁部は外反する/在地系土師器	黄褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・小石を僅かに含む	内面: 口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面: 口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデ	甕土中	口縁部~胴部上半20%	古墳後期(7c中葉)
図版9-1-12	土師器甕	高1.8	丸甕か/平底/在地系土師器	黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	内面: ヘラナデ/外面: ヘラ削り	甕土中	底部破片	古墳後期(7c中葉)

第7表 20号溝跡出土土器一覧(1)

検出番号 図版番号	器種	法量 (cm)	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	時期
図版9-1-13	土師器 甕	高 [3.8]	筒抜け式/底部は面取りに より平坦	黄褐色	砂粒をやや多く、 角閃石・雲母を含む	内面：ヘラナデ/外面： ヘラ削り後ナデ	覆土中	底部破片	古墳後期 (7c前～ 中葉)
第18図14 図版9-1-14	須恵器 環	高 [2.0] 底 6.6	平底/未野製品	灰白色	砂粒・小石を やや多く、石 英・角閃石・ 片岩を含む	ロクロ成形/ロクロ回 転は右回転/底部に回 転糸切り痕が残る	覆土中	体部下平 ～底部 80%	平安時代 (9c中葉)
第18図15 図版9-1-15	須恵器 環	高 [2.6] 底 5.6	平底/東金子製品	灰色	白色砂粒・小 石を含む	ロクロ成形/ロクロ回 転は右回転/底部に回 転糸切り痕が残る	覆土中	体部中位 ～底部 60%	平安時代 (9c後葉)
第18図16 図版9-1-16	須恵器 環	高 [2.5] 底 6.0	平底/船山製品	灰色	白色砂粒・白 色針状物質を 含む	ロクロ成形/ロクロ回 転は右回転/底部に回 転糸切り痕が残る	覆土中	体部下平 ～底部 40%	平安時代 (9c後葉)
第18図17 図版9-1-17	土師器 甕	高 [5.0] 口 [19.2]	口縁部は外反する/いわゆ る武蔵型甕	暗茶褐色	砂粒をやや多 く、角閃石を 含む	内面：口縁部は横ナ デ。以下はヘラナデ/ 外面：口縁部は横ナデ、 以下はヘラ削り	覆土中	口縁部～ 胴部 20%	平安時代 (9c中～ 後葉)
図版9-1-18	土師器 甕	高 [5.1]	口縁部は「コ」の字状/い わゆる武蔵型甕	暗茶褐色	砂粒をやや多 く、角閃石を 僅かに含む	内面：口縁部は横ナ デ。以下はヘラナデ/ 外面：口縁部は横ナデ、 以下はヘラ削り	覆土中	口縁部～ 胴部上平 破片	平安時代 (9c後葉)

第7表 20号溝跡出土土器一覧(2)

第4節 中世以降の遺構・遺物

(1) 概要

中世以降の遺構としては、土坑47基(89～135 D)、井戸跡1基(2 W)、溝跡1本(21 M)である。土坑のうち、130 Dは地下室の形態をもつ。また、100・134 Dは倒木痕の可能性がある。

なお、各遺構の時代設定は、本報告に掲載した遺物の中の陶磁器・土器の年代を中心に詳細年代を明示し、それ以外は中世以降と表記した。

(2) 土坑

ここでは、平面形及び細部の形態的な特徴を、城山遺跡第42地点で報告された分類基準に当てはめて説明することにする(尾形・深井・青木 2005)。基本構造については、第8表を参照。

A群 方形の土坑 0基

- 1類 袋状の構造を呈する 0基
- 2類 袋状の構造ではなく、単純構造を呈する 0基

B群 長方形の土坑 17基(1類-3基、2類-8基、3類-6基、4類-0基)

- 1類 溝状土坑 3基(108・109・132 D)
- 2類 幅狭の長方形土坑 8基(89・95・99・106・113・114・122・129 D)
- 3類 幅広の長方形土坑 6基(93・94・101～103・119 D)
- 4類 火床部を有する土坑 0基

C群 円形・楕円形の土坑 28基(90～92・96～98・100・104・105・107・110～112・115～118・120・121・123～128・131・133・135 D)

D群 不整形の土坑 1基(134 D)

E群 地下室・地下坑 1基(1類-1基、2類-0基)

1類 1 竪坑1 主体部タイプ 1基 (130 D)

2類 特殊タイプ 0基

A群 方形の土坑

今回の調査では該当する土坑はなかった。

B群 長方形の土坑

17基検出された。4類は検出されなかった。なお、今回、B群において、遺物出土のないものは、第3図の全測図と第8表を参照とするのみで、個々の説明及び詳細図については割愛することにした。

1類 溝状土坑

108・109・132 Dの3基が該当する。ここでは詳細図を割愛するが、(D・E-2・3) Gにおおよそ南北に主軸方向をもつもの(108 D・132 D)と東西に主軸方向をもつもの(109 D)が分布する状況である。

2類 幅狭の長方形土坑

89・95・99・106・113・114・122・129 Dの8基が該当する。本類は1類より長軸が短いというだけで、厳密には1類との区分は困難であると言える。調査区全体に散在的に集中する傾向ではない。

ここでは、出土遺物があった89 Dのみ説明することにする。

89号土坑

遺 構 (第19図、第8表)

[位 置] (B-1) グリッド。

[構 造] 平面形：長方形。規模：217×98 cm / 深さ44 cm。坑底は平坦で、壁は75°の角度で立ち上がる。北西壁には約50°の傾きをもつピット状の掘り込みが確認できた。長軸方位：N-80°-E。

[覆 土] 5層に分層できた。

[遺 物] 陶磁器が出土した。

[時 期] 近世(17世紀)。

遺 物 (図版9-2、第9表)

[陶 磁 器] (図版9-2-1・2、第9表)

1は磁器、2は陶器である。

3類 幅広の長方形土坑

93・94・101~103・119 Dの6基が該当する。調査区の南東部分の(B・C-3・4)グリッド内にややまとまって分布している。

C群 円形・楕円形の土坑

90~92・96~98・100・104・105・107・110~112・115~118・120・121・123~128・131・133・135 Dの28基が該当する。調査区の中央の(C-2~4)グリッドからややまとまって

分布している傾向である。

90号土坑

遺構 (第3図、第8表)

[位置] (B-1) グリッド。

[構造] ビット状の掘り込み。平面形：楕円形。規模：87×73cm/深さ33cm。断面は碗状を呈する。長軸方位：N-13°-E。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 中世以降。

91号土坑

遺構 (第3図、第8表)

[位置] (B-1) グリッド。

[構造] ビット状の掘り込み。平面形：楕円形。規模：78×61cm/深さ34cm。断面は碗状を呈する。長軸方位：N-34°-E。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 中世以降。

92号土坑

遺構 (第3図、第8表)

[位置] (B-2) グリッド。

[構造] ビット状の掘り込み。平面形：楕円形。規模：73×68cm/深さ44cm。長軸方位：N-68°-E。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 中世以降。

96号土坑

遺構 (第3図、第8表)

[位置] (B-3・4) グリッド。

[構造] 平面形：楕円形。規模：112×82cm/深さ19cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-10°-E。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 中世以降。

97号土坑

遺構 (第21図、第8表)

[位置] (B-3・4) グリッド。

[構造] 平面形：円形。規模：82×80cm/深さ22cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

長軸方位：N-21°-E。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 中世以降。

98号土坑

遺構 (第21図、第8表)

[位置] (B-3・4) グリッド。

[構造] 平面形：円形。規模：103×102cm/深さ27cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-40°-W。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 中世以降。

100号土坑

遺構 (第21図、第8表)

[位置] (B-3) グリッド。

[構造] 20Mと重複。平面形：楕円形。規模：97×95cm/深さ88cm。坑底は凸凹しており、壁はほぼ垂直に立ち上がり、形状は円筒形を呈する。長軸方位：N-16°-W。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 中世以降。

[所見] 倒木痕の可能性はある。

104号土坑

遺構 (第21図、第8表)

[位置] (B-3) グリッド。

[構造] 平面形：円形。規模：126×123cm/深さ29cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-80°-W。

[覆土] 2層に分層される。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 中世以降。

105号土坑

遺構 (第3図、第8表)

[位置] (C-4) グリッド。

[構造] 20Hを切り、東側は調査区外にある。ピット状の掘り込みであるが、規模等の詳細不明。平面形：楕円形か。規模：不明。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 中世以降。

107号土坑

遺構 (第3図、第8表)

位置 (D-4) グリッド。

構造 20Hを切る。ビット状の掘り込み。平面形：楕円形か。規模：不明×70cm/深さ53cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、形状は円筒形を呈する。長軸方位：N-45°-W。

遺物 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

時期 中世以降。

110号土坑

遺構 (第3図、第8表)

位置 (C-4) グリッド。

構造 20Hを切る。ビット状の掘り込み。平面形：楕円形か。規模：70×67cm/深さ32cm。坑底はほぼ平坦で、壁は80°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-4°-E。

遺物 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

時期 中世以降。

111号土坑

遺構 (第3図、第8表)

位置 (C-4) グリッド。

構造 平面形：楕円形。規模：86×73cm/深さ21cm。坑底は平坦で、壁は75°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-85°-W。

遺物 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

時期 中世以降。

112号土坑

遺構 (第3図、第8表)

位置 (C-4) グリッド。

構造 平面形：楕円形。規模：75×72cm/深さ28cm。坑底は平坦で、壁は80°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-26°-W。

遺物 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

時期 中世以降。

115号土坑

遺構 (第21図、第8表)

位置 (C-3) グリッド。

構造 平面形：円形。規模：70×68cm/深さ66cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、形状は円筒形を呈する。長軸方位：N-12°-W。

遺物 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時 期] 中世以降。

116号土坑

遺 構 (第3図、第8表)

[位 置] (C-3) グリッド。

[構 造] ビット状の掘り込み。平面形：楕円形。規模：84×80cm/深さ48cm。壁は65°の角度で立ち上がる。長軸方位：E-W。

[遺 物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時 期] 中世以降。

117号土坑

遺 構 (第3図、第8表)

[位 置] (D-3) グリッド。

[構 造] 平面形：円形。規模：74×72cm/深さ32cm。壁はほぼ垂直に立ち上がり、形状は円筒形を呈する。長軸方位：N-86°-E。

[遺 物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時 期] 中世以降。

118号土坑

遺 構 (第21図、第8表)

[位 置] (C-3) グリッド。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：71×68cm/深さ32cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、形状は円筒形を呈する。長軸方位：N-14°-W。

[遺 物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時 期] 中世以降。

120号土坑

遺 構 (第3図、第8表)

[位 置] (C-3) グリッド。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：80×77cm/深さ32cm。坑底はほぼ平坦で、壁は55～70°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-25°-E。

[遺 物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時 期] 中世以降。

121号土坑

遺 構 (第3図、第8表)

[位 置] (C-3) グリッド。

[構 造] 122Dと重複。平面形：楕円形。規模：136×93cm/深さ22cm。坑底は平坦で、壁は50°

の角度で立ち上がる。長軸方位：N-82°-W。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 中世以降。

123号土坑

遺構 (第21図、第8表)

[位置] (C-2・3) グリッド。

[構造] 21Mと重複。ビット状の掘り込み。平面形：楕円形。規模：80×74cm/深さ84cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、形状は円筒形を呈する。長軸方位：N-65°-W。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 中世以降。

124号土坑

遺構 (第21図、第8表)

[位置] (C-2) グリッド。

[構造] ビット状の掘り込み。平面形：楕円形。規模：70×62cm/深さ82cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、形状は円筒形を呈する。長軸方位：N-80°-W。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 中世以降。

125号土坑

遺構 (第21図、第8表)

[位置] (C-2) グリッド。

[構造] 21Mと重複。平面形：楕円形。規模：88×55cm/深さ58cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-34°-E。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 中世以降。

126号土坑

遺構 (第21図、第8表)

[位置] (C-2) グリッド。

[構造] 平面形：楕円形。規模：138×102cm/深さ46cm。坑底は南側がやや深くなっている。長軸方位：N-16°-E。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 中世以降。

127号土坑

遺構 (第21図、第8表)

[位置] (C-2) グリッド。

[構造] 平面形：楕円形。規模：92×68cm／深さ45cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-8°-W。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 中世以降。

128号土坑

[遺構] (第3図、第8表)

[位置] (C-2) グリッド。

[構造] 平面形：楕円形。規模：130×128cm／深さ26cm。坑底はほぼ平坦で、壁は70°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-34°-E。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 中世以降。

131号土坑

[遺構] (第3図、第8表)

[位置] (D-3) グリッド。

[構造] 132Dと重複。平面形：円形か。規模：140cm×不明。(深さ)16cm。坑底は平坦である。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 中世以降。

133号土坑

[遺構] (第3図、第8表)

[位置] (C-2) グリッド。

[構造] ビット状の掘り込み。平面形：楕円形。規模：81×78cm／深さ22cm。壁は50°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-68°-W。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 中世以降。

135号土坑

[遺構] (第3図、第8表)

[位置] (C-2) グリッド。

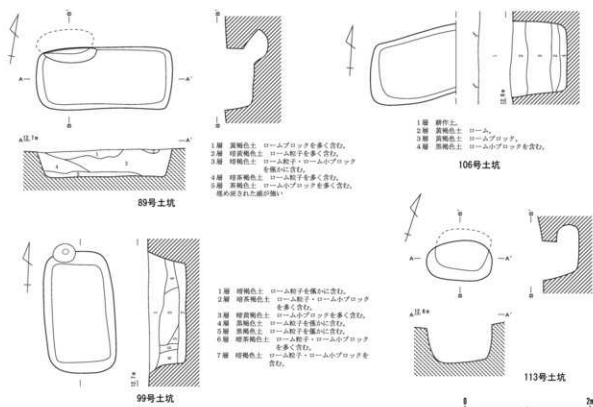
[構造] 平面形：楕円形。規模：110×98cm／深さ14cm。坑底は平坦。長軸方位：N-50°-W。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

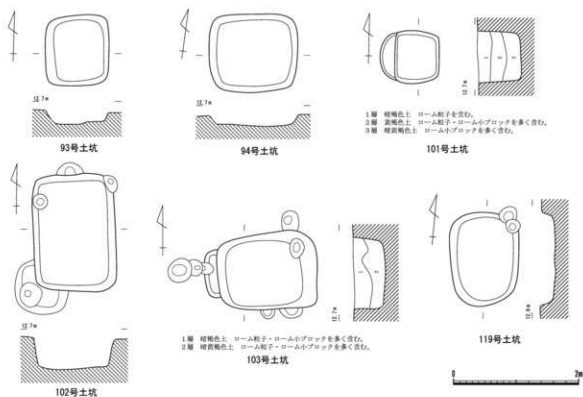
[時期] 中世以降。

D群 不整形の土坑

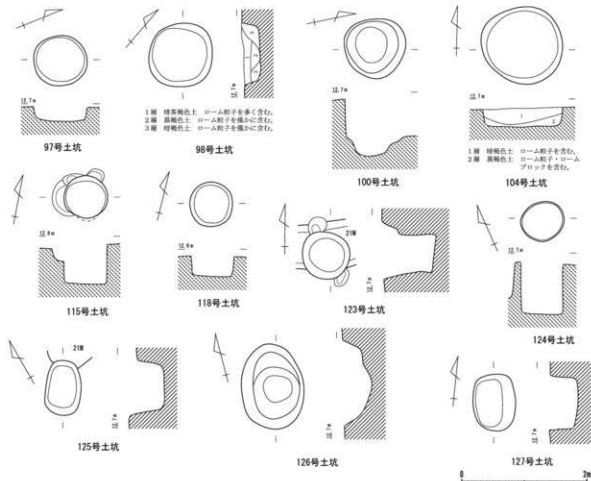
134Dの1基が該当する。今回土坑として捉えたが、おそらく倒木痕であろう。ここでは説明及び詳



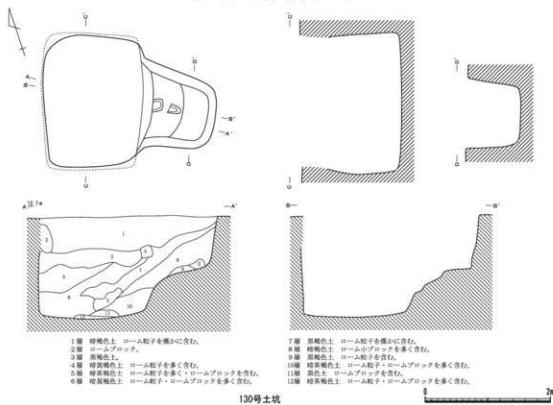
第19図 土坑B群2類 (1/60)



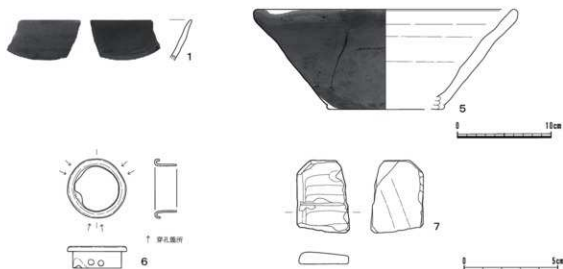
第20図 土坑B群3類 (1/60)



第21図 土坑C群(1/60)



第22図 土坑E群1類(1/60)



第23図 130号土坑出土遺物(1/4・1/2)

細図を割愛することにする。

E群 地下室・地下坑

1類の1 竪坑1 主体部タイプとして、130 Dの1 基が該当する。

130号土坑

遺 構 (第22図、第8表)

[位 置] (C・D-3・4) グリッド。

[構 造] 1 竪坑1 主体部の構造をもつ地下室である。天井部は崩落していた。規模：278×224cm / 最深は主体部の157cm。長軸方位：N-70°-W。

[入口竪坑部] 平面形：長方形。規模：125×120cm / 深さ80cm。壁は垂直に立ち上がる。主体部への連絡は50cm程の高低差がある。坑底には深さ10cm程の小ピットが2箇所見られる。

[主 体 部] 平面形：長方形。規模：218×160cm / 深さ160cm。坑底はほぼ平坦で、奥壁は垂直に立ち上がる。壁面には工具痕が観察できる。長軸方位：N-22°-E。

[覆 土] 12層に分層される。土層は全体に入口竪穴部からの流れ込みが観察でき、主体部内のロームブロックを主体とする5・6層から天井部の崩落の様子がうかがえる。

[遺 物] 陶器、銅製品(不明品)、石製品(砥石)が出土した。

[時 期] 近世(18世紀か)。

遺 物 (第23図、図版9-3、第9表)

[陶 器] (第23図1・5、図版9-3-1~5、第9表)

1~5は陶器である。

[銅 製 品] (第23図6、図版9-3-6)

不明品である。大きさは上端径3.1cm・下端径2.6cm・高1.6cm・厚さ0.1cm・重さ7.0g。側面には2個1単位の孔(径0.2cm)が矢印(→)部分に3箇所穿たれている。

[石 製 品] (第23図7、図版9-3-7)

砥石である。長さ3.8cm・最大幅2.8cm・厚さ0.6cm・重さ10.8g。表裏2面が使用面である。石材は凝灰岩。

(3) 井戸跡

2号井戸跡

遺構 (第24図)

[位置] (B・C-2) グリッド。

[構造] 平面形：楕円形。規模：298×290cm/確認できた深さ340cm。断面は開口部が大きく広がり、深さ150～200cmから下部は径約100cmと細くなっている。長軸方位：N-48°-W。

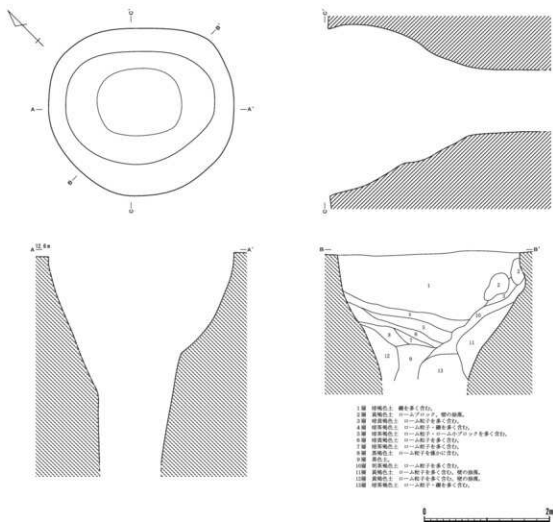
[覆土] 調査を行った箇所まででは13層に分層される。

[遺物] 陶器・石製品(砥石)が出土した。

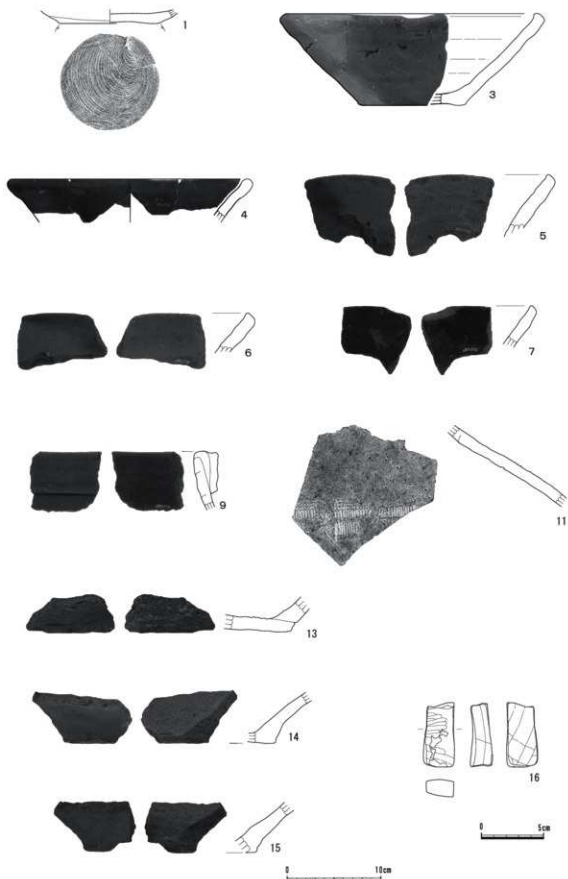
[時期] 中世(14世紀)。

遺物 (第25図、図版10、第9表)

[陶器] (第25図1・3～7・9・11・13～15、図版10-1～15、第9表)



第24図 2号井戸跡(1/60)



第25図 2号井戸跡出土遺物(1/4・1/3)

図版番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)	製作の特徴等	推定産地	時期
図版9-2-1	89 D	磁器	碗	高 [3.2]	青磁/口縁部～体部破片/口唇部は無軸/胎土の色調は灰白色/胎土に黒色粒子を僅かに含む	肥前系	近世(17c)
図版9-2-2	89 D	陶器	鉢	—	胴部破片/内外面に鉄軸/内外面にハケ目成形痕が残る/胎土の色調は灰白色/胎土に茶褐色粒子・小石を含む	瀬戸	近世(17c)
第23図1 図版9-3-1	130 D	陶器	碗	高 [4.5]	口縁部～体部破片/内外面に灰軸/胎土の色調は淡黄褐色/胎土は精練されている/ロクロ成形	瀬戸	近世(18c)
図版9-3-2	130 D	陶器	甕	—	胴部破片/外面に自然軸/胎土の色調は灰色/胎土に白色砂粒・小石を含む/外面に叩き目痕が僅かに残る	常滑	中世
図版9-3-3	130 D	陶器	甕	—	胴部上半破片/外面に自然軸/胎土の色調は灰色/胎土に白色砂粒・小石を含む/外面に叩き目痕が僅かに残る	常滑	中世
図版9-3-4	130 D	陶器	甕	—	胴部破片/内面に自然軸/胎土の色調は濃灰色/胎土に白色砂粒・小石を含む/内外面にナデ	常滑	中世
第23図5 図版9-3-5	130 D	陶器	片口	高 10.6 口 [28.0] 底 [12.6]	口縁部に1箇所注口あり/色調は灰白色/胎土に白色砂粒・小石を含む/内面及び外面口縁部は回転ナデ/外面体部中位以下は指頭押捺による成形痕が顕著に残る/遺存度25%	在地系	中世(14c)
第25図1 図版10-1	2W	陶器	徳利	高 [1.5] 底 [10.6]	外面底部を除き灰軸/胎土の色調は淡黄褐色/胎土に茶褐色粒子・白色砂粒・小石を僅かに含む/ロクロ成形/底部に回転糸切り痕あり/遺存土は底部100%	瀬戸	近世(17c?)
図版10-2	2W	陶器	徳利	高 [1.1]	底部破片/内面に灰軸/胎土の色調は淡黄褐色/胎土に茶褐色粒子・白色砂粒を含む/ロクロ成形/底部に周辺へう削り(回転糸切り痕あり)	瀬戸	近世(17c?)
第25図3 図版10-3	2W	陶器	片口	高 9.7 口 [12.8] 底 [11.4]	口縁部に注口あり/色調は淡茶褐色/胎土に白色砂粒・小石を多く含む/内面及び外面口縁部は回転ナデ/外面体部中位以下は指頭押捺による成形痕が顕著に残る/遺存度40%	在地系	中世(14c)
第25図4 図版10-4	2W	陶器	片口	高 [5.3]	口縁部～体部破片/3と同一個体と思われる	在地系	中世(14c)
第25図5 図版10-5	2W	陶器	片口か	高 [7.0]	口縁部～体部破片/色調は灰白色/胎土に茶褐色粒子・白色砂粒・小石をやや多く含む/内面及び外面口縁部は回転ナデ/外面体部中位以下は指頭押捺による成形痕が残る	在地	中世(14c)
第25図6 図版10-6	2W	陶器	片口か	高 [5.5]	口縁部～体部破片/色調は灰白色/胎土に石英・白色砂粒・小石を含む/内外面は回転ナデ	在地系	中世(14c)
第25図7 図版10-7	2W	陶器	片口か	高 [6.0]	口縁部～体部破片/色調は黒色/胎土に白色砂粒・小石を含む/内外面は回転ナデ	在地系	中世(14c)
図版10-8	2W	陶器	片口か	高 [9.6]	口縁部～体部破片/色調は灰白色/胎土に石英・白色砂粒・小石をやや多く含む/内面及び外面口縁部は回転ナデ/外面体部中位以下は指頭押捺による成形痕が残る	在地系	中世(14c)
第25図9 図版10-9	2W	陶器	甕	高 [6.3]	口縁部破片/分厚い複合口縁/色調は灰色/胎土に石英・白色砂粒・小石を含む/内外面は回転ナデ	常滑?	中世(14c)
図版10-10	2W	陶器	甕	—	胴部破片/外面に「〇」の線刻か/色調は灰褐色/胎土に白色砂粒・小石を含む/内外面はナデ	常滑	中世(14c)
第25図11 図版10-11	2W	陶器	甕	—	胴部上半破片/外面に格子に花文の刻印あり/内外面に鉄軸/胎土の色調は灰褐色/胎土に白色砂粒・小石をやや多く含む	常滑	中世(14c)
図版10-12	2W	陶器	甕	—	胴部破片/内面に自然軸/胎土の色調は灰色/胎土に白色砂粒・小石を含む/内外面にナデ	瀬戸	中世(14c)
第25図13 図版10-13	2W	陶器	甕	高 [3.7]	胴部下半～底部破片/平底/内面に自然軸/胎土の色調は灰褐色/胎土に石英・小石を含む	常滑	中世(14c)
第25図14 図版10-14	2W	陶器	甕	高 [5.4]	胴部下半～底部破片/平底/内面に自然軸/胎土の色調は灰色/胎土に砂粒・小石を含む/外面胴部下半に指頭押捺による成形痕が僅かに残る	常滑	中世(14c)
第25図15 図版10-15	2W	陶器	甕	高 [5.3]	胴部下半～底部破片/平底/胎土の色調は灰褐色/胎土に白色砂粒・小石をやや多く含む/外面胴部下半に指頭押捺による成形痕が僅かに残る	常滑	中世(14c)

第9表 土坑・井戸跡出土の陶磁器・土器一覽

1～15は陶器である。

〔石製品〕(第25図16、図版10-16)

砥石である。長さ5.1cm・最大幅2.5cm・厚さ1.7cm・重さ31.2g。表裏・側面の4面が使用面である。石材は安山岩。

(4) 溝跡

21号溝跡

遺構 (第3図)

〔位置〕(C-2・3) グリッド。

〔構造〕113・123～125 Dと重複する。規模：長さ1.020m/上幅38～80cm/下幅18～60cm/深さ18～23cm。溝底は凹凸で、平坦ではない。壁の立ち上がりは65°前後。走向方位：N-78°-E。

〔遺物〕本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

〔時期〕中世以降。

第5節 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外出土遺物としては、旧石器・縄文・弥生時代の石器、縄文時代の土器、弥生時代後期～古墳時代前期の土器、古墳時代後期～平安時代の遺物、中世以降の遺物に分類する。

(1) 旧石器・縄文・弥生時代の石器 (第26図1～9、第10表)

1は旧石器時代のナイフ形石器である。

2～9は縄文時代の石器で、2は剥片、3は石鏃未製品、4～6は打製石斧、8・9は石皿である。

7は弥生時代の有角石器と思われる。

(2) 縄文時代の土器 (第26～28図10～55、第11表)

全て破片資料で、総数738点、重量14,431gが出土した。そのうち中期のものと思われるものが609点、13,566gと大半を占めた。ここでは46点を図示する。

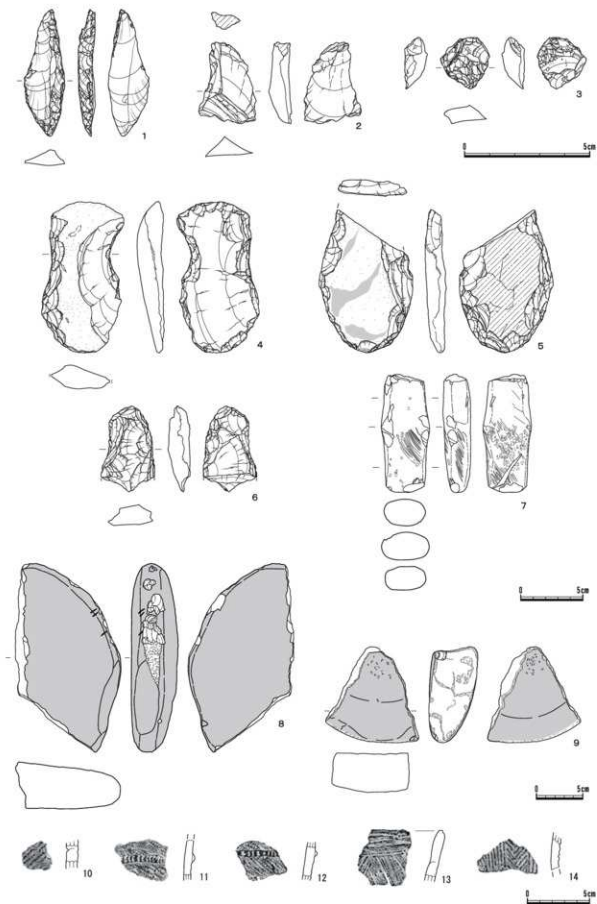
10は前期羽状縄文系の土器である。

11～16は前期末葉の土器で、11～14は諸磯c式、15・16は中期初頭まで下る可能性もある。

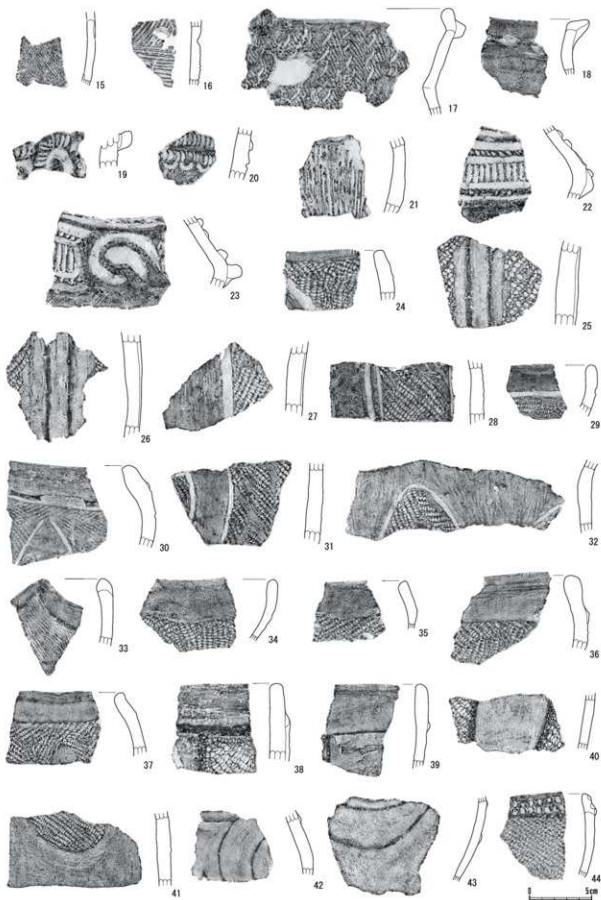
17は中期初頭の五領ヶ台式土器。口縁部が外反するように口唇部から5cm程下で括れる。縦位L縄文地文に、およそ2cm間隔で縦位の結節文が施文される。

18～20は中期中葉の勝坂式土器である。

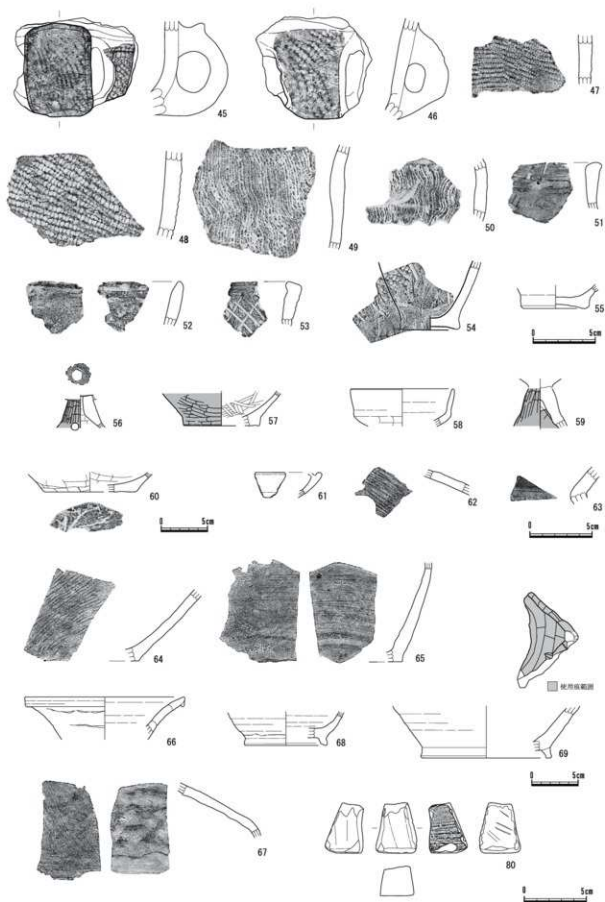
21～50は中期後葉～末葉の土器で、21は曾利式、22・23は加曾利E I式の浅鉢。24～28は加曾利E III式。29～32は加曾利E IV式の沈線で文様を区画・或いは描出するもの。33～44は加曾利E IV



第26図 遺構外出土遺物1 (2/3・1/3・1/4)



第27図 遺構外出土遺物2 (1/3)



第28図 遺構外出土遺物3 (1/4・1/3)

式の微隆起線で文様を区画・或いは描出するもの。45・46は加曾利EⅣ式の両耳蓋の把手部分。47・48は加曾利E式の縄文施文部の破片。49・50は加曾利E式の蛇行する条線文部分の破片。

51・52は無文の口縁部破片である。中期末葉から後期前葉の所産であろうか。

53は後期前葉の堀之内式期の粗製土器の口縁部である。

54・55は底部の破片で、両者とも上げ底状を呈する。55は胴側の割れ口部分に比較して底部外周部の摩滅が顕著であり、接地部分の摩滅ではないことから何らかの加工、もしくは転用が考えられる。

(3) 弥生時代後期～古墳時代前期の土器 (第26図56・57、第12表)

56は器台形土器、57は壺形土器である。

(4) 古墳時代後期～平安時代の遺物 (第26図58～69、第12表)

58～60は土師器で、58は坏形土器、59は高坏形土器、60は甕形土器である。

61～69は須恵器で、61は坏身形土器、62～65は甕形土器、66～69は壺形土器である。特に、69は内面を中心に摩耗し使用されていると考えられるため砥石に転用されたものであろう。

(5) 中世以降の遺物 (図版13-70～80、第26図80、第13表)

[陶磁器・土器] (図版13-70～79、第13表)

70は磁器、71～76は陶器、77～79は土器である。小破片のため、時期の特定は難しい。

[石製品] (第26図80、図版13-80)

80は石製品で、砥石である。長さ3.0cm・最大幅3.2cm・重さ44.4g。上端部分を除き5面が使用面である。側面には一部成形痕が観察できる。石材は凝灰岩。

種別番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置
第26図1	ナイフ形石器	黒曜石	50.4	16.3	6.9	17.2	先端部を一部欠損/石刃素材/二側縁加工/基部を支らせる/刃部に微細な剥離	遺構外 (C-2G)
第26図2	剥片	チャート	32.3	22.8	9.1	5.1	節理打面/表面左側縁に不規則・非連続の剥離	2W
第26図3	石礫未製品	黒曜石	20.4	19.5	9.0	3.0	中高の剥片素材/主に表面方向の剥離によって成形される	21H
第26図4	打製石斧	砂岩	119.8	65.3	21.6	155.2	完形/両側縁打刃による浅い伏り/刃部に不規則剥離	遺構外
第26図5	打製石斧	砂岩	113.2	74.4	16.7	146.4	刃部破片/弧状の刃部/不規則剥離が認められる	遺構外 (C-2G)
第26図6	打製石斧	ホルンフェルス	68.0	42.7	17.7	52.4	基部破片/側縁は敲打面を伴うやや大きな剥離で構成される	遺構外 (C-4G)
第26図7	有角石器?	輝石安山岩	94.0	38.0	22.0	131.0	上部を欠損/端部が四角形/両側縁が平行しているが、中央部で左右に張り出しが認められる/全面に研磨された後、擦造が付く/擦造→敲打痕の順で痕跡が認められる/敲打痕は器体中央から下部に顕著	2W
第26図8	石皿	花崗岩	164.0	111.0	48.0	1,430.0	破片/右側面に敲打痕あり/右縁刃付近に1cm前後の傷が認められる/表面は被熱により保っている	2W
第26図9	石皿	花崗岩	101.5	98.6	51.8	591.2	破片/中央にやや浅い凹面/破断面の縁に敲打痕が認められる	遺構外 (C-2G)

(単位: mm)

第10表 遺構外出土の旧石器・縄文・弥生時代石器一覧

神図番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物					出土位置	備考
					石	角	礫	砂	他		
第26図10	胴	縄文RL	にぶい黄橙 10YR6/4	羽状縄文系				○	織・白	(C-2)G	
第26図11	胴	縄文LR/結節浮線文	にぶい赤褐 5YR 5/4	諸磯c	○		○	○		22H	石英は滑品質
第26図12	胴	縄文RL/結節浮線文	明赤褐 2.5YR5/6	諸磯c	○		○			22H	石英は滑品質
第26図13	口縁	斜行する条線文/口唇部外周に沿った条線文	黒褐色 5YR3/1	諸磯c	○		○			(C-2)G	
第26図14	胴	平截竹管による集合沈線・矢羽 脈状沈線文	にぶい黄橙 10YR7/4	諸磯c			○	○		(A-2)G	
第27図15	胴	縄文RL	橙 7.5YR6/6	前期末～ 中期初頭			○	○		2W	磁石に付く
第27図16	胴	集合沈線/三角彫刻文	にぶい赤褐 2.5YR4/4	前期末～ 中期初頭				○	雲	135D	磁石に付く
第27図17	口縁	口縁部外反/口唇部に小突起/ 縄文L/結節文	にぶい赤褐 2.5YR 5/4	五瀬ヶ台						(C-2)G	
第27図18	口縁	無文/口唇部外反・肥厚	褐色 7.5YR5/1	勝坂			○	○		(A-3)G	胎土の砂は粗粒
第27図19	胴	刻みを持つ隆帯	にぶい赤褐 2.5YR4/4	勝坂			○	○		(C-3)G	
第27図20	胴	隆帯の上下に押し引き文/蓮華 文	にぶい赤褐 5YR 5/4	勝坂				○		(D-3)G	磁石に付く
第27図21	胴	条線文	にぶい橙 7.5YR7/4	曾利				○		遺構外	
第27図22	胴	縦位沈線文/刻みを持つ隆帯に よる横位の文様帯区画	褐色 7.5YR5/1	加曾利E I				○		(C-3)G	浅鉢 胎土の砂は粗粒
第27図23	胴	縦位沈線文/刻みを持つ隆帯に よる横位の文様帯区画/隆帯に よる渦巻文	灰褐 7.5YR6/2	加曾利E I				○		(B-3)G	浅鉢 胎土の砂は粗粒
第27図24	口縁	縄文RL/太沈線	にぶい黄橙 10YR6/4	加曾利E III				○		(E-2)G	
第27図25	胴	縄文RL/2本の隆帯と磨消に よる懸垂文	にぶい赤褐 2.5YR5/4	加曾利E III				○		(B-2)G	
第27図26	胴	縄文RL/2本の隆帯と磨消に よる懸垂文	にぶい赤褐 2.5YR5/4	加曾利E III				○		(C-2)G	
第27図27	胴	縄文RL/磨消懸垂文	にぶい橙 7.5YR6/4	加曾利E III				○		(D-3)G	内面は灰褐色
第27図28	胴	縄文LR/磨消懸垂文	にぶい橙 7.5YR7/4	加曾利E III				○		2W	
第27図29	口縁	縄文LR/沈線による口縁部無 文帯区画	黒 7.5YR1.7/1	加曾利E IV			○	○	褐	(C-3)G	
第27図30	口縁	波状口縁/微隆起線と沈線による 口縁部無文帯区画/縄文LR/ 沈線によるV字区画文	浅黄橙 10YR8/4	加曾利E IV				○		(D-3)G	
第27図31	胴	縄文LR/沈線区画の無文帯に よる鋸手状?懸垂文	浅黄橙 10YR8/4	加曾利E IV				○	褐	2W	
第27図32	胴	沈線による区画/縄文LR充填	にぶい橙 7.5YR7/4	加曾利E IV			○	○		20M	
第27図33	口縁	波状口縁/微隆起線による口縁 部無文帯区画/縄文L	橙 5YR7/6	加曾利E IV				○		(C-2)G	
第27図34	口縁	波状口縁/縄文LR/口縁部無 文帯	黒褐色 10YR3/1	加曾利E IV				○	褐	(C-2)G	
第27図35	口縁	縄文LR/微隆起線による口縁 部無文帯区画	褐色 7.5YR5/1	加曾利E IV				○	○	20M	内面はにぶい黄橙 色
第27図36	口縁	縄文RL/微隆起線による口縁 部無文帯区画	にぶい赤褐 5YR 5/4	加曾利E IV				○		(C-2)G	内面は黒褐色
第27図37	口縁	微隆起線による口縁部無文帯区 画/縄文LR/微隆起線による 区画内磨消	にぶい橙 7.5YR6/4	加曾利E IV	○			○		(A-2)G	

※ 石：石英 角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 織：織物 針：白色針状物 金：金雲母 白：白色粘土

第11表 遺構外出土の縄文土器一覽(1)

神内番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物					出土位置	備考
					石	角	礫	砂	他		
第27図38	口縁	微隆起線による口縁部無文帯区画／縄文LR／微隆起線による懸垂文	橙 5YR6/6	加曾利EⅣ			○	○		(C-3)G	内面はにぶい・褐色
第27図39	口縁	沈線による口縁部無文帯区画／縄文LR／微隆起線による懸垂文	灰褐 7.5YR5/2	加曾利EⅣ				○	褐	(C-2)G	
第27図40	胴	縄文LR／微隆起線による区画内磨消	灰赤 2.5YR4/2	加曾利EⅣ				○		(C-2)G	
第27図41	胴	縄文LR／微隆起線によるU字状区画	灰褐 7.5YR5/2	加曾利EⅣ				○		(B-2)G	
第27図42	胴	微隆起線文	灰褐 7.5YR5/2	加曾利EⅣ		○		○		(C-2)G	内面は黒褐色
第27図43	胴	微隆起線文	にぶい・黄橙 10YR6/3	加曾利EⅣ		○		○		20M	内面は黒褐色 劣化が顕著
第27図44	口縁	縄文LR／口縁部に微隆起線による区画／2段の刺突文列	橙 5YR6/6	加曾利EⅣ				○		(D-3)G	
第28図45	把手	板状把手／縄文LR	橙 2.5YR6/6	加曾利EⅣ				○		(A-2)G	両耳蓋 内面はにぶい・褐色
第28図46	把手	板状把手／縄文LR	にぶい・橙 7.5YR7/4	加曾利EⅣ				○		(C-2)G	両耳蓋
第28図47	胴	縄文LR	橙 5YR6/6	加曾利EⅣ?				○		20M	内面は黒褐色
第28図48	胴	縄文LR	にぶい・黄橙 10YR7/2	加曾利EⅣ?				○		2W	
第28図49	胴	蛇行条線文	にぶい・黄橙 10YR7/3	加曾利EⅣ ～Ⅳ				○	○	(A-2)G	
第28図50	胴	蛇行条線文	にぶい・橙 5YR7/4	加曾利EⅣ ～Ⅳ						2W	
第28図51	口縁	無文／口唇部外反	黒褐 10YR3/1	中期末～後期前				○		(D-2)G	
第28図52	口縁	無文	橙 2.5YR6/6	中期末～後期前						22H	
第28図53	口縁	口唇部内面に沈線／斜格子目文	にぶい・赤褐 5YR4/3	後期粗製				○		(B-3)G	内面は明赤褐色
第28図54	底	上げ底／縄文LR／沈線による懸垂文	にぶい・赤褐 2.5YR4/4	加曾利EⅣ ～Ⅳ				○		(C-2)G	
第28図55	底	上げ底	黒 10YR2/1	後期					○	白	(C-2)G

※ 石：石角 角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 糞：糞 針：白色針状物 金：金雲母 白：白色粘土

第11表 遺構外出土の縄文土器一覽(2)

図版番号	器種	法量	特徴	色調	胎土	成形及び調整	遺存度	出土位置	時期
第28図56	器台	高[3.4]	器台部／途中に穿孔3箇所あり／中心部は穿孔／外面赤彩	胎土は暗黄褐色	黄褐色粒子・角閃石・砂粒を含む	内面：ヘラ削り／外面：縦方向にヘラ磨き調整	器柱部80%	2W	古墳前期
第28図57	壺	底[8.0]	平底／外面赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒を含む	内外面：ヘラ磨き調整	胴部下半～底部10%	遺構外(A-2)G	弥生後期～古墳前期
第28図58	土師器環	高[3.5] 口[11.0]	有段環／口縁部と底部との境に弱い段をもつ／在地系土師器	暗褐色	砂粒をやや多く、石英・角閃石を僅かに含む	内面：横ナデ／外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	口縁部～底部破片	遺構外(A-2)G	古墳後期(7c中葉)
第28図59	土師器高環	高[4.2]	器台部／外面及び内面磨部赤彩／人間系土師器	胎土は淡赤褐色	角閃石を僅かに含む	内面：ヘラ削り／外面：縦方向の粗いヘラ磨き調整	器柱部～器部60%	遺構外(D-3)G	古墳後期(6c前葉)
第28図60	土師器甕	高[12.1] 底[10.0]	丸壺か／底部に木葉痕あり／在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く、金雲母を含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り	胴部下半～底部20%	2W	古墳後期(7c中葉)

第12表 遺構外出土の弥生～平安時代の土器一覽(1)

図版番号	器種	法量	特徴	色調	胎土	成形及び調整	遺存度	出土位置	時期
第28図61	須恵器 坏身	高 [2.0]	口縁部は欠損/湖西製品/ 第Ⅲ期第1・2小期	灰色	白色砂粒を含む	ロクロ成形	受部～底部 小破片	遺構外 (C-3G)	古墳後期 (7c 後葉)
第28図62	須恵器 甕	—	胴部/外面に黒褐色の自然 釉がかかる	灰色	黒色粒子・白 色砂粒を含む	内面：ナデ/外面： 平行叩き目	胴部破片	遺構外 (A-3G)	古墳後期 か
第28図63	須恵器 甕	—	口縁部は欠損/頸部は外 傾する/内外面に薄く自 然釉がかかる	灰色	白色砂粒を含む	ロクロ成形	胴部小破片	遺構外 (C-2G)	古墳後期 ～平安
第28図64	須恵器 甕	高 [7.6]	平底/外面に自然釉がか かる	青灰色	白色砂粒を含む	内面：ナデ/外面： 斜方向に平行叩き目	胴部下半～ 底部破片	遺構外 (C-2G)	古墳後期 ～平安
第28図65	須恵器 甕	高 [10.5]	平底/内外面に自然釉が かかる	灰色	白色砂粒を僅 かに含む	ロクロ成形	胴部下半～ 底部破片	2W	古墳後期 ～平安
第28図66	須恵器 甕	高 [4.5] 口 [17.0]	複合口縁/頸部は外反す る/外面に輪積み痕が残 る/東金子製品	灰色	白色砂粒を含 む	内外面：ナデ	口縁部～頸 部破片	2W	平安時代 (9c)
第28図67	須恵器 甕	高 [4.0]	胴部は稜をもち屈曲す る/東金子製品	灰色	白色砂粒・小 石を含む	内面：指頭押捺によ る成形痕が顕著に残 る/外面：平行叩き 目後ナデ	胴部上半破 片	遺構外 (E-3G)	平安時代 (9c)
第28図68	須恵器 甕	高 [3.6] 底 [8.6]	長頸壺か/高台付き/東 金子製品	灰色	白色砂粒を含 む	ロクロ成形	胴部下半～ 底部 20%	遺構外 (C-3G)	平安時代 (9c)
第28図69	須恵器 甕	高 [5.5] 底 [13.8]	高台付き/内面及び一部 断面に平滑面があるため 使用痕と思われる/転用 磁石/東金子製品か	灰褐色	白色砂粒をや や多く、小石 を含む	ロクロ成形	胴部下半～ 底部 10%	2W	平安時代

第12表 遺構外出土の弥生～平安時代の土器一覽(2)

図版番号	種別	器種	法量	製作の特徴等	推定産地	出土位置	時期
図版 13-70	磁器	碗	—	青磁/体部小破片/ロクロ成形/胎土の色調は灰白色/胎土は精練されている	中国	遺構外 (22 H)	12c
図版 13-71	陶器	皿	高 [2.8]	菊皿/口縁部～体部小破片/ロクロ成形/内外面に灰釉/胎土の色調は淡黄褐色/胎土は精練されている	瀬戸	遺構外 (C-3G)	15c
図版 13-72	陶器	皿	高 [1.7]	高台/底部破片/ロクロ成形/内面に灰釉/見込みに蛇の目 刺ぎ/胎土の色調は灰色/胎土は精練されている	瀬戸	遺構外 (A-2G)	中世
図版 13-73	陶器	甕	高 [4.3]	複合口縁/口縁部破片/外面に灰釉/胎土の色調は灰色/胎 土に砂粒を僅かに含む	常滑	遺構外 (C-3G)	中世
図版 13-74	陶器	甕	—	胴部上半破片/外面に灰釉/胎土の色調は灰褐色/胎土に白 色砂粒を僅かに含む/内面に指頭押捺による成形痕が残る	常滑	遺構外 (C-3G)	中世
図版 13-75	陶器	甕	—	胴部破片/外面に灰釉/胎土の色調は灰褐色/胎土に白色 砂粒を含む/内面に指頭押捺による成形痕が残る	常滑	遺構外 (C-3G)	中世
図版 13-76	陶器	甕	—	胴部破片/胎土の色調は灰褐色/胎土に白色砂粒をやや多 く含む/内外面ナデ	常滑	遺構外 (C-3G)	中世
図版 13-77	土器	片口	高 [5.2]	罎鉢か/口縁部～体部破片/色調は灰白色/胎土に白色 砂粒・小石を含む/内外面ナデ	在地系	遺構外 (C-3G)	中世
図版 13-78	土器	焙烙	—	口縁部小破片/色調は灰褐色を基調/胎土に金雲母・砂粒・ 小石を含む	在地系	遺構外 (E-2G)	16c
図版 13-79	土器	焙烙	高 [4.8]	体部破片/色調は表面が黒褐色、内部は灰褐色/胎土に白 色砂粒・小石を含む/外面に指頭押捺による成形痕が残る	在地系	遺構外 (C-3G)	16c

第13表 遺構外出土の陶磁器・土器一覽

第3章 中道遺跡第39地点の調査

第1節 調査の経緯

(1) 調査に至る経過

第2章 中道遺跡第38地点を参照。本文9ページ。

(2) 確認調査の方法とその後の経過

第2章 中道遺跡第38地点を参照。本文9ページ。

(3) 発掘調査の経過

ここでは、第39地点の発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第14表の発掘調査工程表に示した。

- 2月5日 本日、調査準備として、調査区境界に単管パイプを設置する。
- 6日 午前中、調査区境界の単管パイプにロープを巡らし安全確保を図る。
午後から重機（バックホー）による表土剥ぎ作業を開始する。残土については、ダンプを併用し、調査区内の遺構検出以外の場所に移動させる。同日、器材搬入を行う。
- 8～13日 重機による表土剥ぎ作業に併行して、人員導入による発掘調査を開始する。まず、調査区の整備と遺構確認作業を行った後、中世以降の土坑（38～47 D）の精査を開始する。13日には、重機による表土剥ぎ作業を完了し、中世以降の土坑（48～55 D）の精査を開始する。
- 2月中旬 新たに中世以降の土坑（56・57・59～64 D）・井戸跡（1 W）、縄文時代の土坑（58 D）の精査を開始する。
- 2月下旬 中世以降の土坑（66・67・69～83 D）、縄文時代の住居跡（7 J）・土坑（65・68 D）の精査を開始し、終了する。7 Jは中期後葉の加曾利EⅣ式期の住居跡と判明する。
- 3月上旬 中世以降の土坑（55・57・82・83 D）・1 Wの精査を終了する。55・57 Dは地下室で、天井部は陥落せずに遺存している状態であったが、主体部の精査は危険を伴うため実施しなかった。縄文時代の住居跡（7 J）・土坑（85～87 D）の精査を終了する。
- 3月12日 縄文時代の土坑（84 D）の精査を終了し、埋戻し作業を行う。

第2節 縄文時代の遺構・遺物

(1) 概要

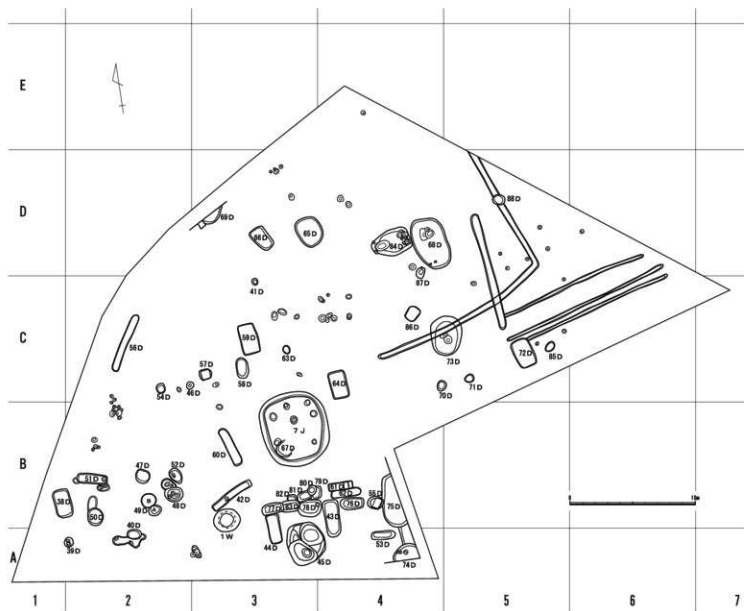
縄文時代の遺構は住居跡1軒（7 J）と土坑7基（58・65・68・84～87 D）が検出された。

各遺構の時期は、7 J・58・65・68・84 Dは中期後葉の加曾利EⅣ式期、その他の土坑は遺物の出

第3章 中道遺跡第39地点の調査

	平成8年2月						3月		
	5日	10日	15日	20日	25日	30日	5日	10日	15日
準備作業	2.5								
表土剥き作業 (中世以降)	2.6								
38D	2.8								
39D	2.8								
40D	2.8								
41D				2.20					
42D	2.8								
43D	2.8					2.28			
44D	2.8					2.28			
45D	2.8					2.28			
46D	2.8								
47D		2.13							
48D		2.13		2.21					
49D		2.13		2.20					
50D		2.13		2.20					
51D		2.13							
52D		2.13							
53D		2.13				2.29			
54D		2.13							
55D		2.13				2.29	3.5		
56D		2.14							
57D		2.15				2.29	3.4		
59D		2.16							
60D		2.16							
61D		2.16				2.29			
62D		2.16				2.29			
63D		2.16							
64D		2.16							
66D			2.21						
67D			2.22						
69D			2.22						
70D			2.23						
71D			2.23						
72D				2.26					
73D				2.26					
74D				2.27					
75D				2.27					
76D				2.27					
77D				2.27					
78D				2.28					
79D				2.28					
80D				2.28					
81D				2.28					
82D				2.28			3.11		
83D				2.28			3.11		
1W		2.16			2.28		3.4		
(縄文時代)									
58D		2.16							
65D			2.21						
68D			2.22				3.4		
84D							3.7	3.12	
85D							3.7		
86D							3.7		
87D							3.7		
7J		2.19					3.4		
埋戻し作業							3.11	3.12	

第14表 中道遺跡第39地点の発掘調査工程表



第29図 遺構分布図(1/300)

土がない、もしくは極めて少なく詳細について判断することができなかった。

(2) 住居跡

7号住居跡

遺 構 (第30図)

[位 置] (B・C-3・4) グリッド。

[検出状況] 67Dに切られる。

[構 造] 平面形：やや歪んだ隅丸方形。規模：長軸5.9m/短軸4.5m/深さ96cm前後。壁：63～75°の角度で立ち上がる。主軸方位：N-7°-W。壁溝：上幅20～30cm/下幅10～15cm/深さ14～43cm。床面：全体に硬化している。炉：地床炉。長軸65cm/短軸55cm/深さ29cmを測る。焼土は疎ら。柱穴：6本検出した。配置は整然としない。

[覆 土] 10層に分層された。2層中から遺物が多く出土した。

[遺 物] 土器は小破片が多数出土し、復元個体2点3,410g(重量は復元材を含む参考値)、破片資料2,352点、50,396g(重量は復元材を含む参考値)、土器片鍾13点、357gであった。

[時 期] 中期後葉(加曾利EIV式期)。

[所 見] 発掘調査時の記録に炉は『底に焼土粒子がまばらにあり、短期間使用の遺構か。』とある。また、地床炉としては掘り込みがやや深いので、廃絶時に埋壘が抜き取られた可能性も考えられる。

遺 物 (第31～36図、第15～17表)

[土 器] (第31～35図1～49、第15表)

土器は小破片が多く、無文部片323点・縄文のみ破片524点・条線文のみ破片109点などで文様構成が不明なものが多い。時期を推定できる破片では、加曾利EⅢ～IV式が最も多く679点、加曾利EⅠ～Ⅱ式が112点。勝坂・阿玉台式が84点であった。

1・2は加曾利EIV式の深鉢。1は沈線区画による口縁部無文帯と対向U字区画文を持つ土器。区画の沈線の引き方はやや雑。2は微隆起線区画による口縁部無文帯をもち、胴部は縄文地文のみ施文する。

3～5は勝坂式、6～9は加曾利EⅠ式～EⅡ式と思われる土器片を一括した。

10～46は加曾利EⅢ式～EⅣ式の土器で、10～28・41・46は沈線と地文で文様構成され、29～37・39・41・42は微隆起線と地文で文様構成される。

47は器台付き土器の台部である。台部の穿孔は3つ確認され、その位置から4カ所と思われる。

48は注口土器の注口部片である。注口部は薄く、短い。

49は称名寺I式の口縁部片である。

[土 製 品] (第36図50～62、第16表)

50～60は土器片鍾、61・62は土製円盤である。62は未製品。

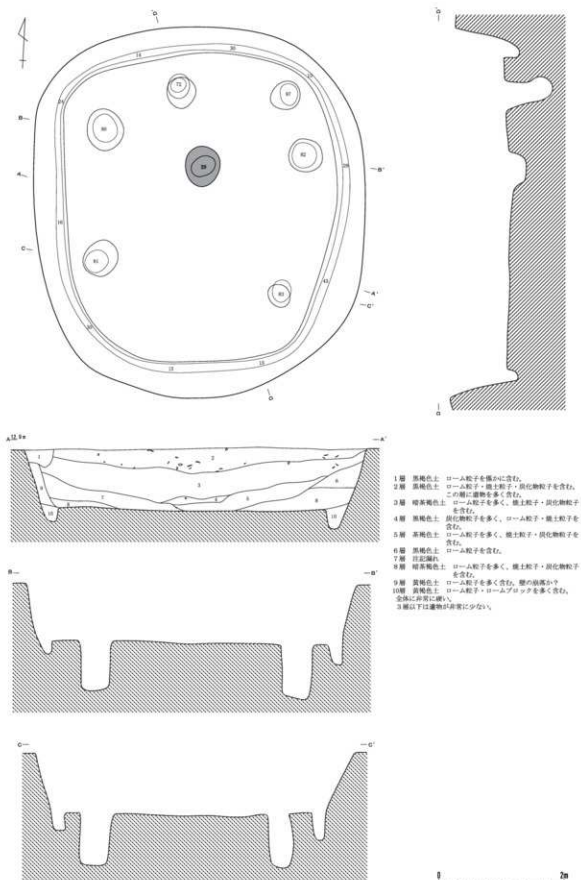
[石 器] (第36図63～71、第17表)

63～67は打製石斧、68は敲石、69～71は剥片である。

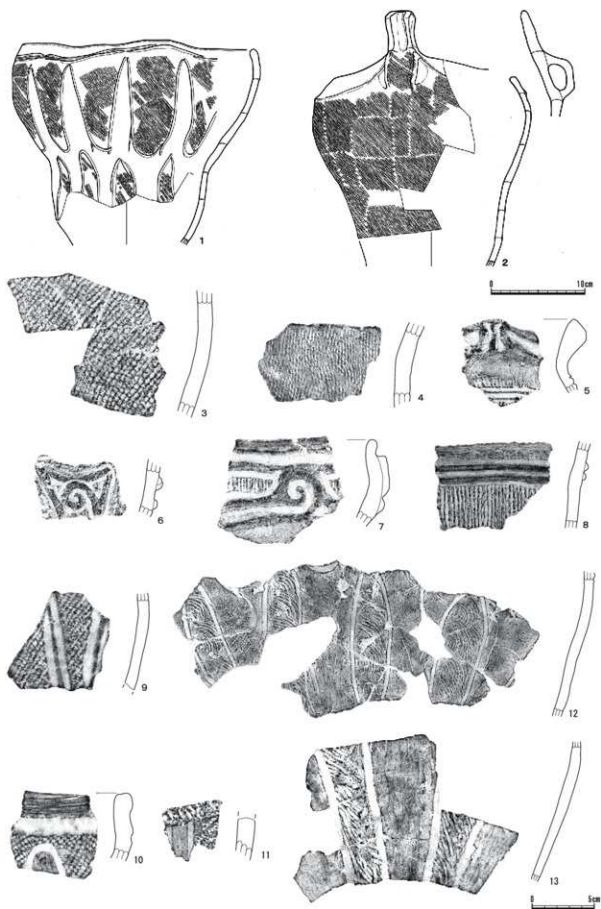
(2) 土 坑

58号土坑

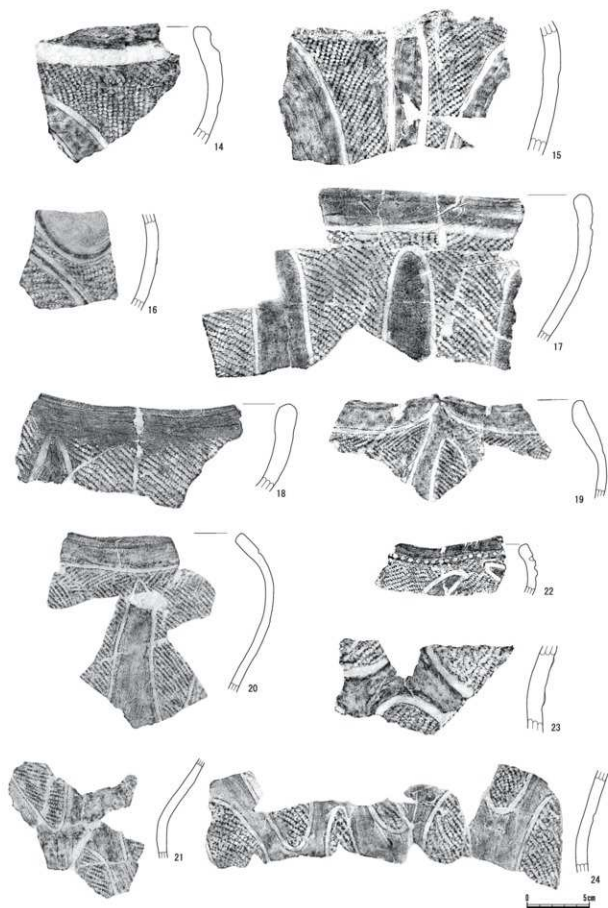
遺 構 (第37図)



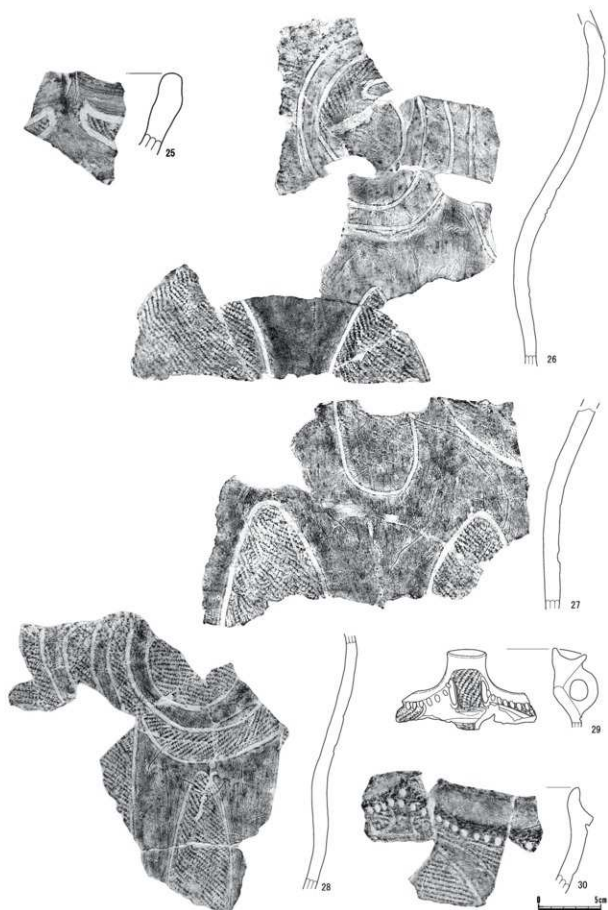
第30図 7号住居跡(1/60)



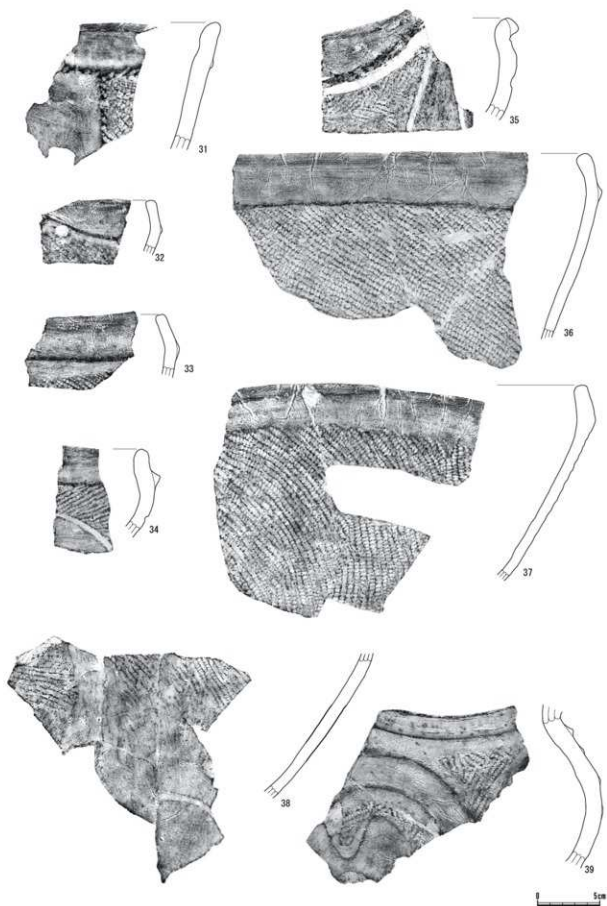
第31図 7号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)



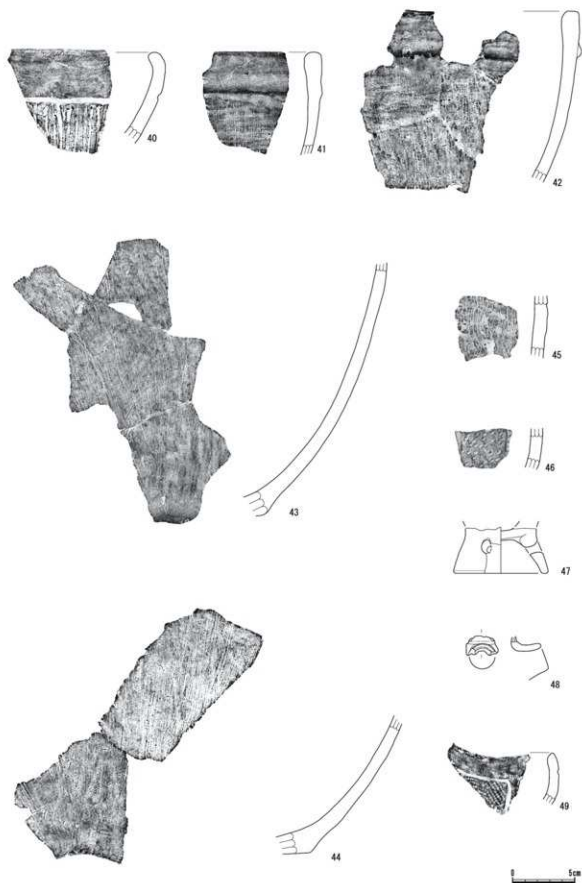
第32図 7号住居跡出土遺物2 (1/3)



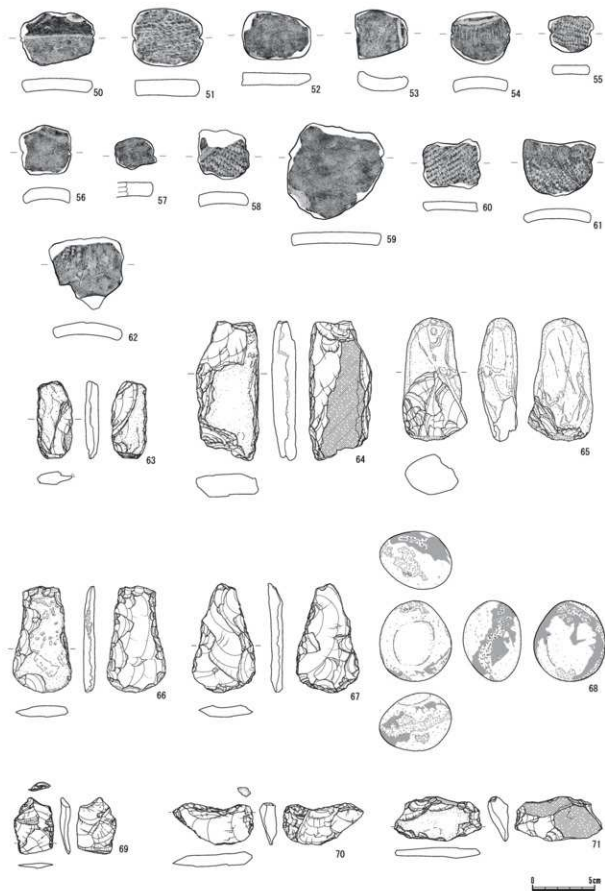
第33図 7号住居跡出土遺物3 (1/3)



第34図 7号住居跡出土遺物4(1/3)



第35図 7号住居跡出土遺物5 (1 / 3)



第36図 7号住居跡出土遺物6 (1/3)

探検番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物				備考
					石	角	礫	砂	
第31図1	口縁 ～胴	口径22cm・最大径26.5cm・現存高24cm/2単位? の波状口縁/沈線区画による口縁部無文帯/磨消 縄文LR/沈線区画による対向U字文	赤褐 5YR4/6	加曾利EIV			○	○	明褐
第31図2	口縁 ～胴	口径18cm・最大径22.5cm・現存高28cm/口縁部 に横状把手/微隆起線区画による口縁部無文帯/ 胴部は縄文LR地文のみ	浅黄橙 10YR8/4	加曾利EIV				○	
第31図3	胴	縄文RL	橙 2.5YR6/6	磨坂か				○	内面に炭化物 が付着
第31図4	胴	縄文R	橙 2.5YR6/6	磨坂か		○	○	○	内面灰褐色 磁石に付く
第31図5	口縁	口縁部外反/波状口縁/波頂部につくC状の隆帯/ 縄文L/半截竹管による平行沈線文	褐灰 5YR5/2	磨坂～加曾 利E I	○			○	内面は黒色
第31図6	胴	隆帯による渦巻文・弧線文・直線文/縄文L	にぶい黄橙 10YR7/3	磨坂～加曾 利E I	○	○		○	
第31図7	口縁	渦巻つなぎ文/縦部の多条沈線/頸部無文帯	にぶい赤褐 5YR5/4	加曾利E II	○	○		○	磁石に付く
第31図8	胴	縄文L/2本の隆帯による頸部無文帯もしくは 無文の口縁部区画	黒褐 10YR3/2	加曾利E I ～II		○			磁石に付く
第31図9	胴	太いRL縄に細いRL縄をRに合割り	浅黄橙 10YR8/3	加曾利E II ～III			○	○	
第31図 10	口縁	縄文RL/口唇部直下に太沈線/沈線区画による逆U 状区画文?	にぶい赤褐 5YR5/4	加曾利E III ～IV	○				
第31図 11	胴	縄文RL/磨消懸垂文/輪組み部に刻みあり	橙 5YR6/6	加曾利E III				○	内面は灰褐色
第31図 12	胴	縦長の楕円区画内に弧状の条線文/区画外の一部 に縄文RL	にぶい赤褐 2.5YR4/4	加曾利E III?				○	砂粒は粗め 区画は6単位 か?
第31図 13	胴	縄文L/磨消懸垂文	橙 7.5YR7/6	加曾利E III				○	
第32図 14	口縁	縄文LR/口唇部直下に太沈線/沈線と磨消しによる 曲線文	にぶい橙 5YR6/4	加曾利E III ～IV			○	○	
第32図 15	胴	縄文RL/磨消しによる懸垂文・曲線文	にぶい赤褐 5YR5/3	加曾利E III ～IV			○		
第32図 16	胴	縄文LR/沈線による曲線文/沈線による楕円区画内 磨消	褐灰 7.5YR4/1	加曾利E III	○				
第32図 17	口縁	沈線区画による口縁部無文帯/縄文LR/逆U状区 画文内磨消	にぶい褐 7.5YR6/3	加曾利E IV	○			○	
第32図 18	口縁	磨消による口縁部無文帯/縄文LR/沈線による逆 V状区画内磨消	にぶい赤褐 2.5YR4/4	加曾利E IV	○	○		○	
第32図 19	口縁	波状口縁/縄文LR/沈線区画による口縁部無文 帯・逆V状区画文	にぶい黄橙 10YR7/2	加曾利E IV					20・21と同 一単位か?
第32図 20	口縁	沈線による口縁部無文帯/沈線による対向V字区 画に縄文LR	灰黄褐 10YR6/2	加曾利E IV				○	19・21と同 一単位か?
第32図 21	胴	沈線による口縁部無文帯/沈線による対向V字区 画に縄文LR	灰黄褐 10YR6/2	加曾利E IV					19・20と同 一単位か?
第32図 22	口縁	列点文を作る沈線区画による口縁部無文帯/縄文 RL/沈線による区画内磨消し	褐 7.5YR4/3	加曾利E IV	○				
第32図 23	胴	沈線による対向U字区画に縄文RL	にぶい赤褐 5YR4/3	加曾利E IV				○	褐
第32図 24	胴	沈線による対向U字区画に縄文LR	にぶい褐 7.5YR5/3	加曾利E IV				○	

※石：石片 角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 明褐：明褐色粒子 濁：褐色粒子

第15表 7号住居跡出土土器一覧(1)

検出番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物				備考
					石	角	礫	砂	
第33図 25	口縁	波状口縁・波頂部に小突起／縄文RL／沈線による区画文	明灰褐 7.5YR7/2	加曾利EⅣ				○	
第33図 26	胴	縄文LR／沈線区画による載手文・逆V状区画文	にぶい・黄橙 10YR6/3	加曾利EⅣ				○	27と同一体と思われる
第33図 27	胴	縄文LR／沈線区画による逆V状区画文・載手文	にぶい・褐 7.5YR6/3	加曾利EⅣ				○	26と同一体と思われる
第33図 28	胴	縄文LR／沈線区画による逆V状区画文・載手文	にぶい・赤褐 5YR4/3	加曾利EⅣ				○	金 金雲母は極僅か
第33図 29	口縁	波状口縁／波頂部に突起／橋状把手／縄文RL／沈線／列点文	黒褐 7.5YR3/1	加曾利EⅣ					
第33図 30	口縁	微隆起線区画による口縁部無文帯直下に列点文／縄文LR／沈線による区画内磨消し	にぶい・橙 5YR6/4	加曾利EⅣ					
第34図 31	口縁	微隆起線区画による口縁部無文帯／微隆起線による懸垂文／縄文LR／縄文は微隆起線土にも磨文	黒褐 5YR3/1	加曾利EⅣ				○	
第34図 32	口縁	隆起線区画による口縁部無文帯／縄文LR／補修孔	黒褐 10YR3/2	加曾利EⅣ				○	
第34図 33	口縁	微隆起線区画による口縁部無文帯／縄文LR	黒褐 5YR3/1	加曾利EⅣ				○	
第34図 34	口縁	微隆起線区画による口縁部無文帯／縄文LR／沈線による区画内磨消し	にぶい・黄橙 10YR7/4	加曾利EⅣ				○	
第34図 35	口縁	波状口縁／微隆起線・沈線区画による口縁部無文帯／縄文LR／沈線による区画内磨消し	にぶい・黄橙 10YR7/3	加曾利EⅣ					褐
第34図 36	口縁	微隆起線区画による口縁部無文帯／縄文LR	にぶい・橙 7.5YR6/4	加曾利EⅣ				○	
第34図 37	口縁	口縁部無文帯／縄文LR	にぶい・橙 7.5YR6/4	加曾利EⅣ					
第34図 38	胴	縄文LR	にぶい・橙 5YR6/4	加曾利EⅢ～Ⅳ				○	内面は灰褐色
第34図 39	胴	縄文RL／微隆起線区画内を磨消した載手状の文様	にぶい・褐 7.5YR5/3	加曾利EⅣ	○			○	
第35図 40	口縁	沈線区画による口縁部無文帯／多条の縦位沈線	にぶい・黄橙 10YR7/4	加曾利EⅣ				○	
第35図 41	口縁	条線文／微隆起線区画による口縁部無文帯	黒褐 5YR3/2	加曾利EⅣ					42～44と同一体か？
第35図 42	口縁	条線文／微隆起線区画による口縁部無文帯	黒褐 5YR3/2	加曾利EⅣ				○	41・43・44と同一体か？
第35図 43	胴～底	条線文	にぶい・黄橙 10YR6/3	加曾利EⅣ				○	41・42・44と同一体か？
第35図 44	胴～底	条線文	にぶい・黄橙 10YR6/3	加曾利EⅣ				○	41～43と同一体か？
第35図 45	胴	蛇行した条線文	にぶい・赤褐 5YR4/3	加曾利EⅢ～Ⅳ				○	磁石に付く
第35図 46	胴	沈線／刺突文	にぶい・橙 7.5YR7/4	加曾利EⅢ～Ⅳ					
第35図 47	底	台付深鉢の脚台部／4単位と思われる円孔	橙 5YR6/6	中期中～後星				○	
第35図 48	注口	注口土器の注口部	にぶい・赤褐 2.5YR4/4	後期？				○	
第35図 49	口縁	波状口縁／縄文LR／沈線	褐灰 7.5YR4/1	称名寺Ⅰ				○	

●石：石高 角：角閃石・輝石 濃：濃緑 砂：砂粒 明期：明褐色粒子 褐：褐色粒子

第15表 7号住居跡出土土器一覽(2)

神図番号	種別	長さ/幅/厚さ (mm)	重さ (g)	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物	備 考
第36図50	土器片蓋	58/42/15	35.2g	陸帯	明赤褐 5YR3/2	加曾利EⅠ～Ⅱ	砂	
第36図51	土器片蓋	57.5/46/14	44.6g	器底文L	橙 5YR6/6	加曾利EⅠ～Ⅱ	角・砂	磁石に付く
第36図52	土製円盤	54/37.5/10	23.4g	無文	橙 5YR6/6	中期中～後葉	砂	内面は黒色 磁石に付く
第36図53	土器片蓋	(41)/37.5/15	23.8g	沈線	にぶい赤褐 5YR5/4	加曾利EⅠ～Ⅱ	砂	
第36図54	土器片蓋	47/41/8.5	21.8g	沈線/器底文R	黒褐 5YR3/1	加曾利EⅠ～Ⅱ	礫・砂	
第36図55	土器片蓋	35/28.5/7.5	9.5g	縄文RL	にぶい赤褐 5YR5/3	中期中～後葉か	砂	
第36図56	土器片蓋	40.5/38/10	21.4g	無文	にぶい褐 7.5YR5/3	加曾利EⅠ～Ⅱ	角・砂	
第36図57	土器片蓋	31/(24)/8	10.6g	無文	にぶい赤褐 5YR5/4	中期中～後葉	砂	
第36図58	土器片蓋	(40)/40/10	17.8g	縄文RL/沈線/磨消 懸垂文?	褐灰 7.5YR4/1	加曾利EⅢ	褐・砂	
第36図59	土器片蓋	71/(74)/10	67.5g	無文	にぶい赤褐 5YR5/4	中期中～後葉	砂	
第36図60	土器片蓋	46/38/6	15.4g	縄文RL	にぶい赤褐 5YR5/3	加曾利E	礫・砂	
第36図61	土製円盤	58/(41)/8.5	26.2g	縄文LR	にぶい橙 5YR6/4	加曾利EⅢ～Ⅳ	砂	
第36図62	土製円盤	75/57/17	40.0g	縄文RL	にぶい橙 5YR7/4	加曾利EⅢ～Ⅳ	褐・砂	未製品

※ 角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 褐：褐色粘土

第16表 7号住居跡出土土製品一覧

神図番号	器 種	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	特 徴	出土位置
第36図63	打製石斧	粘板岩?	61.6	28.3	10.6	20.9	小形/表裏面に原礫面を広く残す/側縁に磨耗痕。	覆土下層
第36図64	打製石斧	片岩	110.6	49.7	19.5	155.4	表面に原礫面、裏面に節理面を広く残置/側縁は敲打とこれに伴う剥離	覆土
第36図65	打製石斧	チャート?	95.3	51.1	30.7	175.2	短冊形/表裏面に礫面を多く残す/両側縁・刃部に明確な敲打痕なし/未製品か	覆土上層
第36図66	打製石斧	砂岩	83.7	46.2	8.9	45.8	短冊形/完形/表面に礫面を残す	覆土下層
第36図67	打製石斧	ホルンフェルス	86.2	49.6	9.2	42.8	短冊形か/完形/表裏面も礫面を残さない	覆土
第36図68	敲 石	砂岩	63.9	56.9	45.9	231.6	拳大よりやや小さな円礫を素材とする/両縁に敲打痕/敲打に先行する黒色付着物/赤化	覆土
第36図69	微細剥離痕のある剥片	頁岩	44.9	31.5	8.2	8.8	調整打面/両側縁に不規則剥離が認められる	覆土上層
第36図70	剥片	頁岩	33.2	63.8	13.5	22.2	上面に原礫面/裏面に火ハネ/縁辺に不規則剥離が認められる	覆土
第36図71	剥片	砂岩	35.3	69.4	16.3	35.7	上面に磨耗痕/右側縁にやや均質な二次的剥離が認められる	覆土

(単位: m, g)

第17表 7号住居跡出土石器一覧

[位 置] (C-3) グリッド。

[構 造] 平面形: 楕円形。規模: 長径1.64m/短径0.93m/深さ26cm。壁: 約55～75°の角度で立ち上がる。坑底はほぼ平坦。長軸方位: N-3°-E。

[覆 土] 2層に分層された。

[遺物] 土器破片が7点出土したが、3点を図示した。

[時期] 中期後葉（加曾利EⅣ式期）。

[遺物]（第38図、第18表）

[土器]（第38図1～3、第18表）

1は加曾利EⅠ式。2は加曾利EⅢ～Ⅳ式か。3は連弧文系土器と思われる。

65号土坑

[遺構]（第37図）

[位置]（D-3・4）グリッド。

[構造] 平面形：不整な隅丸方形。規模：長軸2.42m／短軸1.97m／深さ28cm。壁：40～50°の角度で立ち上がる。坑底には僅かに段差を持つ。長軸方位：N-25°-W。

[覆土] 7層に分層された。

[遺物] 土器破片59点・石器1点が出土した。

[時期] 中期後葉（加曾利EⅣ式期）。

[遺物]（第39図、第18・19表）

[土器]（第39図1～16、第18表）

破片16点を図示する。1は勝坂式。2～13は加曾利E式。14は中期の所産と思われるが型式不明なもの。15は連弧文系土器。16は堀之内Ⅰ式か。

[石器]（第39図17、第19表）

17は打製石斧である。石材はホルンフェルス。

68号土坑

[遺構]（第37図）

[位置]（D-4・5）グリッド。

[構造] 平面形：不整な楕円形。規模：長軸4.20m／短軸2.66m／深さ45cm／坑底からピット部の深さ36cm。壁：70～80°の角度で立ち上がる。坑底はほぼ平坦だが、北寄りにピット状の掘り込みを持つ。長軸方位：N-15°-W。

[遺物] ピット状の掘り込み部を中心に土器が出土し、復元個体1点、破片資料102点であった。

[時期] 中期後葉（加曾利EⅣ式期）。

[遺物]（第40図、第18・19表）

[土器]（第40図1～8、第18表）

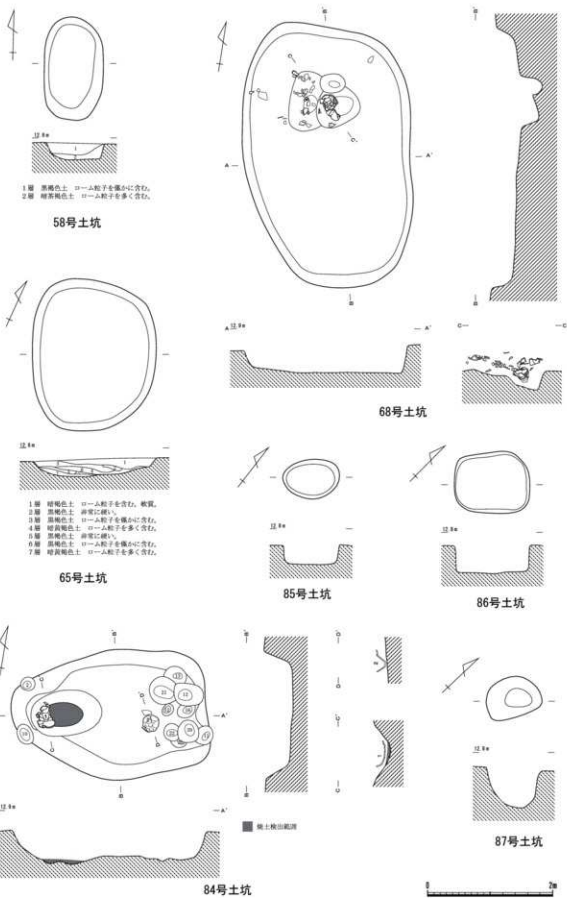
復元個体及び、比較的大型の破片7点を図示する。1は縄文地文のみ施文する深鉢である。外面下部及び内面上部はケズリ調整が顕著にみられる。2・3は加曾利EⅠ式、4～8は加曾利EⅣ式。

[石器]（第40図9、第19表）

9は打製石斧である。石材は凝灰岩。

84号土坑

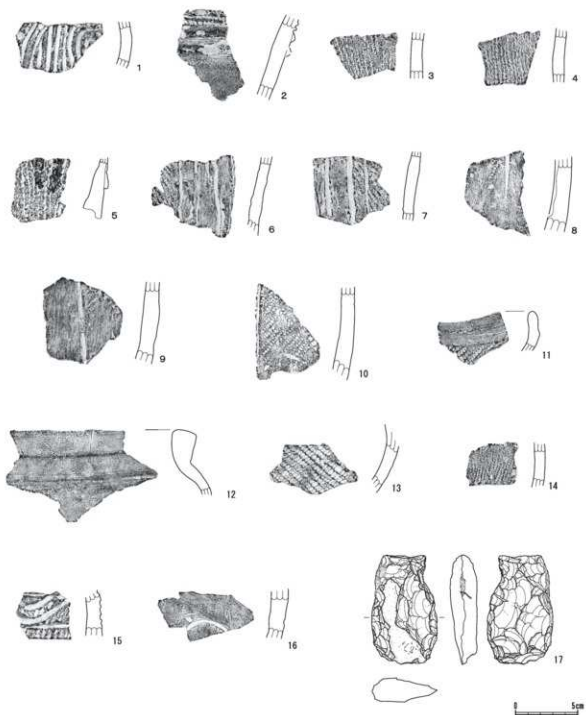
[遺構]（第37図）



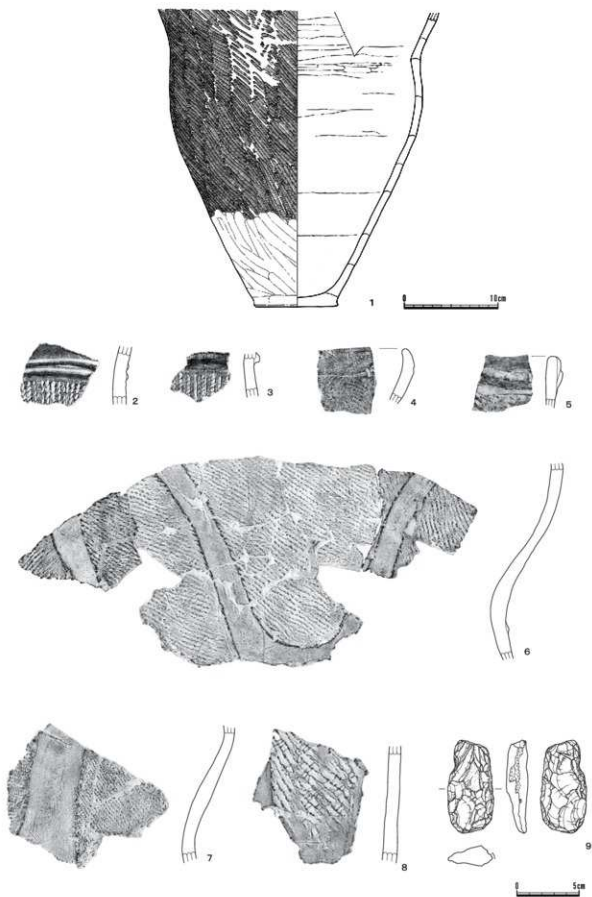
第37図 土坑(1/60)



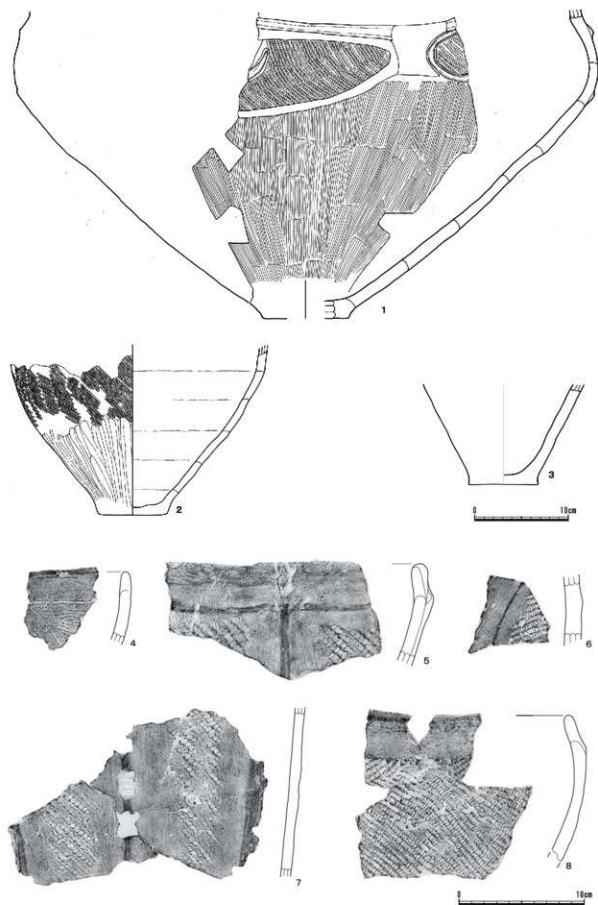
第38図 58号土坑出土遺物(1/3)



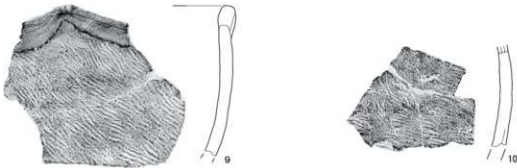
第39図 65号土坑出土遺物(1/3)



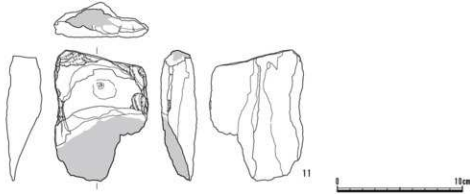
第40図 68号土坑出土遺物(1/4・1/3)



第41図 84号土坑出土遺物1 (1/4・1/3)



第42図 84号土坑出土遺物2 (1/3)



第43図 86号土坑出土遺物 (1/3)



第44図 87号土坑出土遺物 (1/3)



[位 置] (D-4) グリッド。

[構 造] 平面形：不整形。東端のピットは後世のものと思われる。規模：長軸3.11m／短軸2.07m／深さ平坦部44cm・掘り込み部54cm。壁：60～70°の角度で立ち上がる。西端には被熱した燃焼部を伴う掘り込みを検出した。長軸方位：N-80°-E。

[遺 物] 土器小破片が比較的多く出土し、復元個体3点、破片資料132点であった。

[時 期] 中期後葉（加曾利EⅣ式期）。

[所 見] 当初は住居跡として調査したが、規模が小さく、坑底に燃焼部をもつことから、炉穴の可能性がある。

遺 物 (第41・42図、第18・19表)

[土 器] (第41・42図1～10、第18表)

10点を図示する。1は加曾利EⅢ式の浅鉢、2・3は深鉢の胴下部、4～10は加曾利EⅣ式。

[石 器] (第42図11、第19表)

11は石皿の破片である。石材は結晶片岩。

第3章 中道遺跡第39地点の調査

検出番号	出土遺構	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物				備考		
						石	角	礫	砂		他	
第38図1	58D	口縁	口唇部欠損／器系文R／口唇部直下と頸部に隆帯	にぶい赤褐 2.5YR4/3	加曾利EⅠ				○	白	磁石に付く	
第38図2	58D	胴	沈線／楕円形の刺突文	にぶい赤褐 5YR5/4	加曾利EⅢ～Ⅳ					○	磁石に付く	
第38図3	58D	胴	縄文LR／沈線文	にぶい褐 7.5YR6/4	連弧文系?					○		
第39図1	65D	口縁	口唇部欠損／裾曲文	橙 5YR6/6	勝飯					○	白	
第39図2	65D	胴	頸部無文帯／器系文L／頸部に2本の隆帯	にぶい褐 7.5YR6/3	加曾利EⅠ					○	白	
第39図3	65D	胴	器系文L	灰褐 7.5YR5/2	加曾利EⅠ～Ⅱ		○			○		
第39図4	65D	胴	器系文R	にぶい褐 7.5YR5/3	加曾利EⅠ～Ⅱ				○	○		
第39図5	65D	底	底面欠損／器系文L／隆帯による懸垂文	橙 5YR6/6	加曾利EⅠ					○	内面は黒色	
第39図6	65D	胴	縄文LR／4本の沈線による懸垂文の間に磨消	褐灰 5YR4/1	加曾利EⅢ		○			○		
第39図7	65D	胴	縄文LR／4本の沈線による懸垂文	にぶい橙 5YR6/4	加曾利EⅢ				○	○		
第39図8	65D	胴	縄文RL／磨消縄文／沈線による懸垂文	浅黄橙 7.5YR8/4	加曾利EⅢ					○	内面は灰黄褐色	
第39図9	65D	胴	縄文RL／磨消縄文／沈線による懸垂文	橙 5YR6/6	加曾利EⅢ～Ⅳ					○	内面は灰褐色	
第39図10	65D	胴	縄文LR／沈線文	にぶい橙 7.5YR7/4	加曾利EⅢ～Ⅳ					○	内面は灰褐色	
第39図11	65D	口縁	波状口縁／微隆起線による口縁部無文帯区画／縄文LR	にぶい橙 7.5YR7/4	加曾利EⅣ					○	褐	
第39図12	65D	口縁	口唇部外積／無文	橙 2.5YR6/6	加曾利E					○	浅鉢	
第39図13	65D	胴	縄文LR	にぶい褐 7.5YR6/3	加曾利E					○	褐	
第39図14	65D	胴	縄文LR	橙 5YR6/6	中期				○	○	内面は灰褐色	
第39図15	65D	胴	器系文L／横位の平行沈線／連弧文	灰褐 7.5YR5/2	連弧文系					○	内面は黒色	
第39図16	65D	胴	沈線による弧線文	にぶい橙 7.5YR7/4	壺之内Ⅰ					○		
第40図1	68D	胴～底	最大径29cm／現器高32.8cm／縄文L／内面および外面下部はケズリ調整	にぶい橙 7.5YR7/4	中期末～後期初頭					○	○	
第40図2	68D	胴	器系文L／隆帯による頸部無文帯区画	にぶい橙 7.5YR7/4	加曾利EⅠ					○	白	内面は灰褐色 磁石に付く
第40図3	68D	胴	器系文L／隆帯による頸部区画	黒褐 7.5YR3/2	加曾利EⅠ		○	○		○		
第40図4	68D	口縁	縄文RL／沈線による口縁部無文帯区画	にぶい赤褐 2.5YR4/4	加曾利EⅣ				○	○		
第40図5	68D	口縁	縄文R?／微隆起線による口縁部無文帯区画	浅黄橙 7.5YR8/4	加曾利EⅣ					○	内面は灰褐色	
第40図6	68D	胴	縄文L／微隆起と磨消しによるU字区画文	灰褐 7.5YR4/2	加曾利EⅣ				○	○		
第40図7	68D	胴	縄文LR／微隆起と磨消しによるU字区画文?	明赤褐 2.5YR5/6	加曾利EⅣ					○		
第40図8	68D	胴	縄文LR／微隆起と磨消しによる区画文	橙 5YR6/6	加曾利EⅣ					○	内面はにぶい 褐色	
第41図1	84D	胴～底	推定最大径61.5cm／現器高32.5cm条線文／隆帯による口縁部文様帯／文様帯区画内は縄文RL	明赤褐 2.5YR5/6	加曾利EⅢ					○	褐	
第41図2	84D	胴～底	現最大径27cm／現器高17.5cm／底径7cm縄文LR	灰褐 7.5YR4/2	加曾利EⅣ					○	内面はにぶい 褐色	
第41図3	84D	胴～底	現器高10.3cm／底径7cm／無文	明赤褐 2.5YR5/6	加曾利EⅢ～Ⅳ					○	内面は黒褐色 磁石に付く	

※角：角閃石・輝石 礫：磁礫 砂：砂粒 褐：褐色粘土

第18表 縄文時代の土坑出土土器一覧(1)

縄文番号	出土遺構	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物					備考
						石	角	礫	砂	他	
第41図4	84D	口縁	縄文LR/沈線による口縁部無文部区画/沈線と磨消しによる区画文	黒褐 10YR3/1	加曾利EⅢ~IV			○	○		内面は黒色
第41図5	84D	口縁	縄文LR/隆帯による口縁部無文部区画/隆帯による懸垂文	橙 7.5YR7/6	加曾利EIV		○	○	○		磁石に付く
第41図6	84D	胴	縄文RL/微隆起線による曲線文	灰白 10YR8/2	加曾利EIV				○		内面は黒褐色
第41図7	84D	口縁	縄文LR/微隆起線による口縁部無文部区画	にぶい褐 7.5YR5/3	加曾利EIV				○		内面は黒褐色
第41図8	84D	口縁	波状口縁/微隆起線による口縁部無文部区画/縄文L	橙 5YR6/6	加曾利EIV				○		磁石に付く
第42図9	84D	胴	縄文LR/隆帯による懸垂文の脇を磨消し	にぶい黄橙 10YR6/4	加曾利EIV				○		内面は橙色
第42図10	84D	胴	縄文L	にぶい黄橙 10YR6/3	加曾利EⅢ~IV				○		
第43図1	86D	胴	縄文LR	にぶい赤褐 5YR5/4	中期か		○		○		内面は黒褐色
第44図1	87D	胴	無文/太沈線?	明赤褐 5YR5/6	中期か		○	○	○		

※角:角閃石・輝石 礫:細礫 砂:砂粒 磁:褐色磁石

第18表 縄文時代の土坑出土土器一覽(2)

縄文番号	遺構名	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	特徴
第39図17	65D	打製石斧	ホルンフェルス	87.2	52.7	20.7	113.2	表面に原礫面を広く残す/両側縁の一部に顕著な敲打痕
第40図9	68D	打製石斧	凝灰岩	73.7	36.6	17.0	52.2	表面の一部に原礫面/両側縁の一部に顕著な敲打痕
第42図11	84D	石皿	結晶片岩	104.0	74.7	28.5	200.8	破片/中央に凹面/縁辺に敲打痕が認められる

(単位:mm,g)

第19表 縄文時代の土坑出土土器一覽

85号土坑

遺構(第37図)

[位置] (C-5) グリッド。

[構造] 平面形:楕円形。規模:長径0.90m/短径0.63m/深さ32cm。壁:80°前後で急斜に立ち上がる。長軸方位:N-50°-E。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 覆土の観察から縄文時代と思われるが詳細な時期は不詳である。

86号土坑

遺構(第37図)

[位置] (C-4) グリッド。

[構造] 平面形:隅丸方形。規模:長軸1.20m/短軸0.98m/深さ44cm。壁:ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位:N-45°-E。

[遺物] 土器破片が1点出土した。

[時期] 縄文時代中期か。

遺物(第43図、第18表)

[土器] (第43図1、第18表)

1は縄文地文部の破片である。

87号土坑

遺構 (第37図)

[位置] (C・D-4) グリッド。

[構造] 平面形：不整な楕円形。規模：長径0.87m／短径0.64m／深さ64cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。坑底は丸底。長軸方位：N-30°-E。

[遺物] 土器破片が1点出土した。

[時期] 縄文時代中期か。

遺物 (第44図、第18表)

[土器] (第44図1、第18表)

1は無文部の破片である。端部に窪みが観察できるが太い沈線か押圧によるものか判然としない。

第3節 近世以降の遺構・遺物

(1) 概要

近世の遺構としては、土坑44基(38・57・59・64・66・67・69・83・88D)、井戸跡1基(1W)である。土坑では、55・57Dは地下室である。

なお、各遺構の時代設定は、本報告に掲載した遺物の中の陶磁器・土器の年代を中心に詳細年代を明示し、それ以外は近世以降と表記した。

(2) 土坑

ここでは、平面形及び細部の形態的な特徴を、本報告第2章第4節と同様に城山遺跡第42地点で報告された分類基準に当てはめて説明することにする(尾形・深井・青木 2005)。基本構造については、第20表を参照。

A群 方形の土坑 0基

1類 袋状の構造を呈する

2類 袋状の構造ではなく、単純構造を呈する

B群 長方形の土坑 18基(1類-3基、2類-15基、3類-0基、4類-0基)

1類 溝状土坑 3基(42・56・60D)

2類 幅狭の長方形土坑 15基(38・43・44・51・53・59・61・62・64・66・69・72・76・77・83D)

3類 幅広の長方形土坑 0基

4類 火床部を有する土坑 0基

C群 円形・楕円形の土坑 23基(39・41・46・50・52・54・63・67・70・71・73・75・78・82・88D)

D群 不整形の土坑 1基(45D)

E群 地下室・地下坑 2基(1類-2基、2類-0基)

1類 1堅坑1主体部タイプ 2基(55・57D)

2類 特殊タイプ 0基

A群 方形の土坑

今回の調査では該当する土坑はなかった。

B群 長方形の土坑

18基検出された。今回の調査では、3・4類は検出されずに1・2類に限定できる。なお、今回、B群において、遺物出土のないものは、第3図の全測図と第20表を参照とするのみで、個々の説明及び詳細図については割愛することにした。

1類 溝状土坑

42・56・60Dの3基が該当する。3基ともに長軸方向は一定していないが、調査区西半部の(B・C-2・3)Gに分布する状況である。

42号土坑

遺構 (第29図、第20表)

[位置] (B-3)グリッド。

[構造] 平面形：長方形。規模：368×60cm/深さ48cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-60°-E。

[覆土] ローム粒子を僅かに含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 陶器1点が出土した。

[時期] 近世(19世紀)。

遺物 (図版24-1、第21表)

[陶器] (図版24-1-1、第21表)

1は陶器である。

2類 幅狭の長方形土坑

38・43・44・51・53・59・61・62・64・66・69・72・76・77・83Dの15基が該当する。本類は1類より長軸が短いというだけで、厳密には1類との区分は困難であると言える。調査区南半部の(A・B-1~4)グリッドからやや集中して検出されている。

38号土坑

遺構 (第45図、第20表)

[位置] (B-1・2)グリッド。

[構造] 平面形：長方形。規模：226×132cm/深さ88cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-5°-W。

[覆土] 4層に分層された。

[遺物] 磁器1点が出土した。

[時 期] 近世（17世紀）。

[遺 物] (図版23-1、第21表)

[磁 器] (図版23-1-1、第21表)

1は磁器である。

43号土坑

[遺 構] (第45図、第20表)

[位 置] (A・B-4) グリッド。

[構 造] 平面形：長方形。規模：298×118cm／深さ26cm。坑底は平坦で、壁は約70°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-2°-W。

[遺 物] 磁器・陶器が1点ずつ出土した。

[時 期] 近世（19世紀）。

[遺 物] (図版24-2、第21表)

[陶磁器] (図版24-2-1・2、第21表)

1は磁器、2は陶器である。

44号土坑

[遺 構] (第45図、第20表)

[位 置] (A・B-3) グリッド。

[構 造] 77Dと重複。平面形：長方形。規模：238×98cm／深さ49cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、形状は円筒形を呈する。長軸方位：N-1°-E。

[覆 土] ローム粒子を僅かに含む暗褐色土を基調とする。

[遺 物] 磁器1点を図示した。

[時 期] 近世（19世紀）。

[遺 物] (第52図、図版24-3、第21表)

[磁 器] (第52図1、図版24-3-1、第21表)

1は磁器である。

51号土坑

[遺 構] (第45図、第20表)

[位 置] (B-2) グリッド。

[構 造] 平面形：長方形。規模：248×80cm／深さ36cm。坑底は平坦で、壁は約70°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-77°-W。

[覆 土] ローム粒子を僅かに含む暗褐色土を基調とする。

[遺 物] 陶磁器を僅かに出土したが、陶器1点を図示した。

[時 期] 近世（19世紀）。

[遺 物] (第59図、図版26-4、第21表)

[陶 器] (第59図-1、図版26-4-1、第21表)

1は陶器である。

62号土坑

遺構 (第45図、第20表)

位置 (B-4) グリッド。

構造 61Dと重複。平面形：長方形。規模：244×60cm/深さ22cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-87°-W。

遺物 陶器1点・土器1点を図示した。

時期 近世(19世紀)。

遺物 (図版29-2、第21表)

陶器・土器 (図版29-2-1・2、第21表)

1は陶器、2は土器である。

66号土坑

遺構 (第47図、第20表)

位置 (D-3) グリッド。

構造 平面形：長方形。規模：200×122cm/深さ26cm。坑底は平坦で、壁は約70°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-30°-W。

遺物 陶磁器、土器、石製品(砥石)が出土した。

時期 近世(19世紀)。

遺物 (第64図、図版29-3、第21表)

陶磁器・土器 (第64図1~3、図版29-3-1~3、第21表)

1は磁器、2は陶器、3は土器である。

石製品 (第64図4、図版29-3-4)

砥石である。長さ4.5cm・幅1.5cm・厚さ1.2cm・重さ12.6g。4面が使用面であり、上部先端は尖り気味である。表面全体が錆着し、茶色く変色している。石材は凝灰岩である。

72号土坑

遺構 (第47図、第20表)

位置 (C-5) グリッド。

構造 平面形：長方形。規模：232×154cm/深さ72cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-14°-W。

覆土 6層に分層された。

遺物 陶器1点が出土した。

時期 近世(19世紀)。

遺物 (図版29-4、第21表)

陶器 (図版31-4-1、第21表)

1は陶器である。

C群 円形・楕円形の土坑

39～41・46～50・52・54・63・67・70・71・73～75・78～82・88 Dの23基が該当する。B群2類とはほぼ同じ調査区南端部の(A・B-1～4)Gからやや集中して検出されている。

39号土坑

遺構 (第29図、第20表)

位置 (A-2)グリッド。

構造 平面形：楕円形。規模：72cm×不明/深さ74cm。ピット状の掘り込みである。長軸方位：N-8°-E。

遺物 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

時期 覆土から観察して、近世以降と思われる。

40号土坑

遺構 (第47図、第20表)

位置 (A-2)グリッド。

構造 平面形：楕円形。規模：120×78cm/深さ30cm。坑底は平坦で、壁は約70°の角度で緩やかに立ち上がる。本土坑に切られるやや不整形の遺構は遺構名が付いていない。長軸方位：N-80°-W。

遺物 陶磁器・土器が僅かに出土した。

時期 近世(18世紀)。

遺物 (第50図、図版23-2、第21表)

陶磁器・土器 (第50図2・3・5、図版23-2-1～5、第21表)

1・2は磁器、3・4は陶器、5は土器である。

41号土坑

遺構 (第47図、第20表)

位置 (C-3)グリッド。

構造 礫を伴う掘り込みである。礫は南北255cm・東西195cmの範囲に広がり、掘り込み部分には集中して出土している状況である。以下は掘り込みの内容である。平面形：楕円形。規模：54×45cm/深さ7cm。断面は皿状である。長軸方位：N-20°-W。

遺物 陶磁器・土器・瓦が出土した。

時期 近世(19世紀)。

所見 調査当初は縄文時代の集石と考えていたが、礫と同時に安定して近世の遺物が出土していることから、近世の土坑として扱うこととした。

遺物 (第51図、図版23-3、第21表)

陶磁器・土器 (第51図1～8・11、図版23-3-1～14、第21表)

1～7は磁器、8～12は陶器、13・14は土器である。

瓦 (第51図15、図版23-3-15)

平瓦の破片である。長さ11.3cm。最大幅13.0cm・厚さ2.1cm。重さ256g。

46号土坑

遺構 (第29図、第20表)

[位置] (C-2・3) グリッド。

[構造] 平面形：楕円形。規模：60×50cm/深さ18cm。ピット状の土坑で、坑底は中央が低く、壁は緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-33°-E。

[覆土] 2層が覆土である。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 覆土から観察して、近世以降と思われる。

47号土坑

遺構 (第47図、第20表)

[位置] (B-2) グリッド。

[構造] 平面形：楕円形。規模：120×115cm/深さ20cm。坑底は平坦で、壁は約80°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-22°-W。

[覆土] 2層に分層された。

[遺物] 陶磁器、土器、鉄製品、瓦が出土した。その他として、粘土塊・スラッグ（鉄滓）が出土した。

[時期] 近世（19世紀）。

遺物 (第55図、図版25-2、第21表)

[陶磁器・土器] (第55図1~3・6・8・9、図版25-2-1~9、第21表)

1~5は磁器、6・7は陶器、8・9は土器である。

[瓦] (第55図10、図版25-3-10)

10は平瓦の破片である。長さ7.7cm・幅5.3cm・厚さ1.9cm・重さ69g。

[鉄製品] (第55図11、図版25-3-11)

11は釘である。長さ5.5cm・幅0.9cm・厚さ0.7cm・重さ8.3cm。断面形は長方形を基本とする。

[その他] (図版25-3-12~15)

12はスラッグである。長さ4.5cm・幅4.0cm・重さ53g。

13~15はササ入りの粘土塊である。13は長さ6.3cm・幅5.0cm・重さ106g。鉄滓と錆着した木材の付着した部分がある。14は長さ6.5cm・幅7.3cm・重さ97g。15は長さ8.2cm・幅6.0cm・重さ111g。内側曲線部及び上面と下面には成形面があることから、鋳型あるいは炉壁の一部であろうか。

48号土坑

遺構 (第47図、第20表)

[位置] (B-2) グリッド。

[構造] A・Bとして扱った。平面形：A・Bともに楕円形。規模：Aは不明×88cm/Bは146×112cm。深さAは15cm/Bは46cm。坑底は基本的に平坦で、緩やかに立ち上がる。長軸方位：AはN-43°-W。BはN-85°-W。

[遺物] 陶器1点・土器1点を図示した。

[時期] 近世(19世紀)。

[所見] 墓坑の可能性ある。

[遺物] (第56図、図版26-2、第21表)

[陶器・土器] (第56図1・2、図版26-2-1・2、第21表)

1は陶器、2は土器である。

49号土坑

[遺構] (第47図、第20表)

[位置] (B-2)グリッド。

[構造] A・Bとして扱った。新旧はAが新しい。平面形：A・B-楕円形。規模：Aは106×80cm/Bは120×110cm/深さAは22cm/Bは28cm。坑底は基本的に平坦で、緩やかに立ち上がる。

長軸方位：AはN-78°-E/BはN-80°-E。

[覆土] A：単層。B：2層に分層された。

[遺物] 陶磁器、土器が、鉄製品(鉤か・釘)、銅製品(環・煙管)、銭貨(文久永寶)が出土した。

[時期] 近世(19世紀)。

[遺物] (第57図、図版26-1、第21表)

[陶磁器・土器] (第57図1・5、図版26-1-5、第21表)

1・2は磁器、3・4は陶器、5は土器である。

[銅製品] (第57図6・7、図版26-1-6・7)

6は煙管で、銅製品としては、雁首・吸口部分である。雁首は木質部分が残っている。雁首：長さ5.0cm・最大幅1.2cm・高さ1.0cm・重さ14.4g。火皿部分は欠損。吸口：長さ7.0cm・最大幅1.2cm・重さ15.0g。

7は環状製品である。外径6.3cm・内径5.4cm・高さ0.4cm・幅3.5cm・重さ2.6g。不明品である。

[鉄製品] (第57図8-15、図版26-1-8-15)

8は環状製品である。外径2.7cm・内径1.9cm・高さ0.7cm・幅0.4cm・重さ3.9g。不明品である。

9は鉤か。長さ6.9cm・最大幅0.8cm・高さ0.7cm・重さ6.9g。

10-13は釘である。10は長さ6.1cm・最大幅0.7cm・高さ0.6cm・重さ5.4g。11は長さ6.1cm・最大幅0.8cm・高さ0.7cm。重さ5.9g。12は長さ5.9cm・最大幅0.9cm・高さ0.6cm。重さ6.8g。13は長さ5.9cm・最大幅1.4cm・高さ0.7cm・重さ7.8g。

14・15は不明品である。14は長さ5.6cm・幅1.3cm・重さ11.0g。鍔?鉤?であろうか。15は長さ5.7cm・幅3.5cm・高さ1.0cm・重さ12.4g。不明品である。

[銭貨] (第57図16、図版26-1-16)

16は文久永寶である。外径2.7cm・方孔一辺0.7cm・厚さ0.1cm・重さ2.8g。初鋳1863年。

50号土坑

[遺構] (第47図、第20表)

[位置] (B-2)グリッド。

[構造] 平面形：楕円形。規模：140×124cm/深さ78cm。坑底は平坦で、壁は約80°の角度で立

ち上がる。長軸方位：N-10°-E。

[覆 土] 8層に分層できた。

[遺 物] 陶器・土器を僅かに出土したが、土器1点を図示した。

[時 期] 近世（19世紀）。

[所 見] 覆土中に骨灰（4層）が確認できたことから、墓坑の可能性がある。

遺 物（第58図、図版26-3、第21表）

[土 器]（第58図1、図版26-3-1、第21表）

1は土器である。

[石 製 品]（第58図2、図版26-3-2）

2は砥石である。長さ6.2cm・幅3.6cm・厚さ1.4cm・重さ29.0g。石材は粘板岩。遺構外出土の砥石（第80図138）と同一個体の可能性があるが、接合は不可。

52号土坑

遺 構（第48図、第20表）

[位 置]（B-2）グリッド。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：132×88cm／深さ26cm。坑底の中央やや西側が窪んでいる。壁はセクションB-B'で約80°の角度で急であるが、セクションA-A'では緩やかである。長軸方位：N-30°-W。

[覆 土] 3層に分層できた。

[遺 物] 陶磁器・土器が僅かに出土しているが、陶器1点を図示した。

[時 期] 近世（19世紀）。

遺 物（第60図、図版26-5、第21表）

[陶 器]（第60図1、図版26-5-1、第21表）

1は陶器である。

54号土坑

遺 構（第48図、第20表）

[位 置]（C-2）グリッド。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：76×70cm／深さ34cm。坑底は平坦で、壁は約70°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-10°-W。

[覆 土] 2層に分層できた。

[遺 物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時 期] 覆土から観察して、近世以降と思われる。

63号土坑

遺 構（第29図、第20表）

[位 置]（C-3）グリッド。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：70×56cm／深さ10cm。坑底は平坦で、壁は約65°の角度で立ち

上がる。長軸方位：N-12°-W。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 覆土から観察して、近世以降と思われる。

[所見] 覆土中に骨灰が確認できたことから、墓坑の可能性がある。

67号土坑

[遺構] (第29図、第20表)

[位置] (B-3) グリッド。

[構造] 7Jを切る。平面形：楕円形。規模：不明×128cm/深さ42cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。西壁部分は確認できなかった。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 覆土から観察して、近世以降と思われる。

70号土坑

[遺構] (第48図、第20表)

[位置] (C-4・5) グリッド。

[構造] 平面形：楕円形。規模：84×68cm/深さ32cm。坑底は平坦で、壁は約70°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-30°-E。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 覆土から観察して、近世以降と思われる。

71号土坑

[遺構] (第48図、第20表)

[位置] (C-5) グリッド。

[構造] 平面形：楕円形。規模：78×64cm/深さ20cm。坑底は平坦で、壁は約70°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-70°-E。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 覆土から観察して、近世以降と思われる。

73号土坑

[遺構] (第48図、第20表)

[位置] (C-4・5) グリッド

[構造] 平面形：楕円形。規模：312×240cm/深さ58cm。坑底は中央付近でやや窪んでいる。壁は約65°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-11°-E。

[覆土] 7層に分層できた。

[遺物] 磁器1点、土器1点が僅かに出土した。

[時期] 近世(19世紀)。

[遺物] (第65図、図版29-5、第21表)

[磁器・土器] (第65図1・2、図版29-5-1・2、第21表)

1は磁器、2は土器である。

74号土坑

[遺 構] (第48図、第20表)

[位 置] (A-4) グリッド。

[構 造] 南側は調査区外にあると思われるため、規模等の詳細は不明である。平面形：楕円形か。深さ46cm。坑底はほぼ平坦で、壁は約60°の角度で立ち上がる。

[覆 土] 3層に分層できた。

[遺 物] 陶器2点が出土したが、1点を図示した。

[時 期] 近世(19世紀)。

[遺 物] (第66図、図版30-1、第21表)

[陶 器] (第66図1、図版30-1-1、第21表)

1は陶器である。

75号土坑

[遺 構] (第48図、第20表)

[位 置] (B-4) グリッド。

[構 造] 東側は調査区にあると思われるため、詳細は不明であるが、4mを超える規模のやや大きめの土坑である。平面形：楕円形。規模：422cm×不明/深さ46cm。坑底はやや凹凸があり、壁は約55°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-5°-W。

[覆 土] 5層に分層できた。

[遺 物] 陶器1点、磁器1点が出土した。

[時 期] 近世(19世紀)。

[遺 物] (図版30-2、第21表)

[陶 器] (図版30-2-1・2、第21表)

1は磁器、2は陶器である。

78号土坑

[遺 構] (第48図、第20表)

[位 置] (B-3・4) グリッド。

[構 造] 83Dと重複。平面形：楕円形。規模：188×136cm/深さ38cm。坑底はやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-95°-W。

[遺 物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時 期] 覆土から観察して、近世以降と思われる。

79号土坑

[遺 構] (第48図、第20表)

[位置] (B-3・4) グリッド

[構造] 80・81 Dと重複。平面形：楕円形。規模：100cm×不明/深さ22cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-10°-E。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 覆土から観察して、近世以降と思われる。

80号土坑

[遺構] (第48図、第20表)

[位置] (B-3) グリッド

[構造] 79・81 Dと重複。平面形：楕円形。規模：82×68cm/深さ40cm。坑底は平坦で、壁は約65°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-28°-E。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 覆土から観察して、近世以降と思われる。

81号土坑

[遺構] (第29図、第20表)

[位置] (B-3) グリッド

[構造] 79・80 Dと重複。平面形：楕円形。規模：116×70cm/深さ26cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-85°-E。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 覆土から観察して、近世以降と思われる。

82号土坑

[遺構] (第29図、第20表)

[位置] (B-3) グリッド

[構造] 83Dと重複。平面形：楕円形。規模：不明×73cm/深さ18cm。坑底は平坦で、壁は約50°の角度で立ち上がる。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 覆土から観察して、近世以降と思われる。

88号土坑

[遺構] (第48図)

[位置] (D-5) グリッド

[構造] 平面形：楕円形。規模：100×80cm/深さ58cm。坑底はほぼ平坦で、壁は約80°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-60°-W。

[遺物] 本遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

[時期] 覆土から観察して、近世以降と思われる。

D群 不整形の土坑

45 Dの1基が該当する。機能としては、近世のゴミ捨て場と思われる。

45号土坑

遺構 (第29図、第20表)

[位置] (A・B-3・4) グリッド。

[構造] 平面形：不整形。規模：335×300cm/深さ60cm。坑底は凹凸があり、大きく3箇所の窪みになっている。壁は垂直に立ち上がる状況ではなく、ダラダラと緩やかである。長軸方位：N-4°-W。

[覆土] 7層に分層できた。

[遺物] 陶磁器、土器、土製品、石製品(硯・砥石)、鉄製品(不用品・釘)、銭貨(寛永通宝か)が出土した。その他として、貝5点が出土した。

[時期] 近世(19世紀)。

遺物 (第53・54図、図版24-4、図版25-1、第21表)

[陶磁器・土器] (第53図1~16・18~33、図版24-4-1~27、図版25-1-28~33、第21表)

1~17は磁器、18~27・30~は陶器、33は土器である。

[土製品] (第54図34、図版25-1-34)

34は箱庭セットか。小型のもので、高さ1.5cm・幅1.3cm・重さ2.3g。中央部は高さ0.9cmの円柱状を呈し、白色塗装され部分的に淡緑色の円形文が施文される。胎土の色調は橙色。

[石製品] (第54図35~37、図版25-1-35~37)

35・36は硯である。35は長さ13.0cm・幅6.2cm・高さ1.2cm・重さ190g。硯側の高さ0.2cm。36は長さ5.6cm・幅6.6cm・高さ1.5cm・重さ80g。硯側の高さ0.2cm。

37は砥石である。長さ6.5cm・幅5.4cm・高さ0.8cm・重さ49g。

[鉄製品] (第54図38~40、図版25-1-38~40)

38は長さ7.1cm・最大幅2.8cm・高さ0.9cm・重さ17.4g。上部は外径2.8cm・内径1.2cmの環状を呈している。鉤か。

39・40は釘である。長さ8.0cm・最大幅1.0cm・高さ0.6cm・重さ7.5g。40は長さ3.6cm・最大幅0.7cm・高さ0.7cm・重さ4.2g。

[銭貨] (第54図41、図版25-1-41)

41は寛永通宝と思われる。外径2.5cm・方孔一辺0.6cm・厚さ0.1cm・重さ1.8g。

[貝類] (図版25-1-42~46)

42はサトウガイ、43~46はカキである

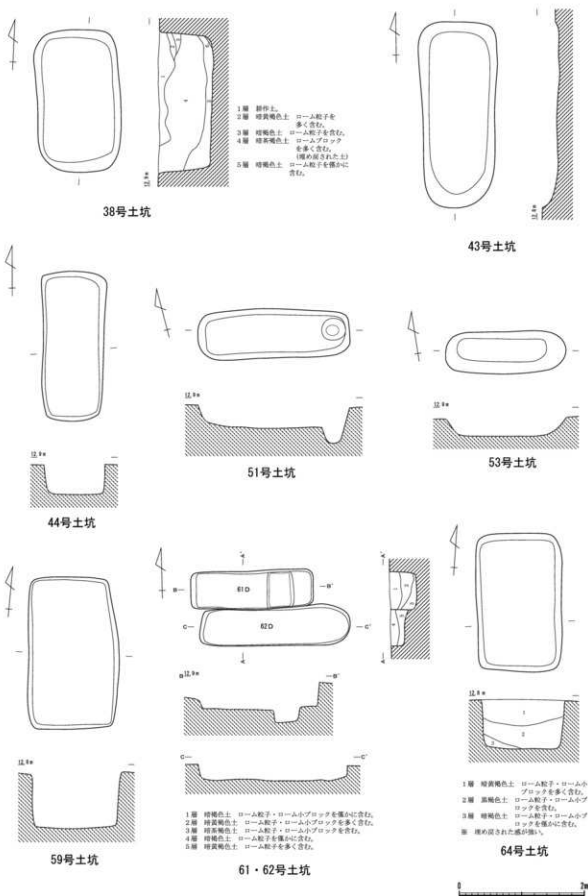
E群 地下室・地下坑

1類の1整坑1主体部タイプとして、55・57 Dの2基が該当する。ここでは地下式坑・地下室・地下坑(江戸遺跡研究会編 2001)の分類を参考とした。

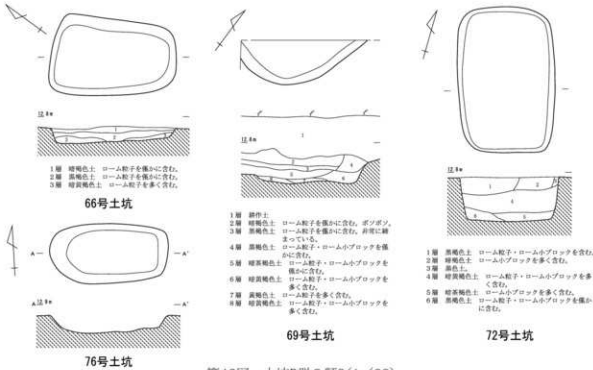
55号土坑

遺構 (第49図、第20表)

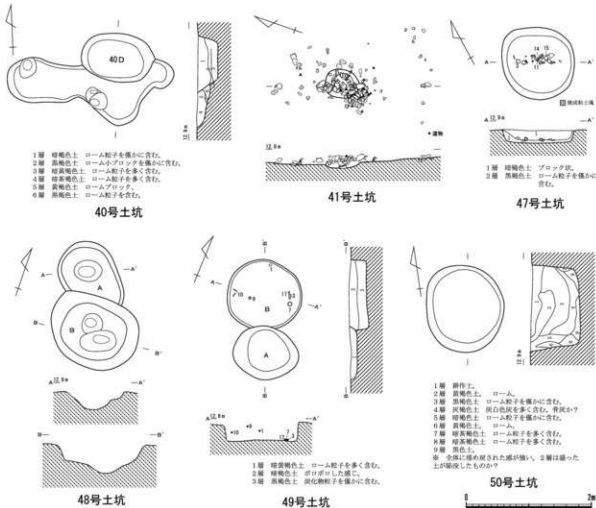
[位置] (B-4) グリッド。



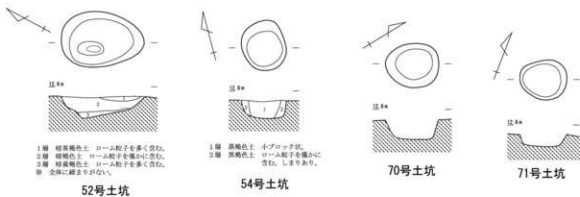
第45図 土坑B群2類1 (1/60)



第46図 土坑B群2類2(1/60)



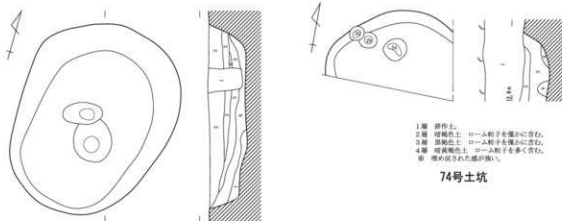
第47図 土坑C群1(1/60)



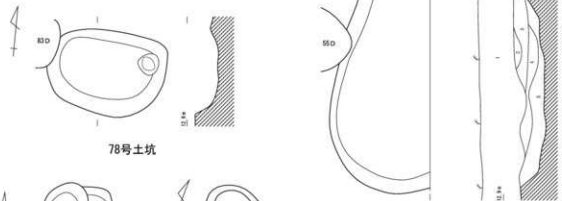
- 1層 暗赤褐色土 ローム粒子を多く含む。
2層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。
3層 暗赤褐色土 ローム粒子を多く含む。
※ 全体に締まりがない。

- 1層 暗褐色土 小ブロッコ状。
2層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。しまりあり。

- 1層 耕作土。
2層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。
3層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。
4層 暗赤褐色土 ローム粒子を多く含む。
※ 底の戻された感が強い。



- 1層 耕作土。
2層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロッコを多く含む。
3層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロッコを含む。
4層 暗赤褐色土 ローム粒子を多く含む。
5層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。よく締まる。
6層 暗赤褐色土 ローム粒子を多く含む。
7層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。

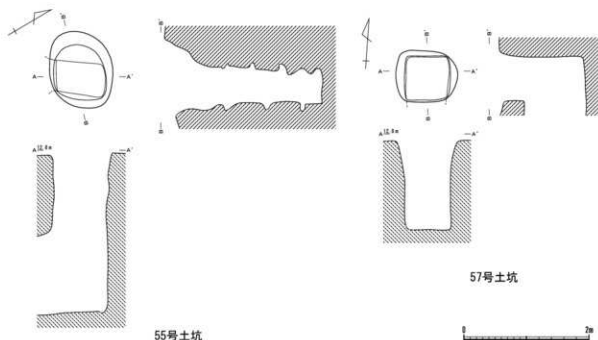


- 1層 耕作土。
2層 暗赤褐色土 ローム粒子を多く含む。
3層 暗褐色土 ブロッコ状で硬口。
4層 暗赤褐色土 ローム粒子・ローム小ブロッコを多く含む。
5層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロッコを多く含む。
6層 暗赤褐色土 ローム粒子を多く含む。よく締まる。
※ 底の戻された感が強い。

79・80号土坑 88号土坑



第48図 土坑C群2 (1/60)



55号土坑

57号土坑

第49図 土坑E群1類(1/60)

〔構造〕地下室の形態をもつ。主体部は空洞であり、陥落はしてなかった。主体部の調査は危険を伴うため、途中で断念したため、主体部の詳細内容は不明である。75 Dと重複。

〔入口竪坑部〕平面形：開口部は楕円形で、下端は長方形。規模：122×100cm/深さ234cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、途中に足掛け穴が数カ所確認できた。長軸方位：N-55°-W。

〔覆土〕ローム粒子を僅かに含む暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕陶磁器・土器、銅製品（切羽）を出土した。その他として、二枚貝（サトウガイ）が出土した。

〔時期〕近世（19世紀）。

〔遺物〕（第61図、図版26-6、図版27-1、第21表）

〔陶磁器・土器〕（第61図1～10、図版26-6-1～8、図版27-1-9～12、第21表）

1～4は磁器、5～11は陶器、12は土器である。

〔銅製品〕（第61図13、図版27-1-13）

13は切羽である。長さ3.6cm・幅2.0cm・厚さ0.1cm・重さ2.4g。穿孔の大きさは縦1.6cm・横0.6cm。完形品である。

〔貝類〕（図版27-1-14）

14は二枚貝のサトウガイ。放射肋38本。殻長10.3cm・殻幅7.3cm・殻高3.8cm・重さ39g。

57号土坑

〔遺構〕（第49図、第20表）

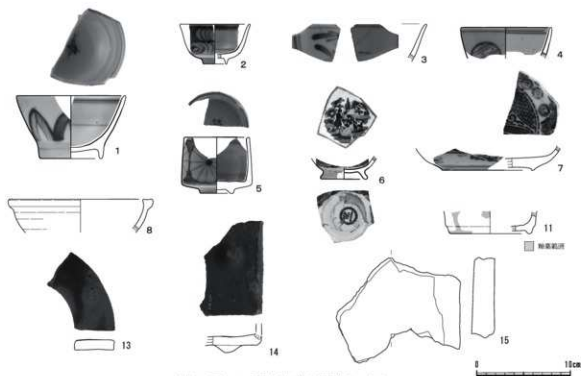
〔位置〕（C-3）グリッド。

〔構造〕地下室の形態をもつ。主体部は空洞であり、陥落はしてなかった。主体部の調査は危険を

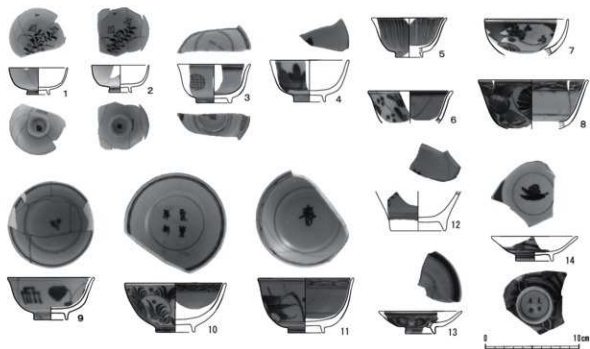


第50図 40号土坑出土遺物(1/4)

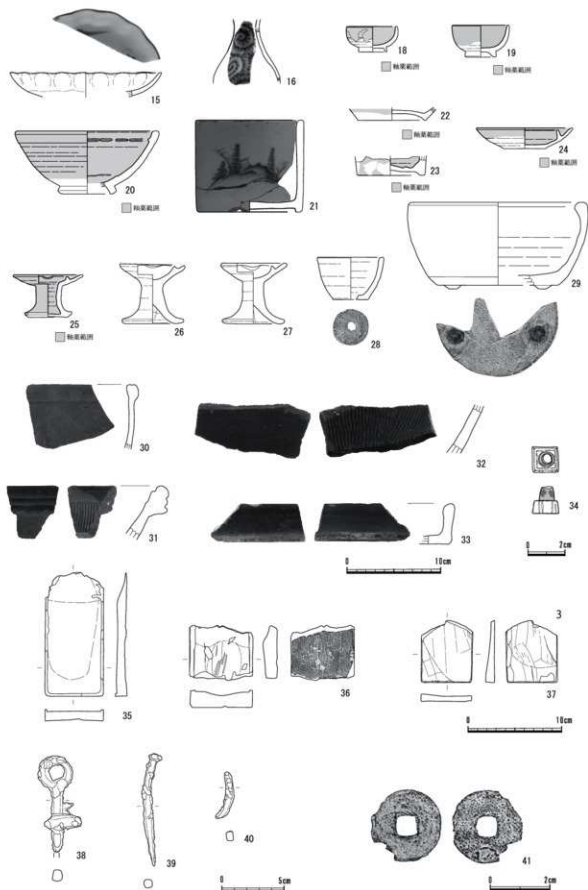
第52図 44号土坑出土遺物(1/4)



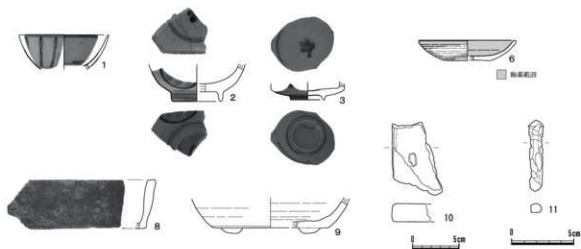
第51図 41号土坑出土遺物(1/4)



第53図 45号土坑出土遺物 1 (1/4)



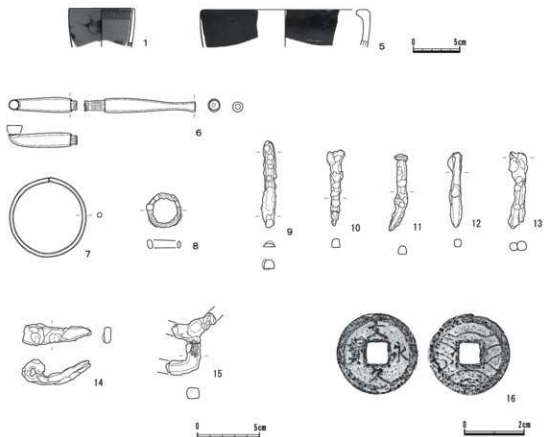
第54図 45号土坑出土遺物 2 (1/4・1/2・1/3・4/5)



第55図 47号土坑出土遺物(1/4・1/3)



第56図 48号土坑出土遺物(1/4)



第57図 49号土坑出土遺物(1/4・1/3・4/5)



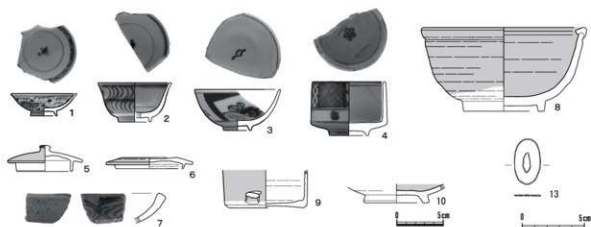
第58図 50号土坑出土遺物(1/4・1/3)



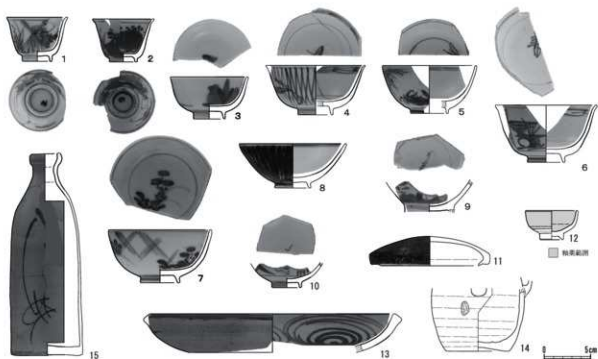
第59図 51号土坑出土遺物(1/4)



第60図 52号土坑出土遺物(1/4)



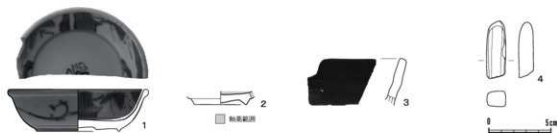
第61図 55号土坑出土遺物(1/4・1/3)



第62図 57号土坑出土遺物 I(1/4)



第63図 57号土坑出土遺物2 (1/4・1/3・1/8・1/6)



第64図 66号土坑出土遺物(1/4・1/3)



第65図 73号土坑出土遺物(1/4)



第66図 74号土坑出土遺物(1/4)

伴うため、途中で断念したため、主体部の詳細内容は不明である。

[入口竪坑部] 平面形：長方形。規模：98×82cm/深さ142cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部はやや広がる。長軸方位：N-86°-E。

[覆土] 竪坑部の覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 陶磁器・土器、土製品(羽口)、瓦、板碑、銅製品・鉄製品、石製品が出土した。その他として、貝(サトウガイ10点、アワビ1点)が出土した。

[時期] 近世(19世紀)。

[遺物] (第62・63図、図版27-2、図版28、図版29-1、第21表)

[陶磁器・土器] (第62・63図1~17・19~24、図版27-2-1~23、図版28-16・20・21・24、第21表)

1~11は磁器、12~18・24は陶器、19~23は土器である。

[土製品] (第63図25、図版29-1-25)

25は鞆の羽口である。長さ6.7cm・幅5.2cm・厚さ1.0cm・穿孔径2.8cm・重さ69.0g。表面には黒色のガラス質付着。

[瓦] (第63図26・27、図版29-1-26・27)

26は軒椀瓦で、長さ8.8cm・幅12.0cm・厚さ2.0cm・重さ280g。平部瓦当の文様は唐草文。

27は平瓦で、長さ9.7cm・幅8.9cm・厚さ2.0cm・重さ217g。

[板 碑] (第63図28、図版29-1-28)

長さ10.0cm・幅9.5cm・厚さ3.5cm・重さ326g。一部面取り部が残る。石材は緑泥片岩。

[銅 製品] (第63図29、図版29-1-29)

29は蓋である。径8.2cm・厚さ0.1cm・重さ14g。鈕部は径1.2cm・高さ1.1cm・座金径1.7cm。薬罐の蓋か。鈕・台座には蓮華文が施されている。

[鉄 製品] (第63図30~32、図版29-1-30~32)

30・31は鉄鑄の破片と思われる。30は長さ8.4cm・幅6.5cm・厚さ0.4cm・重さ55g。把手か。上部に2孔が穿たれている。31は長さ6.6cm・幅6.7cm・厚さ0.5cm・重さ43.4g。口縁部から底部にかけての破片と思われる。

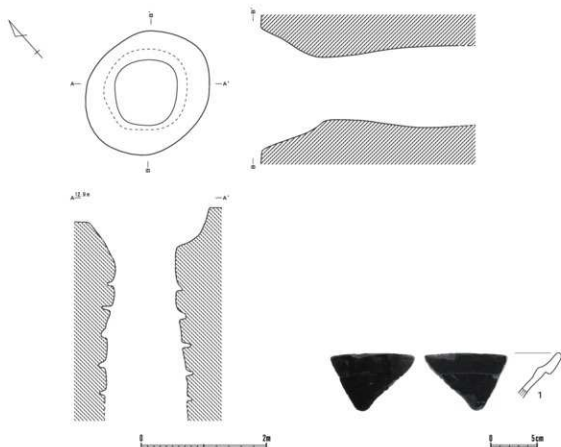
32は器高3.6cm・底径16.0cm・厚さ0.1cm・重さ16g。不明品であるが、容器と思われる。

[石 製品] (第63図33、図版28-33)

33は石臼である。長さ31.6cm・幅14.4cm・高さ11.6cm・重さ5,500g。推定径33.0cm。

[貝] (図版29-1-34~44)

34~43はサトウガイ、44はアワビである。



第67図 1号井戸跡・出土遺物(1/60・1/4)

神岡番号 図版番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)	製作の特徴等	推定産地	時期
図版23-1-1	38 D	磁器	碗	—	体部破片/無文	肥前系	近世(17c)
図版23-2-1	40 D	磁器	猪口	高[1.7]	口縁部小破片/外面:草花文、内面:圏線、見込みあり	肥前系	近世(18c)
第50図2 図版23-2-2	40 D	磁器	碗	高[3.4] 底(5.0)	広東碗/体部下半~底部破片/高台付/内外面呉須掻き、内面:二重圏線、見込みあり、外面:草花文、高台に圏線	肥前系	近世(18c)
第50図3 図版23-2-3	40 D	陶器	小碗	高[2.0] 底3.0	体部~底部/高台付、高さ0.7cm/外面体部~底部を除き灰輪/胎土の色調は淡黄褐色	瀬戸	近世(18c)
図版23-2-4	40 D	陶器	鉢	—	体部小破片/内外面灰輪/胎土の色調は暗黄褐色	瀬戸	近世(18c)
第50図5 図版23-2-5	40 D	土器	火鉢	高[5.7]	口縁部破片/口縁部は内留し、口唇部は平直/外面口縁部直下に1本の沈線/外面胴部に僅かに平行印き目痕が残る/内面には指頭による抑え痕あり/色調は淡褐色	在地区	近世(18c)
第51図1 図版23-3-1	41 D	磁器	碗	高6.7 口[11.6] 底6.6	広東碗/高台付/内面:二重圏線+圏線、見込みあり、外面:刺先文、高台外面に圏線、遺存度40%	瀬戸	近世(19c)
第51図2 図版23-3-2	41 D	磁器	碗	高4.2 口(7.4) 底[2.6]	破片/内面:口縁部直下に圏線、見込みに圏線、高台に圏線	瀬戸	近世(19c)
第51図3 図版23-3-3	41 D	磁器	碗	高[3.9]	口縁部~体部破片/外面:草花文、内面:圏線	肥前系	近世(19c)
第51図4 図版23-3-4	41 D	磁器	碗	高[3.3] 口(9.6)	口縁部~体部破片/外面:口縁部に圏線、内面:口縁部に二重圏線	瀬戸	近世(19c)
第51図5 図版23-3-5	41 D	磁器	碗	高[5.9] 口(6.8) 底(3.6)	筒碗/内面:圏線、見込みに五分文、外面:菊花つなぎ文、高台に圏線/胎土の色調は灰白色/遺存度20%	瀬戸	近世(19c)
第51図6 図版23-3-6	41 D	磁器	碗	高[2.5] 底5.0	体部下半~底部/高台付/内面:人物+風景文、外面:見込みに「WILLIAM」、刺印「3」/ウィリアム・アダムス社製品	イギリス	近世(19c)
第51図7 図版23-3-7	41 D	磁器	皿	高[2.6] 底(9.6)	体部下半~底部/高台付/化学コバルト/スタンプ	瀬戸	近世(19c)
第51図8 図版23-3-8	41 D	陶器	鉢	高[3.5] 口(15.4)	蓋物/口縁部~体部破片/全面灰輪/胎土の色調は灰褐色	瀬戸	近世(19c)
図版23-3-9	41 D	陶器	碗	—	体部小破片/胎土の色調は淡黄褐色	瀬戸	近世(19c)
図版23-3-10	41 D	陶器	土瓶	—	体部小破片/胎土の色調は灰色/外面に筋軸→輪は?	信楽系	近世(19c)
第51図11 図版23-3-11	41 D	陶器	德利	高[2.4] 底(8.8)	底部破片/外面に灰輪	瀬戸	近世(19c)
図版23-3-12	41 D	陶器	雄鉢	—	体部小破片/内面に10本一単位のハケ目/色調は暗茶褐色/胎土に白色砂粒を含む	瀬戸	近世(19c)
第51図13 図版23-3-13	41 D	土器	焙烙	—	火鉢の付属品か?編敷き?/厚さ1.1cm	在地区	近世(19c)
第51図14 図版23-3-14	41 D	土器	角火鉢	高[1.9]	底部破片/底部にボタン状の足1箇所あり/足の高さ0.7cm・径2.8cm	在地区	近世(19c)
図版24-1-1	42 D	陶器	德利	—	胴部破片/外面鉄絵	信楽系	近世(19c)
図版24-2-1	43 D	磁器	碗	—	体部小破片/外面:草花文	肥前系	近世(19c)
図版24-2-2	43 D	陶器	鉢	高[2.5]	胴部破片/削り高台/内面:灰輪/胎土の色調は淡黄褐色	瀬戸	近世(19c)
第52図1 図版24-3-1	44 D	陶器	皿?	高[2.8] 口(11.8)	口縁部~体部下半破片/内面:草花文・二重圏線、蛇の目刺ぎ/外面体部下半に模	肥前系	近世(19c)
第53図1 図版24-4-1	45 D	磁器	盃	高2.9 口6.2 底2.3	高台付/化学コバルト/内面:風景文、外面:見込みあり、文?/遺存度70%	瀬戸	近世(19c)
第53図2 図版24-4-2	45 D	磁器	盃	高2.9 口6.2 底2.3	高台付/化学コバルト/内面:風景文、外面:見込みあり、文?/遺存度60%	瀬戸	近世(19c)
第53図3 図版24-4-3	45 D	磁器	碗	高4.1 口(7.8) 底3.7	高台付/内面:圏線、見込みあり、外面:高台に圏線/遺存度20%未満	瀬戸	近世(19c)
第53図4 図版24-4-4	45 D	磁器	碗	高4.4 口(8.4) 底(3.3)	高台付/内面:見込みあり、外面:草花文/遺存度20%未満	瀬戸	近世(19c)
第53図5 図版24-4-5	45 D	磁器	碗	高4.2 口(8.0) 底(2.8)	内外面:千筋/遺存度20%未満	瀬戸	近世(19c)

第21表 土坑・井戸跡出土の陶磁器・土器一覧(1)

神岡番号 図版番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)	製作の特徴等	推定産地	時期
第53図6 図版24-4-6	45 D	磁器	碗	高13.5 口9.0	口縁部～体部破片/内面:二重彫線、外面:草花文	瀬戸	近世(19c)
第53図7 図版24-4-7	45 D	磁器	碗	高13.9 口9.0	口縁部～体部下破片/赤絵/外面:風景文	肥前系	近世(19c)
第53図8 図版24-4-8	45 D	磁器	碗	高15.2 口12.0	口縁部～体部下破片/内面:彫線?、外面:松葉文?	瀬戸	近世(19c)
第53図9 図版24-4-9	45 D	磁器	碗	高4.6 口9.2 底3.6	内面:二重彫線、見込みあり/遺存度90%	肥前系	近世(19c)
第53図10 図版24-4-10	45 D	磁器	碗	高5.2 口10.8 底4.1	高台付/化学コバルト/内面:彫線、見込みあり、外面:草花文/遺存度80%	肥前系	近世(19c)
第53図11 図版24-4-11	45 D	磁器	碗	高5.8 口10.4 底4.1	内面:彫線、見込み「寿」、外面:風景文/遺存度70%	肥前系	近世(19c)
第53図12 図版24-4-12	45 D	磁器	碗	高13.7 口5.8	直束焼/体部下～底部破片/高台付き/内面:彫線、見込みあり、外面:草花文	肥前系	近世(19c)
第53図13 図版24-4-13	45 D	磁器	小皿	高2.4 口8.8 底3.2	内面:彫線、外面:草花文/遺存度20%	肥前系	近世(19c)
第53図14 図版24-4-14	45 D	磁器	小皿	高2.6 口9.2 底3.7	内面:彫線、見込みあり、外面:草花文、見込み「大明年製」、高台に二重彫線/遺存度40%	瀬戸	近世(19c)
第54図15 図版24-4-15	45 D	磁器	菊皿	高12.6 口16.0	口縁部～体部破片/口唇部に鉄軸で線/内面:草花文	肥前系	近世(19c)
第54図16 図版24-4-16	45 D	磁器	德利	高6.5	頸部～胴部破片/外面:胡唐草文	肥前系	近世(19c)
図版24-4-17	45 D	磁器	急須	高5.7	注口破片/注口長さ(下端):4.5cm/内面に7孔あり/外面:松葉文	肥前系	近世(19c)
第54図18 図版24-4-18	45 D	陶器	小碗	高2.6 口5.4 底3.0	高台付/内面及び外面口縁部に灰軸/ビン留め3箇所/胎土の色調は淡黄褐色/完形品	瀬戸	近世(19c)
第54図19 図版24-4-19	45 D	陶器	小碗	高3.4 口6.0 底3.3	高台付/内面及び外面口縁部に灰軸/ビン留め3箇所/胎土の色調は淡黄褐色/遺存度80%	瀬戸	近世(19c)
第54図20 図版24-4-20	45 D	陶器	鉢	高6.7 口15.2 底4.7	削り出し高台/内面口縁部直下に着受部の段あり外面底部を除き灰軸/胎土の色調は淡灰褐色/遺存度20%未満	瀬戸	近世(19c)
第54図21 図版24-4-21	45 D	陶器	鉢	高9.7 口11.5 底11.2	縮木鉢か/削り出し高台/外面に風景文/口縁部内面及び外面に筋軸?/胎土の色調は淡灰褐色/遺存度は50%	瀬戸	近世(19c)
第54図22 図版24-4-22	45 D	陶器	土瓶?	高1.4 底7.2	底部破片/上底/外面底部を除き灰軸/外面底部に灰付着	瀬戸	近世(19c)
第54図23 図版24-4-23	45 D	陶器	德利	高2.1 底7.2	底部破片/内面底部に灰軸付着	瀬戸	近世(19c)
第54図24 図版24-4-24	45 D	陶器	灯明皿	高2.2 口10.4 底4.4	内面及び口縁部外面に鉄軸/胎土の色調は灰褐色/遺存度は30%		近世(19c)
第54図25 図版24-4-25	45 D	陶器	灯明具	高4.5 口7.3 底5.0	脚台高3.3cm/外面底部及び脚台内面を除き灰軸/油溝半月状/遺存度70%	瀬戸	近世(19c)
第54図26 図版24-4-26	45 D	陶器	灯明具	高6.2 口6.9 底6.6	脚台高4.0cm/胎土の色調は褐色/外面底部を除き着色・透明釉/油溝半月状/口縁部に灰付着/完形品	在地系	近世(19c)
第54図27 図版24-4-27	45 D	陶器	灯明具	高6.4 口7.0 底6.6	脚台高4.4cm/胎土の色調は褐色/外面底部を除き着色・透明釉/油溝半月状/口縁部に僅かに灰付着/ほぼ完形	在地系	近世(19c)
第54図28 図版25-1-28	45 D	土器	俵塩 壺?	高4.5 口7.1 底3.8	底部に穿孔/穿孔径0.8cm/口縁部は平坦/色調は淡茶褐色/胎土に褐色粒子・砂粒を含む/底部に回転系切り痕あり	在地系	近世(19c)
第54図29 図版25-1-29	45 D	土器	火鉢	高9.2 口18.6 底12.7	口縁部は内屈し口唇部は平坦/底部にボタン状の足2箇所あり/足は径2.4cm・2.0cm、高さ0.4cm/胎土の色調は淡褐色/胎土には砂粒を含む	在地系	近世(19c)
第54図30 図版25-1-30	45 D	陶器	鉢	高6.8	口縁部～体部破片/口唇部肥厚/内外面に灰軸	瀬戸	近世(19c)
第54図31 図版25-1-31	45 D	陶器	摺鉢	高5.7	口縁部～体部破片/褐色口縁/内面口縁部に沈線/内面にハケ目/色調は明茶褐色		近世(19c)

第21表 土坑・井戸跡出土の陶磁器・土器一覧(2)

神岡番号 図版番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)	製作の特徴等	推定産地	時期
第54図32 図版25-1-32	45 D	陶器	播鉢	高 15.0	体部破片／内外面灰釉／刷毛目9本＝単位／色調は明茶褐色		近世(19c)
第54図33 図版25-1-33	45 D	土器	焙烙	高 4.3	口縁部～底部の破片／口縁部は丸み／内外面ナデ	在地系	近世(19c)
第55図1 図版25-2-1	47 D	磁器	碗	高 13.7 口 9.5	口縁部～体部下半の破片／内面：口縁部に二重圈線、見込みに圈線	肥前系	近世(19c)
第55図2 図版25-2-2	47 D	磁器	碗	高 13.9 口 5.4	体部～底部の破片／高台／内面：二重圈線、見込みあり、高台に圈線	肥前系	近世(19c)
第55図3 図版25-2-3	47 D	磁器	筒碗	高 11.9 底 3.5	底部破片／高台／内面：圈線、見込みあり、外面：松葉文、高台に二重圈線	肥前系	近世(19c)
図版25-2-4	47 D	磁器	筒碗	—	体部破片／内面に圈線花文	肥前系	近世(19c)
図版25-2-5	47 D	磁器	碗	—	体部破片／外面：草花文	肥前系	近世(19c)
第55図6 図版25-2-6	47 D	陶器	灯明具	高 2.2 口 10.4 底 4.8	平底／内面及び外面口縁部に鉄軸／胎土の色調は淡黄褐色／底部に蛇の目刻ぎ／遺存度は30%	瀬戸	近世(19c)
図版25-2-7	47 D	陶器	徳利	—	体部破片／外面に灰釉／胎土の色調は灰褐色	瀬戸	近世(19c)
第55図8 図版25-2-8	47 D	土器	焙烙	高 5.2	口縁部～底部破片／口縁部平坦／外面体部下手に指頭による成形が僅かに残る／鉄着のためか全面が明褐色を呈する	在地系	近世(19c)
第55図9 図版25-2-9	47 D	土器	火鉢	高 13.8 底 112.0	体部～底部の破片／底部にボタン状の足1箇所あり／足は径2.4cm・高さ0.6cm／鉄着のためか全面が明褐色を呈する	在地系	近世(19c)
第56図1 図版26-1-1	48 D	陶器	蓋	高 1.7 口 6.6 底 2.5	蓋：高さ1.0cm・径1.2cm／外面：草花文／内面無釉／胎土の色調は明黄褐色／遺存度80%	瀬戸	近世(19c)
第56図2 図版26-2-2	48 D	土器	焙烙	高 2.6	口縁部～底部の破片／色調は淡黄褐色／胎土に角閃石・石英・砂粒を含む／内外面回転ナデ	在地系	近世(19c)
第57図1 図版26-1-1	49 D	磁器	碗	高 14.1 口 7.0	口縁部～体部の破片／内面：口縁部に雷文、外面：鳥文	瀬戸	近世(19c)
図版26-1-2	49 D	磁器	蓋か	高 11.8	天井部破片？／外面：赤絵、二重圈線	肥前系	近世(19c)
図版26-1-3	49 D	陶器	徳利	—	体部小破片／外面：灰釉／胎土の色調は灰色	瀬戸	近世(19c)
図版26-1-4	49 D	陶器	—	—	体部小破片／内外面鉄軸	不明	近世(19c)
第57図5 図版26-1-5	49 D	土器	火鉢	高 13.0 口 18.0	口縁部～体部の破片／口縁部は内屈し平坦／色調は暗褐色／内面口縁部が燻けている	在地系	近世(19c)
第58図1 図版26-3-1	50 D	土器	焙烙	高 3.9	口縁部は丸い／内耳あり／胎土の色調は淡黄褐色を基調／外面のみ黒く燻けている／遺存度10%未満	在地系	近世(19c)
第59図1 図版26-4-1	51 D	陶器	播鉢	—	口縁部小破片／口縁部内面に二重口縁／内外面鉄軸／胎土の色調は黄褐色	瀬戸	近世(19c)
第60図1 図版26-5-1	52 D	陶器	小碗か 猪口	高 13.0 口 5.8	口縁部～体部下破片／外面底部を除き灰釉／胎土の色調は淡黄褐色	瀬戸	近世(19c)
第61図1 図版26-6-1	55 D	磁器	猪口か	高 2.4 口 7.0 底 2.8	内面：口縁部に圈線花文、見込みあり、外面：唐草文／遺存度70%	肥前系	近世(19c)
第61図2 図版26-6-2	55 D	磁器	碗	高 4.2 口 7.8 底 13.4	内面：口縁部二重圈線、見込みあり／遺存度40%	瀬戸	近世(19c)
第61図3 図版26-6-3	55 D	磁器	碗	高 4.4 口 9.0 底 3.0	赤絵／内面：口縁部圈線、見込みあり、松葉文か、外面：草花文／遺存度50%	肥前系	近世(19c)
第61図4 図版26-6-4	55 D	磁器	筒碗	高 5.7 口 7.8 底 4.2	内面：口縁部二重圈線、見込みあり／遺存度50%	瀬戸	近世(19c)
第61図5 図版26-6-5	55 D	陶器	蓋	高 2.7 口 6.0 底 8.0	鋳あり、縁に切み／径1.1cm・高さ0.7cm／外面鉄軸／胎土の色調は淡黄褐色／完形品	瀬戸	近世(19c)
第61図6 図版26-6-6	55 D	陶器	蓋	高 1.2 口 7.0 底 9.2	天井部径5.8cm／無釉／外面灰釉／遺存度50%	瀬戸	近世(19c)
第61図7 図版26-6-7	55 D	陶器	皿	高 13.2	馬目皿／口縁部破片／胎土の色調は淡黄褐色	瀬戸	近世(19c)

第21表 土坑・井戸跡出土の陶磁器・土器一覧(3)

神岡番号 図版番号	遺構名	種別	器種	法量 (㎝)	製作の特徴等	推定産地	時期
第61図8 図版26-6-8	55 D	陶器	片口	高 8.9 口 17.4 底 8.5	削り出し高台/外面底部を除き灰釉/胎土の色調は淡黄褐色/内面見込みに胎土目3箇所あり/遺存度60%	瀬戸	近世(19c)
第61図9 図版27-1-9	55 D	陶器	水注?	高 14.0 底 8.0	体部下平~底部破片/外面灰釉/色調は灰白色	瀬戸	近世(19c)
第61図10 図版27-1-10	55 D	陶器	皿	高 12.0 底 6.6	体部下平~底部破片/削り出し高台/内面灰釉/胎土の色調は淡黄褐色/内面見込みに胎土目3箇所あり	瀬戸	近世(19c)
図版27-1-11	55 D	陶器	楕鉢	—	体部破片/内面にハケ目あり/削り出し高台/内外面鉄釉/胎土の色調は明茶褐色		近世(19c)
図版27-1-12	55 D	土器	火鉢	—	外面:格子目甲き目/?胎土の色調は淡茶褐色/内外面に保付着	在地系	近世(19c)
第62図1 図版27-2-1	57 D	磁器	碗	高 4.7 口 6.5 底 3.2	端反形/高台/外面:風景文、底部に二重磨線/遺存度80%	瀬戸	近世(19c)
第62図2 図版27-2-2	57 D	磁器	碗	高 4.6 口 6.6 底 2.9	端反形/高台/外面:風景文、底部に二重磨線/遺存度70%	肥前系	近世(19c)
第62図3 図版27-2-3	57 D	磁器	碗	高 4.5 口 8.4 底 3.4	腰反形/高台/内面:磨線、見込みあり/外面:風景文「鬼と植物」/遺存度30%	肥前系	近世(19c)
第62図4 図版27-2-4	57 D	磁器	碗	高 5.3 口 10.6 底 3.8	腰反形/高台/内面:口縁部に磨線花文、見込み「満福」/外面:風景文「松葉とトンボ」/?/遺存度40%	肥前系	近世(19c)
第62図5 図版27-2-5	57 D	磁器	碗	高 5.1 口 10.0 底 3.8	丸形/高台/内面:磨線、見込み「水草」/?/外面:風景文「蟹と水草」/?/被熱/遺存度30%	肥前系	近世(19c)
第62図6 図版27-2-6	57 D	磁器	碗	高 6.1 口 10.8 底 4.0	端反形/高台/内面:口縁部に磨線花文、見込み「寿」/外面:風景文、底部に磨線/遺存度30%	肥前系	近世(19c)
第62図7 図版27-2-7	57 D	磁器	碗	高 5.7 口 11.0 底 4.2	丸形/高台/内面:磨線、見込み「草花文」/外面:草花文、交叉線/遺存度70%	肥前系	近世(19c)
第62図8 図版27-2-8	57 D	磁器	碗	高 4.7 口 11.4 底 3.8	平形/高台/内面:口縁部に磨線、見込みなし/遺存度60%	肥前系	近世(19c)
第62図9 図版27-2-9	57 D	磁器	碗	高 13.5	体部~底部破片/広東碗/高台/内面:口縁部に磨線、見込み「寿」/外面:風景文	肥前系	近世(19c)
第62図10 図版27-2-10	57 D	磁器	碗	高 12.7 底 3.0	体部~底部破片/高台/赤輪/内面:見込みあり/外面:風景文	肥前系	近世(19c)
第62図11 図版27-2-11	57 D	磁器	蓋	高 3.1 口 12.8	化学コバルト/外面:松文/遺存度80%	瀬戸	近世(19c)
第62図12 図版27-2-12	57 D	陶器	小碗	高 3.1 口 5.6 底 2.5	丸形/高台/外面底部を除き灰釉/胎土の色調は灰白色/遺存度40%	瀬戸	近世(19c)
第62図13 図版27-2-13	57 D	陶器	大皿	高 4.1 口 27.4	馬目皿/口縁部~体部破片/鉄絵/胎土の色調は淡黄褐色	瀬戸	近世(19c)
第62図14 図版27-2-14	57 D	陶器	水注?	高 16.7 口 6.6	体部~底部破片/把手あり/外面に鉄釉/胎土の色調は灰褐色	瀬戸	近世(19c)
第62図15 図版27-2-15	57 D	陶器	德利	高 21.5 口 3.4 底 7.5	口縁部肥厚/外面灰釉/鉄絵/胎土の色調は白色/遺存度80%	信楽系	近世(19c)
第63図16 図版28-16	57 D	陶器	楕鉢	高 12.2 口 21.0 底 15.0	複合口縁/複合部に2本沈線がまわる/内面に8~10本一単位のハケ目/胎土の色調は暗茶褐色/胎土に白色砂物・小石を含む/遺存度60%	備前系	近世(19c)
第63図17 図版27-2-17	57 D	陶器	楕鉢	高 13.8	複合口縁/複合部に2本沈線がまわる/内面にハケ目/胎土の色調は暗茶褐色/胎土に白色砂物・小石を含む/16と同一個体の可能性あり	備前系	近世(19c)
図版27-2-18	57 D	陶器	壺	—	胴部破片/胎土の色調は灰褐色	常滑	近世(19c)
第63図19 図版27-2-19	57 D	土器	火鉢	高 16.1	体部~底部破片/平底/表面は明茶褐色/胎土の色調は暗茶褐色/ロク口成形	在地系	近世(19c)
第63図20 図版28-20	57 D	土器	焙烙	高 4.4 口 37.5 底 35.0	口縁部は丸い/内耳2箇所あり/胎土の色調は淡黄褐色を基調/外面は黒く焼けている/輪積み状が残る/遺存度70%	在地系	近世(19c)
第63図21 図版28-21	57 D	土器	焙烙	高 4.0 口 35.4 底 34.8	口縁部は平坦/内耳2箇所あり/胎土の色調は淡茶褐色を基調/外面は黒く焼けている/遺存度20%以下	在地系	近世(19c)

第21表 土坑・井戸跡出土の陶磁器・土器一覧(4)

発掘番号 図版番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)	製作の特徴等	推定産地	時期
第63図22 図版27-2-22	57 D	土器	焙烙	高 4.3	破片/口縁部は平坦/内耳なし/胎土の色調は白色を基調/内外面は黒く焼けている	在地系	近世(19c)
第63図23 図版27-2-23	57 D	土器	焙烙	高 4.7 口 (11.4) 底 3.8	破片/口縁部は平坦/内耳なし/補修孔2つあり/胎土の色調は白色を基調/内外面は黒く焼けている	在地系	近世(19c)
第63図24 図版28-24	57 D	陶器	大甕	高 55.8 口 46.0 底 16.6	口縁部は肥厚/外面口縁部に文様あり/平底	常滑	近世(19c)
図版29-2-1	62 D	陶器	鉢	—	体部小破片/内外面に灰釉/胎土の色調は淡黄褐色	瀬戸	近世(19c)
図版29-2-2	62 D	土器	火鉢	—	体部小破片/外面に叩き目痕を僅かに残す/内外面黒色/胎土の色調は暗茶褐色を基調	在地系	近世(19c)
第64図1 図版29-3-1	66 D	磁器	鉢	高 4.4 口 (14.6) 底 8.8	口唇部は肥厚/内面：風景文「竹」、見込みあり/遺存度は50%	肥前系	近世(19c)
第64図2 図版29-3-2	66 D	陶器	皿	高 11.4 口 (5.6)	底部破片/削り出し高台/内面見込みに重ね焼き痕あり/内面に灰釉/胎土の色調は淡黄褐色を基調	瀬戸	近世(19c)
第64図3 図版29-3-3	66 D	土器	焙烙	高 15.0	破片/口縁部は丸い/内耳なし/補修孔2つあり/胎土の色調は淡茶褐色を基調/内外面は黒く焼けている	在地系	近世(19c)
図版29-4-1	72 D	陶器	碗	—	体部小破片/内外面に灰釉/胎土の色調は灰白色	瀬戸	近世(19c)
第65図1 図版29-5-1	73 D	磁器	碗	高 14.6 底 5.2	広東製/体部～底部破片/高台/内面：團扇、見込み文、外面：草花文、團扇	肥前系	近世(19c)
第65図2 図版29-5-2	73 D	土器	焙烙	高 5.3 口 (35.0) 底 (32.0)	口縁部はやや平坦/内耳なし/底部に補修孔2つあり/胎土の色調は淡茶褐色を基調/底部を除き黒く焼けている/遺存度20%以下	在地系	近世(19c)
第66図1 図版30-1-1	74 D	陶器	甕	高 [3.1]	口縁部小破片/複合口縁/外面に鉄釉/胎土の色調は灰褐色を基調	常滑	近世(19c)
図版30-2-1	75 D	磁器	碗	—	体部小破片/外面に草花文か	肥前系	近世(19c)
図版30-2-2	75 D	陶器	急須?	—	体部小破片/外面に風景文か	信楽系	近世(19c)
第67図1 図版30-3-1	1 W	陶器	擂鉢	高 14.8	口縁部～体部破片/複合口縁/内外面に鉄釉/胎土の色調：淡黄褐色	瀬戸	近世(19c)

第21表 土坑・井戸跡出土の陶磁器・土器一覧(5)

(2) 井戸跡

1号井戸跡

遺 構 (第67図)

[位 置] (A・B-3) グリッド。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：210×180cm。危険を伴うため、深さ380cmまでのみの精査で終了した。開口部はやや擂鉢状に大きく広がり、壁はほぼ垂直に立ち上がるが、深さ200cm程でやや広がっている。壁の途中に足掛け穴が確認できた。

[遺 物] 陶器1点が出土した。

[時 期] 近世(19世紀)。

遺 物 (第67図、図版30-3)

[陶 器] (第67図1、図版30-3-1、第21表)

1は陶器である。

(3) その他の遺構

その他の遺構として、遺構名は付けていないが、以下の①～③について、説明する(第29図)。

①溝跡

(C・D-4・5) グリッドの「く」の字状に屈曲する溝状遺構である。東西方向：長さ14.8m・上幅0.40～0.50m、下幅0.35～0.40m、深さ0.30～0.53m・走向角度N-68°-E。南北方向：長さ10.7m・上幅0.40～0.50m・下幅0.30～0.40m・深さ0.35～0.37m・走向角度N-24°-Wを基本とする。近世以降の区画溝の可能性がある。

②溝跡

(C・D-5・6) Gの3本併行する細長い溝跡が存在する。畑の畝と思われる。

北側の溝跡から順に1本目は、長さ12.1m・上幅0.20～0.30m・下幅0.15～0.20m・深さ0.15～0.33m・走向角度N-73°-Eである。2本目は、長さ13.8m・上幅0.15～0.30m・下幅0.10～0.25m・深さ0.18～0.30m・走向角度N-73°-Eである。3本目は、長さ12.4m・上幅0.20～0.30m・下幅0.15～0.20m・深さ0.20～0.28m・走向角度N-73°-Eを基本とする。

③溝状土坑

(C・D-5) Gの南北に延びる細長い土坑。長さ9.4m・上幅0.55～0.75m・下幅0.40～0.60m・深さ0.21～0.43m・走向角度N-6°-Wを基本とする。土坑の分類では、B群2類に該当する。

第4節 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時代の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外出土遺物としては、旧石器・縄文時代の石器、縄文時代の土器、縄文時代の土製品、弥生・古墳時代の土器、近世以降の遺物に分類する。

(1) 旧石器・縄文時代の石器 (第68・69図1～22、第22表)

1は旧石器時代のナイフ形石器である。

2～22は縄文時代の石器で、2～15は打製石斧、16は磨石である。17～21は石皿と思われる、22は微細剥離痕のある剥片である。

(2) 縄文時代の土器 (第69～71図23～85、第23表)

遺構外から出土した縄文土器は1,733点、38,068gであった。そのうち約1,500点が加曽利E式と思われる土器であった。ここでは63点を報告する。

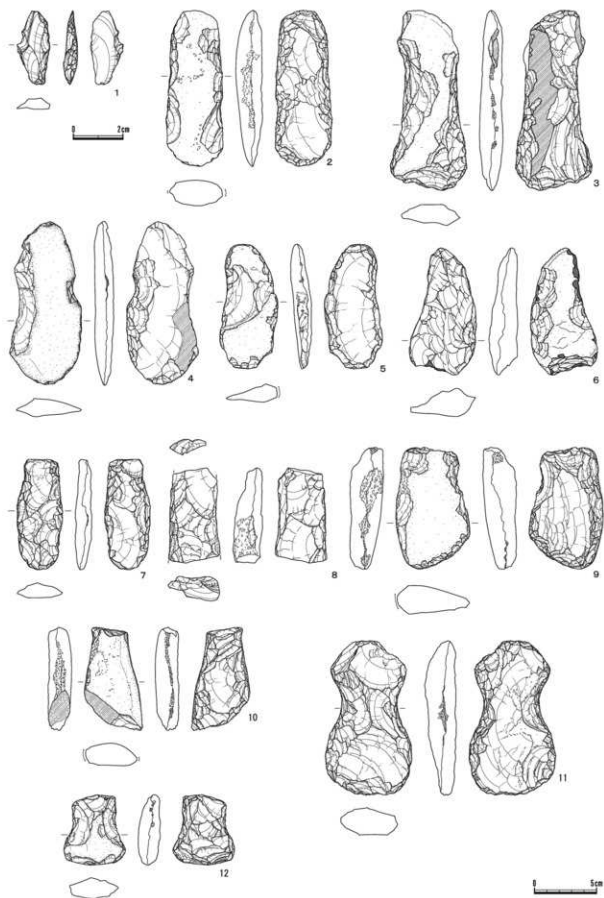
23は早期後葉条痕文系土器の破片。

24～37は前期の土器で、24～31は羽状縄文系の関山式、32～36は諸磯式、37は興津式である。

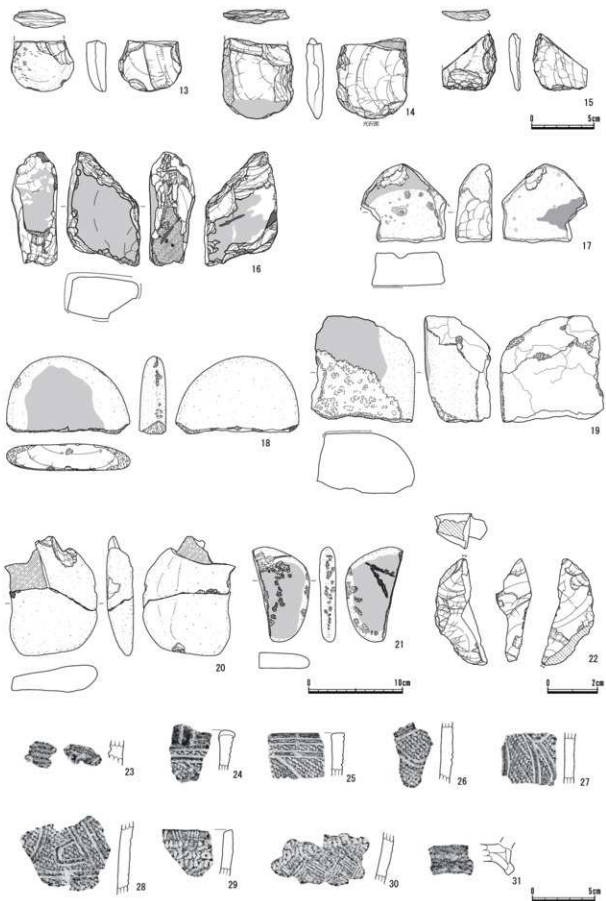
38～81は中期の土器。38～43は初頭の五領ヶ台式、44～56は中葉の勝坂式・阿玉台式である。

57～81は後葉の加曽利E式・曾利式で、57～64は地文燃糸文、65～77は地文縄文、78は条線文と縄文を併せ持つ土器、79～80は地文条線文の土器である。81は上げ底状の台付き土器の脚部片。

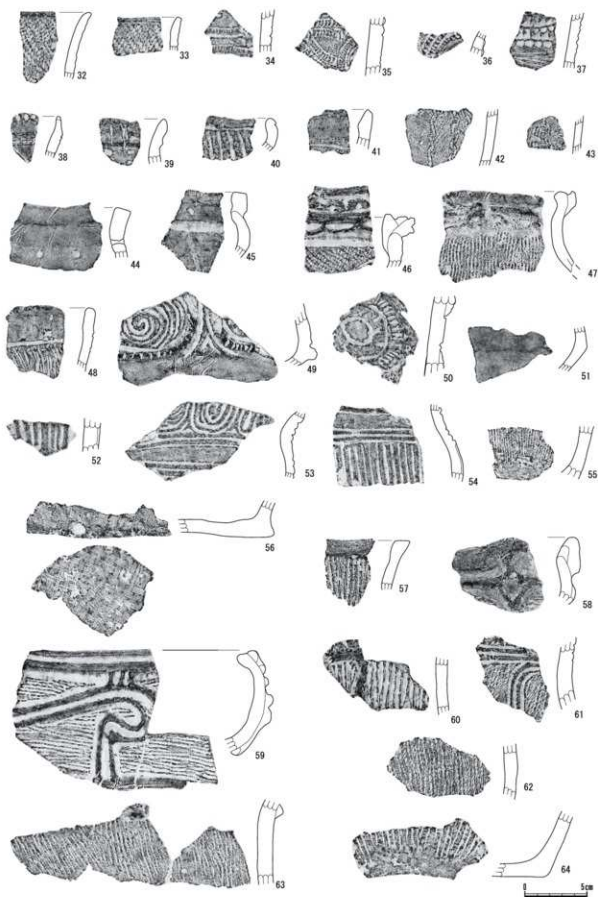
82～85は後期の土器で、いずれも前葉の称名寺式あるいは堀之内式ものと思われる。



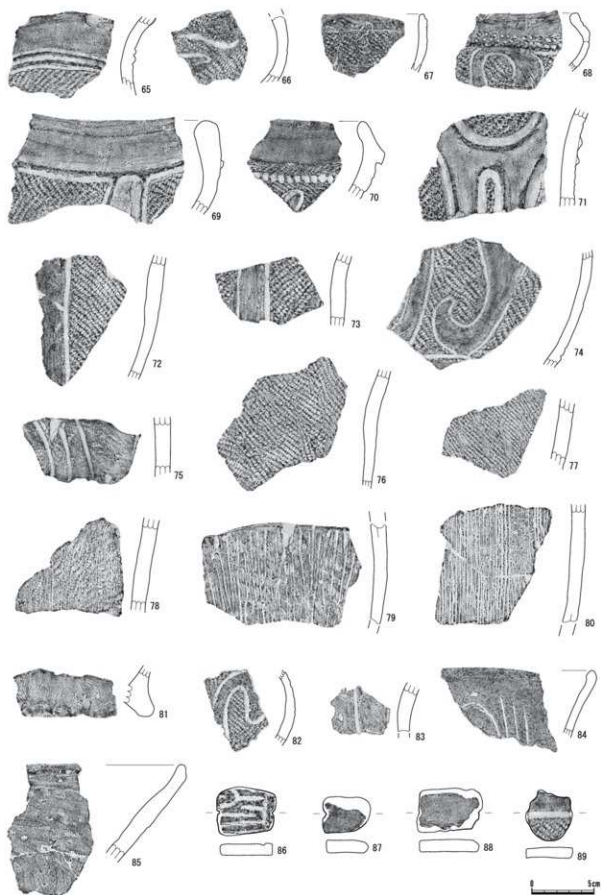
第68図 遺構外出土遺物1(2/3・1/3)



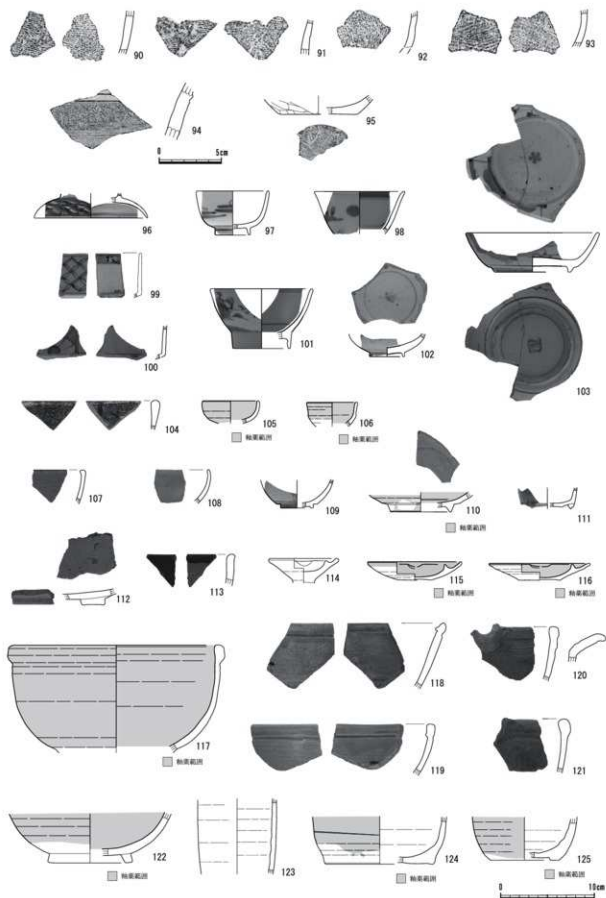
第69図 遺構外出土遺物 2 (1/3・1/4・2/3)



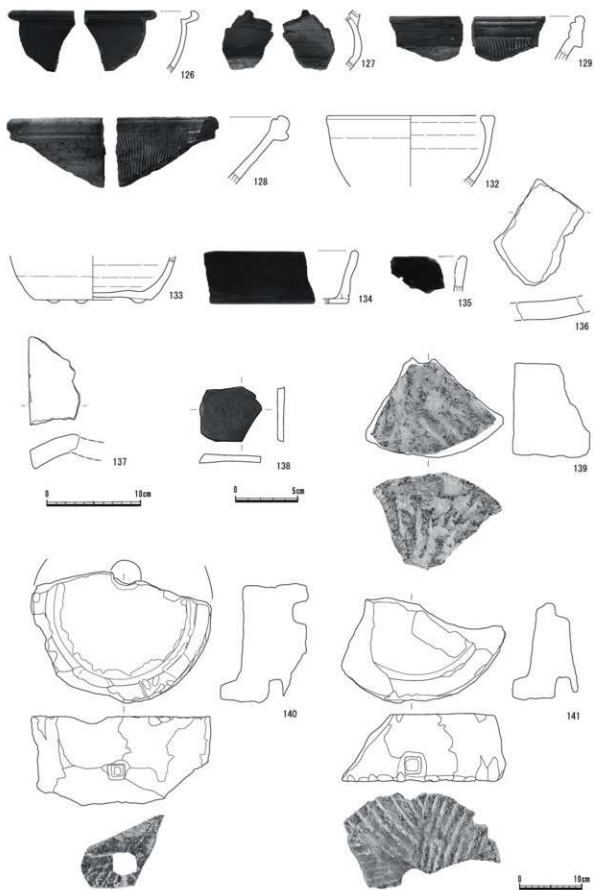
第70図 遺構外出土遺物3 (1/3)



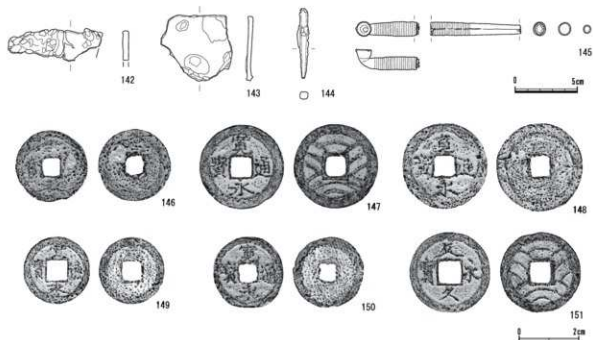
第71図 遺構外出土遺物4 (1/3)



第72図 遺構外出土遺物 5 (1/3・1/4)



第73図 遺構外出土遺物 6 (1/4・1/3・1/6)



第74図 遺構外出土遺物 7 (1/3・4/5)

(3) 縄文時代の土製品 (第71図86～89、第24表)

縄文時代の土製品は土器片鍾3点、土製円盤未製品が1点出土した。

86～88は土器片鍾で、89は土製円盤の未製品である。

(4) 弥生・古墳時代の土器 (第72図90～95、第25表)

90～93は弥生時代後期～古墳時代前期の甕形土器である。

94・95は古墳時代後期の土器と思われる。94は須恵器甕形土器、95は土師器甕形土器である。

(5) 近世以降の遺物 (第72～74図96～151、図版33～35-96～151、第26表)

[陶磁器・土器] (第72・73図96～135、図版33・34-96～135、第26表)

96～104は磁器、105～131は陶器、132～135は土器である。

[瓦] (第73図136・137、図版34-136・137)

136・137は椽瓦である。136は椽長9.5cm・椽幅11.3cm・厚さ20cm・重さ151g。(C-3)グリッド出土。137は椽長5.2cm・椽幅9.3cm・厚さ1.9cm。椽峠は山形。(B-3)グリッド出土。

[石製品] (第73図138～141、図版34・35-138～141)

138は砥石である。長さ4.3cm・幅4.9cm・厚さ0.7cm・重さ20.2g。片面に細線による「方形十対角線」を表したような絵が描かれている。石材は粘板岩。(C-3)グリッド出土。

139～141は石臼で、139は上臼である。推定径34.4cm・高さ11.9cm・重さ4.5kg。軸穴の推定径3.6cm。140は下臼。径28.5cm・高さ13.7cm・重さ9.0kg。軸受の径3.5cm・高さ2.5cm。挽き手穴は縦2.6cm・横2.4cm・奥行き2.7cm。141は下臼。推定径30.0cm・高さ10.8cm・重さ4.4kg。挽き手穴は縦2.8cm・横4.5cm・奥行き3.1cm。いずれも(B-4)グリッド出土。

[金属製品] (第74図142～145、図版34-142～145)。

142～144は鉄製品、145は銅製品である。

142は長さ7.4cm・最大幅2.3cm・最大厚0.4cm・重さ15.8g。火打金か。143は長さ5.7cm・最大幅5.3cm・最大厚0.4cm・重さ36.6g。鉄製容器の口縁部小破片か。144は釘である。長さ5.6cm・最大幅0.9cm・厚さ0.8cm・重さ4.3g。頭部は欠損している。

145は煙管の雁首・吸口である。雁首には羅字の一部の木質部が僅かに残っている。雁首：長さ4.8cm・小口径1.1cm・火口径1.2cm・重さ8.6g。筋彫りあり。吸口：長さ7.1cm・小口径1.0cm・口径0.6cm・重さ11.4g。筋彫りあり。(A-4)グリッド出土である。

[銭貨] (第74図146～151、図版34-146～151、第27表)

146～150は寛永通寶、151は文久永寶である。

図番	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置
第68図1	ナイフ形石器	黒曜石	29.1	13.11	5.4	1.7	横長割片を素材とする/両側縁加工/側縁加工により素材打面を除去/基部は平縁	7J
第68図2	打製石斧	砂岩	123.6	45.2	21.3	160.7	表面に原礫面を広く残す/両側縁並行/ともに顕著な敲打痕	遺構外(D-4G)
第68図3	打製石斧	砂岩	142.9	60.8	18.6	636.1	表面に原礫面/裏面に節理面を残置/側縁は敲打とこれに伴う剥離	遺構外
第68図4	打製石斧	砂岩	129.3	57.23	15.4	120.9	表面に原礫面を広く残す/扁平な大形の横長割片素材/側縁の敲打は少ない	遺構外(D-4G)
第68図5	打製石斧	砂岩	98.8	46.1	16.7	79.5	表面に原礫面を広く残す/横長割片素材/両側縁・両端にやや顕著な敲打痕	遺構外(C-3G)
第68図6	打製石斧	ホルンフェルス	100.8	53.36	22.8	117.1	表面に原礫面を広く残す/横長割片素材/側縁は主に剥離痕が認められる	1W
第68図7	打製石斧	ホルンフェルス	87.6	36.33	13.2	51.5	小形/両側縁並行/弧状の刃部	45D
第68図8	打製石斧	ホルンフェルス	75.4	40.81	23.5	93.7	基部、刃部を欠損。両側縁は顕著な敲打痕。	41D
第68図9	打製石斧	緑色片岩	96.6	58.78	26.7	214.4	基部欠損/表面に原礫面を広く残す/両側縁・両端に敲打とこれに伴う剥離が認められる	遺構外
第68図10	打製石斧	砂岩	81.7	46.3	18.7	88.7	基部と刃部を欠損/表面に原礫面を広く残す/両側縁は顕著な敲打痕	遺構外(D-2G)
第68図11	打製石斧	凝灰岩	122.4	68.92	25.1	215.0	横長割片素材/中央に両側縁からの敲打/右上・左下を敲打に伴う剥離	75D
第68図12	打製石斧	砂岩	55.7	48.9	17.6	53.4	表面に原礫面を残す/両側縁・両端に敲打痕を伴う剥離	45D
第69図13	打製石斧	凝灰岩	40.5	49.69	15.5	29.6	刃部破片/表面に原礫面を広く残す/裏面に線状の傷が認められる	遺構外(C-6G)
第69図14	打製石斧	チャート	64.1	56.78	13.9	67.8	刃部破片/弧状の刃部/刃部・側縁に顕著な磨耗痕	遺構外(B-4G)
第69図15	打製石斧	ホルンフェルス	45.4	43.08	9.0	15.6	断片/表面に原礫面を残す	73D
第69図16	磨石	片岩	120.9	77.6	48.4	636.1	左側面の分割面に砥面が認められる/右側面の分割面に敲打痕が認められる/石皿の転用か	遺構外
第69図17	石皿	花崗岩	83.6	90.13	38.4	429.1	扁平礫素材/一部に磨面/表面に凹みが認められる	遺構外(C-3G)
第69図18	石皿	花崗岩	81.9	130.27	28.3	484.8	扁平礫素材/平坦面に磨面/破損面の縁に敲打痕が認められる	遺構外(D-5G)
第69図19	石皿	花崗岩	112.6	109.4	70.2	1217.3	円礫素材/破損後に面的敲打	78D
第69図20	石皿	ホルンフェルス	126.2	97.7	28.4	380.3	扁平礫素材/破損後に破損面の縁に対する敲打痕	75D
第69図21	石皿	砂岩	100.4	60.67	17.6	144.1	扁平礫素材/平坦面に磨面/側縁・破損面の縁などに敲打痕	75D
第69図22	微細な磨痕のある割片	チャート	20.8	42.19	14.0	7.3	打点方向・末端方向に磨滅痕/衝撃剥離が認められる	遺構外(B-4G)

(単位: mm, g)

第22表 遺構外出土の旧石器・縄文時代石器一覧

探検番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物					出土位置	備考	
					石	角	礫	砂	他			
第69図23	胴	貝殻条痕文	にぶい黄橙 10YR7/3	条痕文系				○	壤	74D	内面は灰褐色	
第69図24	口縁	口唇部上面に小突起配付/異節斜縄文/半截竹管状工具内面による沈線	にぶい褐 7.5YR5/3	閑山				○	壤	(D-4)G	内面はにぶい・褐色	
第69図25	口縁	異節斜縄文/半截竹管状工具内面による沈線	橙 7.5YR6/6	閑山				○	壤	(B-4)G	内面はにぶい・褐色	
第69図26	胴	異節斜縄文/半截竹管状工具内面による沈線	にぶい赤褐 5YR5/4	閑山				○	壤	(C-2)G	内面はにぶい・褐色	
第69図27	胴	異節斜縄文/半截竹管状工具内面による沈線	にぶい黄橙 10YR6/4	閑山				○	壤	(D-4)G	内面はにぶい・褐色	
第69図28	胴	異節斜縄文/半截竹管状工具内面による沈線	にぶい赤褐 10YR5/4	閑山				○	壤	(B-2・3)G	内面はにぶい・褐色	
第69図29	口縁	ループ文/口唇部外面に3・4本の沈線	橙 5YR6/6	閑山				○	壤	(C-3)G		
第69図30	胴	ループ文/条線による割衝状文	にぶい・橙 7.5YR7/4	閑山				○	壤	(B-3・C-4)G		
第69図31	底	脚台付き	橙 5YR6/8	閑山				○	壤	(D-5)G	内面はにぶい・褐色	
第70図32	口縁	縄文RL	にぶい赤褐 2.5YR4/4	諸磯?				○	雲・片	(B-3)G	磁石に付く	
第70図33	口縁	縄文RL	赤 10YR5/6	諸磯?				○	雲	42D	内面はにぶい赤褐色/磁石に付く	
第70図34	胴	結節沈線による木の葉文?	灰黄褐 10YR6/2	諸磯a				○		(D-4)G	内面はにぶい・黄褐色	
第70図35	胴	結節沈線による木の葉状人組文	にぶい・橙 7.5YR7/4	諸磯a				○		(B-4)G	砂粒は粗い	
第70図36	胴	結節浮線文による同心円文?	にぶい黄橙 10YR7/4	諸磯c	○	○		○		(C-6)G		
第70図37	胴	平行沈線/ロッキングによる変形爪形文	黒褐 10YR3/1	岡津	○	○		○		7J	内面はにぶい・褐色	
第70図38	口縁	口唇部内屈/口唇部に斜み/半截竹管による平行沈線および結節沈線	灰黄褐 10YR6/2	五領ヶ台				○		(D-4)G		
第70図39	口縁	口縁部外反/口唇部外面肥厚/肥厚部と縦位の細線/肥厚部直下に長方形の刺突文	にぶい・橙 7.5YR7/4	五領ヶ台				○		(C-3)G		
第70図40	口縁	口縁部内湾/簡隔の広い集合沈線文	橙 7.5YR7/6	五領ヶ台				○		51D		
第70図41	口縁	口唇部内面肥厚/沈線	暗赤褐 5YR3/4	五領ヶ台				○	○	金	(B-3)G	小礫は円滑度の低い破砕礫
第70図42	胴	縄文RL/縦位の結節文	明赤褐 2.5YR5/6	五領ヶ台				○	○		(C-6)G	小礫は円滑度の低い破砕礫
第70図43	胴	縄文LR/縦位の結節文	明赤褐 5YR5/6	五領ヶ台				○	○		(F-3)G	
第70図44	口縁	口縁部に僅かな段を付け肥厚/有孔/外面赤彩・黒彩	黒褐色 5YR2/1	勝坂				○			(D-5)G	磁石に付く
第70図45	口縁	口縁部内湾/口唇部直立・肥厚/無文	にぶい・橙 5YR6/4	勝坂				○			(D-4)G	浅鉢か?
第70図46	口縁	口唇部外面に連続状隆帯/口唇部上面に交互刺突/縄文RL	にぶい・赤褐 5YR5/4	勝坂	○	○		○			(C-5)G	磁石に付く
第70図47	口縁	口縁部外反/口唇部内面肥厚/平縁/都赤文L/口唇部外面に隆帯刺突痕	にぶい赤褐 5YR5/4	中野中～後葉				○			(B-4)G	
第70図48	胴	条線文/口縁部は無文	黒褐 7.5YR3/1	勝坂?				○			41D	内面は黒色 小型円筒形か?
第70図49	胴	斜みを持つ隆帯による楕円区画文/区画内は沈線による渦巻文	にぶい赤褐 2.5YR4/3	勝坂				○	○		(C-3)G	浅鉢
第70図50	胴	斜みを持つ隆帯による区画文/区画内は沈線文	にぶい赤褐 2.5YR5/4	勝坂				○	○		(D-6)G	内面は暗赤褐色

※ 石：石長 角：角閃石・輝石 礫：粗礫 砂：砂粒 壤：細礫 雲：雲母 片：結節片岩 金：金雲母 褐：褐色胎土

第23表 遺構外出土の縄文土器一覽(1)

神田番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物				出土位置	備 考
					石	角	礫	砂		
第70図51	胴	内紐／無文	灰褐 7.5YR4/2	磨板		○	○		(D-5)G	浅鉢
第70図52	胴	半截竹管による条線文	にぶい橙 5YR6/4	磨板	○		○		(B-4)G	内面は黒褐色。鉄分?が沈着
第70図53	胴	胴括れ部分に半截竹管による無文帯区画／縞文	にぶい赤褐 5YR5/4	磨板		○	○		(C-3)G	部分的に磁石に付く
第70図54	胴	胴括れ部分に半截竹管による無文帯区画／半截竹管による条線文	にぶい褐 7.5YR5/3	磨板	○	○	○		(C-3)G	部分的に磁石に付く
第70図55	胴-底	縄文L	橙 2.5YR6/6	磨板			○		(C-4)G	内面は黒色
第70図56	底	底面に銅代痕	橙 5YR6/6	阿玉台		○	○		(C-5)G	
第70図57	口縁	口縁部外反／口唇部内面肥厚／平縁／縄文R	にぶい赤褐 5YR5/3	中期中～後葉					(C-4)G	
第70図58	口縁	小波状口縁／縄文R?／隆帯による口縁部文様帯区画／円形の押捺文	にぶい赤褐 2.5YR5/4	加曾利EⅠ～Ⅱ			○	○	41D	
第70図59	口縁	縄文L／S字状隆帯	にぶい赤褐 5YR5/3	加曾利EⅠ	○	○	○		(C・D-4)G	
第70図60	胴	縄文L／隆帯による区画・蛇行懸垂文	橙 5YR6/6	加曾利EⅠ			○		(B-4)G	内面は灰褐色
第70図61	胴	縄文L／隆帯による区画文?	明赤褐 2.5YR5/6	加曾利EⅠ			○		(C-4)G	内面は明赤褐色／小礫は円滑度の低い破砕礫／磁石に付く
第70図62	胴	縄文L／外面に炭化物付着	褐 7.5YR4/4	加曾利EⅠ～Ⅱ			○		71D	磁石に付く
第70図63	胴	縄文R／隆帯	にぶい赤褐 2.5YR4/4	加曾利EⅠ			○		(C-4・D-2)G	磁石に付く
第70図64	胴-底	縄文R	にぶい赤褐 2.5YR5/4	加曾利EⅠ		○	○		(C-4)G	内面黒色
第71図65	胴-胴	縄文LR／隆帯による頸部無文帯区画	にぶい橙 5YR6/4	加曾利EⅠ～Ⅱ			○		(C-4)G	
第71図66	胴	縄文LR／沈線による曲線文	にぶい赤褐 5YR4/3	加曾利EⅣ	○	○	○		41D	磁石に付く
第71図67	口縁	縄文LR／縞線による曲線文と口唇部区画	にぶい黄橙 10YR5/3	加曾利EⅤ			○		(C-6)G	内面はにぶい橙
第71図68	口縁	波状口縁／微隆起による口縁部区画内に2列の刺突文／縄文LR／沈線間着消しによる曲線文	にぶい黄橙 10YR6/4	加曾利EⅤ			○		(C-6)G	内面は黒褐色
第71図69	口縁	波状口縁／縄文LR／微隆起と着消しによる口縁部無文帯区画および懸垂文	橙 5YR6/6	加曾利EⅤ	○	○	○		(C-5)G	内面は浅黄褐色
第71図70	口縁	微隆起による口縁部無文帯区画／縄文LR／微隆起下に1列の刺突文／沈線による曲線文	にぶい橙 5YR6/4	加曾利EⅤ			○		(B-3)G	
第71図71	胴	縄文LR／微隆起・着消しによるU字区画文	明赤褐 2.5YR5/6	加曾利EⅤ		○	○		(C-5)G	
第71図72	胴	縄文LR／着消懸垂文	褐灰 10YR4/1	加曾利EⅥ～Ⅳ			○	○	(C-3)G	
第71図73	胴	縄文LR／着消懸垂文	橙 5YR7/6	加曾利EⅢ			○		(B-4)G	
第71図74	口縁～胴	口縁部肥厚／縄文LR／沈線と着消しによる逆J字文／沈線による口縁部無文帯区画／口唇部欠損	にぶい赤褐 5YR5/3	加曾利EⅣ	○		○		(D-6)G	内面は黒色
第71図75	胴	縄文LR／沈線区画によるJ字文?	灰白 10YR8/2	加曾利EⅣ			○		41D	
第71図76	胴	縄文LR	にぶい黄橙 10YR7/3	加曾利EⅣ			○	○	(C-6)G	内面は褐灰色
第71図77	胴	縄文LR	褐灰 10YR4/1	加曾利EⅤ			○	○	(C-3)G	

※ 石：石長 角：角閃石・輝石 礫：縞礫 砂：砂粒 磁：磁礫 雲：雲母 片：結晶片 金：金雲母 褐：褐色粘土

第23表 遺構外出土の縄文土器一覽(2)

探検番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物					出土位置	備 考
					石	角	礫	砂	他		
第71図78	胴	縄文RLの上から半截竹管による条線文	浅黄褐色 7.5YR8/4	加曾利E				○		(C-4)G	内面は褐色
第71図79	胴	半截竹管による条線文	にぶい褐色 7.5YR7/4	曾利?				○	○	(C-3)G	
第71図80	胴	条線文	にぶい褐色 5YR7/4	加曾利E				○	○	(C-3)G	部分的に磁石に付く
第71図81	底	台付き土器	明赤褐色 2.5YR5/6	加曾利E					○	(C-3)G	
第71図82	胴	縄文LR/沈線磨消しによるS字状文?	にぶい褐色 5YR6/4	称名寺I				○	○	(D-4)G	内面は黒色
第71図83	胴	沈線区画内に列点文	にぶい赤褐色 5YR5/4	称名寺II				○	○	66D	
第71図84	口縁	口唇部内面肥厚/沈線による懸垂文	にぶい赤褐色 5YR5/4	堀之内I				○	○	43D	
第71図85	口縁	無文/口唇部内面	黒褐色 5YR3/1	後期粗製					○	70D	内面は明赤褐色

※ 石：石英 角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 礫：細礫 雲：雲母 片：結晶内片 金：金雲母 褐：褐色粒子

第23表 遺構外出土の縄文土器一覧(3)

探検番号	種別	長さ/幅/厚さ (mm)	重さ (g)	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物	出土位置
第71図86	土器片蓋	37.5/47.2/9.5	24.4	沈線文	褐色 5YR4/1	勝坂	角・礫・砂	(C-3)G
第71図87	土器片蓋	28.0/38.0/10.5	14.4	無文	にぶい褐色 7.5YR6/3	勝坂?	砂	(B-1)G
第71図88	土器片蓋	34.2/52.5/9.2	23.2	無文	にぶい褐色 7.5YR7/4	加曾利EⅠ～Ⅱ	砂	(D-4)G
第71図89	土製円盤 未製品	41.0/36.2/8.0	13.2	縄文RL/磨消懸垂文 /内面黒色	にぶい褐色 7.5YR6/3	加曾利EⅡ	角・砂	(B-3)G

※ 角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 褐：褐色粒子

第24表 遺構外出土の縄文時代土製品一覧

図版番号	器種	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土	成形及び調整	遺存度	出土位置	時 期
第72図90	甕	—	ハケ甕	暗黄褐色	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	内外面：ハケ目調整	胴部小破片	遺構外(B-4)G	弥生後期～古墳前期
第72図91	甕	—	ハケ甕か/甕の可能性あり	暗黄褐色を基調	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整/外面：ハケ目調整	胴部小破片	42D	弥生後期～古墳前期
第72図92	甕	—	ハケ甕	暗茶褐色	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：ヘラナデ/外面：ハケ目調整	胴部下半小破片	遺構外(B-4)G	弥生後期～古墳前期
第72図93	甕	—	ハケ甕	暗赤褐色	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整/外面：ハケ目調整	胴部小破片	遺構外(B-4)G	弥生後期～古墳前期
第72図94	須恵器甕	—	横位沈線文の直下に11本一単位の櫛描波状文が施される	灰色	白色砂粒を含む	内外面：回転ナデ	胴部破片	遺構外(B-5)G	古墳後期
第72図95	土師器甕	高 [2.0] 底 (8.0)	平底/底部に本葉痕あり/在地系土師器	暗褐色	砂物をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラ削り	底部30%	67D	古墳後期(7c)

第25表 遺構外出土の弥生・古墳時代の土器一覧

標記番号 図版番号	種別	器種	法量	製作の特徴等	推定産地	出土位置	時期
第72図96 図版33-96	磁器	蓋	高12.6 口(12.0)	内面：墨線/外面：松葉文?/遺存度10%	肥前系	遺構外 (A-1)G	近世(19c)
第72図97 図版33-97	磁器	碗	高4.7 口(7.6) 底(3.7)	高台/外面：風景文、墨線/遺存度20%	肥前系	遺構外 (B-3)G	近世(19c)
第72図98 図版33-98	磁器	碗	高14.5 口(9.6)	楕反形/口縁部～体部下半破片/内面：墨線/外面：風景文	肥前系	遺構外 (C-4)G	近世(19c)
第72図99 図版33-99	磁器	碗	高14.7	小碗/半筒形/口縁部～体部下半破片/内面：口縁部に四方篆文/外面：七宝繫ぎ文	肥前系	遺構外	近世(19c)
第72図100 図版33-100	磁器	碗	高(3.5)	小碗/半筒形/体部小破片/内面：菊花文/外面：墨線	肥前系	遺構外 (B-2)G	近世(19c)
第72図101 図版33-101	磁器	碗	高6.4 口(10.9) 底(6.2)	広東碗/内面：墨線/外面：草花文/遺存度10%	肥前系	遺構外 (B-2)G	近世(19c)
第72図102 図版33-102	磁器	碗	高12.5 底3.6	丸形/体部～底部破片/内面：見込み、虫文?、墨線/外面：文様あり、墨線	肥前系	遺構外 (B-2)G	近世(19c)
第72図103 図版33-103	磁器	碗	高4.2 口(14.2) 底8.0	腰型形/内面：風景文、見込みに五弁花/外面：松竹梅文?、見込みに角形/遺存度60%	肥前系	遺構外 (A-1)G (C-3)G	近世(19c)
第72図104 図版33-104	磁器	鉢	高13.3	口縁部小破片/プリント/文様：菊花文?	瀬戸	遺構外	近世(19c)
第72図105 図版33-105	陶器	小坏	高12.4 口(6.0)	丸形/口縁部～体部下半破片/内外面に灰釉/胎土の色調は淡黄褐色	瀬戸	遺構外 (B-3)G	近世(19c)
第72図106 図版33-106	陶器	小坏	高12.6 口(5.4)	腰折形/口縁部～体部下半破片/内面及び外面口縁部～体部に灰釉/胎土の色調は淡黄褐色	瀬戸	遺構外	近世(19c)
第72図107 図版33-107	陶器	鉢	高13.6	口縁部～体部破片/口唇部に鉄釉の口紅?/内外面に灰釉/胎土の色調は淡黄褐色	瀬戸	遺構外 (B-4)G	近世(19c)
第72図108 図版33-108	陶器	小碗	高13.6	口縁部～体部破片/内外面に灰釉/胎土の色調は灰白色を基調	瀬戸	遺構外 (D-5)G	近世(19c)
第72図109 図版33-109	陶器	碗	高13.0 底(3.6)	丸形/体部～底部破片/外面底部を除き灰釉/胎土の色調は灰白色	瀬戸	遺構外 (B-2)G	近世(19c)
第72図110 図版33-110	陶器	鉢	高12.1 底(6.4)	体部～底部破片/外面底部を除き灰釉/内面見込みに重ね焼き痕/胎土の色調は灰白色	瀬戸	遺構外 (B-3)G	近世(19c)
第72図111 図版33-111	陶器	香炉	高12.3	体部～底部破片/足付(三足)1箇所/外面体部に灰釉/胎土の色調は灰赤/胎土に白色砂粒・小石を含む	瀬戸	遺構外 (B-2)G	近世(19c)
第72図112 図版33-112	陶器	皿?	高11.7	体部～底部破片/貼付高台/外面底部を除き灰釉/内面見込みに胎土目あり/胎土の色調は淡黄褐色	瀬戸	遺構外 (B-2)G	近世(19c)
第72図113 図版33-113	陶器	鉢	高13.4	口縁部小破片/口縁部内面及び外面に鉄釉/胎土の色調は灰白色/胎土に砂粒を僅かに含む	瀬戸	遺構外 (C-5)G	近世(19c)
第72図114 図版33-114	陶器	灯明具	高12.6 口7.4	台付/脚部欠損/油溝半月状/全面透明釉/胎土の色調は明茶褐色/遺存度は受皿部80%	在地系	遺構外 (B-2)G	近世(19c)
第72図115 図版33-115	陶器	灯明皿	高2.0 口(10.0) 底(3.3)	縁部底/油溝半月状/内面及び口縁部外面に灰釉/胎土の色調は灰褐色を基調/遺存度は30%	在地系	遺構外 (B-3)G	近世(19c)
第72図116 図版33-116	陶器	灯明皿	高1.8 口(10.7) 底4.4	縁部底/油溝半月状/内面及び口縁部外面に灰釉/胎土の色調は淡黄褐色/遺存度は30%	在地系	遺構外 (B-2)G	近世(19c)
第72図117 図版33-117	陶器	鉢	高11.4 口(23.0)	口唇部肥厚/外面体部下半を除き灰釉/胎土の色調は淡黄褐色/遺存度20%	瀬戸	遺構外 (B-4)G	近世(19c)
第72図118 図版33-118	陶器	鉢	高17.1	口縁部～体部破片/外面口縁部直下に沈線/内外面に灰釉/胎土の色調は淡黄褐色	瀬戸	遺構外 (C-4)G	近世(19c)
第72図119 図版33-119	陶器	鉢	高15.4	口縁部～体部破片/外面口縁部直下に沈線/内外面に灰釉/胎土の色調は白色	瀬戸	遺構外 (B-3)G	近世(19c)
第72図120 図版33-120	陶器	片口	高(5.8)	口縁部～体部破片/注口部：長さ3.7cm/内外面に灰釉/胎土の色調は淡黄褐色	瀬戸	遺構外 (C-3)G	近世(19c)
第72図121 図版33-121	陶器	片口	高(5.6)	口縁部～体部破片/注口部が僅かに残る/口縁部は肥厚/内外面に灰釉/胎土の色調は淡黄褐色	瀬戸	遺構外 (B-3)G	近世(19c)
第72図122 図版33-122	陶器	鉢	高(5.4) 底(9.0)	体部～底部破片/付高台/外面体部下半～底部を除き灰釉/内面見込みに胎土目/胎土の色調は白色	瀬戸	遺構外 (B-2)G (C-3)G	近世(19c)

第26表 遺構外出土の陶磁器・土器一覧(1)

探検番号 図版番号	種別	器種	法量	製作の特徴等	推定産地	出土位置	時期
第72図122 図版33-123	陶器	瓶	高(7.9)	中瓶の胴部破片か/外面に灰釉/胎土の色調は灰白色	瀬戸	遺構外 (B-2)G	近世(19c)
第72図124 図版33-124	陶器	徳利	高(5.1) 底(11.4)	胴部下半~底部/外面には底部を除き灰釉/内面には自然釉/胎土の色調は淡黄褐色	瀬戸	遺構外 (A-1)G	近世(19c)
第72図125 図版34-125	陶器	瓶	高(4.6) 底(7.4)	胴部下半~底部/外面には底部を除き灰釉/胎土の色調は灰褐色	瀬戸	遺構外 (B-3)G	近世(19c)
第73図126 図版34-126	陶器	鉢	高(6.6)	胴部下半~底部/受部あり/内外面に鉄釉/胎土の色調は白色	瀬戸	遺構外 (B-3)G	近世(19c)
第73図127 図版34-127	陶器	鍋	高(6.5)	体部破片/把手の一部あり/内外面に鉄釉/胎土の色調は白色	瀬戸	遺構外 (B-2)G	近世(19c)
第73図128 図版34-128	陶器	節鉢	高(7.2)	口縁部~体部破片/複合口縁/口縁部内面に沈線/内面に11本~単位のハケ目/内外面に鉄釉/胎土の色調は茶褐色	備前系	遺構外 (C-3)G	近世(19c)
第73図129 図版34-129	陶器	節鉢	高(4.7)	口縁部~体部破片/複合口縁/口縁部内面に沈線/内面にハケ目/内外面に鉄釉/胎土の色調は茶褐色	備前系	遺構外 (B-3)G	近世(19c)
図版34-130	陶器	節鉢	—	体部破片/内面に本~単位のハケ目/内外面に鉄釉/胎土の色調は淡黄褐色	備前系	遺構外 (B-3)G (B-4)G	近世(19c)
図版34-131	陶器	甕	—	体部破片/外面に鉄釉/胎土の色調は灰褐色	常滑	遺構外 (B-2)G	近世(19c)
第73図132 図版34-132	土器	火鉢	高(7.5) 口(17.8)	口縁部~体部破片/口縁部は肥厚/色調は明茶褐色/ロクロ成形	在地系	遺構外 (B-4)G	近世(19c)
第73図133 図版34-133	土器	火鉢	高(5.0) 底(12.4)	体部下半~底部破片/底部にボタン足の足3箇所あり/足は径1.5~1.9cm・高さ0.5cm/色調は明茶褐色/ロクロ成形	在地系	遺構外 (B-4)G	近世(19c)
第73図134 図版34-134	土器	焙烙	高(5.6)	口縁部は丸い/外面底部を除き黒く焼けている/胎土の色調は灰白色/内外面に回転ナデ	在地系	遺構外 (C-3)G	近世(19c)
第73図135 図版34-135	土器	焙烙	高(3.7)	口縁部は丸い/内外面とも黒く焼けている/胎土の色調は灰白色/内外面に回転ナデ	在地系	遺構外 (B-4)G	近世(19c)

第26表 遺構外出土の陶磁器・土器一覽(2)

探検番号	銭貨名	外径	方孔一辺	厚さ	重量	初鑄年	遺存状態	出土位置	備考
第54図41	寛永通寶	2.5	0.6	0.1	1.8	—	一部欠損	45 D	文字不鮮明
第57図16	文久永寶	2.7	0.7	0.1	2.8	文久3(1863)	完形品	49 D	真文/西文銭
第74図146	寛永通寶	2.4	0.6	0.1	2.4	—	完形品	遺構外 (C-4)G	文字不鮮明
第74図147	寛永通寶	2.8	0.7	0.1	3.9	明和6(1769)	完形品	遺構外 (B-3)G	真輪四文銭(十一説)
第74図148	寛永通寶	2.8	0.7	0.1	3.5	明和6(1769)	完形品/艶い	遺構外 (B-3)G	真輪四文銭(十一説)
第74図149	寛永通寶	2.2	0.6	0.1	1.9	—	完形品	遺構外 (B-4)G	新寛永/一文銭
第74図150	寛永通寶	2.4	0.5	0.1	3.3	—	完形品	遺構外 (C-3)G	古寛永/一文銭
第74図151	文久永寶	2.7	0.7	0.1	3.6	文久3(1863)	完形品	遺構外	草文/西文銭

第27表 土坑・遺構外出土の銭貨一覽

第4章 調査のまとめ

本書は、中道遺跡第38・39地点の発掘調査成果を収録したものである。ここでは、紙幅の関係上、今回検出された旧石器時代と古墳時代後期の遺構・遺物について簡単に調査所見をまとめることにする。

第1節 旧石器時代について

第38地点からは、旧石器時代の石器集中地点1ヶ所（2U）が検出された。時期としては、垂直分布の集中域から立川ローム第VI層段階と考えられる。

2Uは石器総点数54点から成り、そのうち、ナイフ形石器1点、楔形石器2点という定形的な石器が少ない石器集中地点である。石器石材は黒曜石、黒色安山岩、珪質頁岩であり、黒曜石、黒色安山岩が主体である。黒曜石製の石器は楔形石器、二次加工の有る剥片、微細剝離の有る剥片、剥片、碎片であり、剥片・碎片が大半を占める。接合資料1からみても、小形の不定形剥片を作出していることが分かり、黒曜石製の剥片で2cmを超えるものはない。黒曜石の石材消費としては最後の段階であると推測される。また、楔形石器が2点出土していることから、石器製作以外にも、楔形石器を用いた作業が行われていたと考えられる。黒色安山岩の石器は二次加工の有る剥片、剥片、碎片、石核であり、剥片類のみである。1点出土した石核は、礫面を持ち、縦方向、横方向からと不規則な剝離面が認められる。また、黒色安山岩製の剥片は礫面を持つものが多く、不定形な剥片である。石核と接合しなかったが、これらの剥片は石核の調整剥片と思われる。石核や剥片の状態からして、あまり粗割をされていない拳程度の石核が持ち込まれ、石核調整、不定形な剥片生産が行われ、最後に石核が廃棄・遺棄されたと推測されよう。珪質頁岩製の石器は、ナイフ形石器の先端部、碎片である。ナイフ形石器の裏面をみると、打面が観察でき、調整の際に折損したものと考えられる。

このように、石材ごとに見ていくと、石器製作の内容が異なっていることが分かる。また、石器群全体で見ると、2Uでは石刃のような定形的な剥片生産は行われていない。これらは、搬入時の石核の状態や、その場で必要とする石器が何か、などに起因すると考えられる。様々なコンテキストにより、石器群の様相は変わるものであり、今後、詳細な分析を行うことで、武蔵野台地北東部という石器石材産地から離れた地域で、立川ローム第VI層段階の石材消費戦略が見えてくると思われる。

第2節 古墳時代後期の住居跡について

(1) 住居跡の基本構造について

第38地点からは、古墳時代後期の住居跡が、3軒（20～22号住居跡）検出された。検出状況としては、調査区北東隅の（C～E-3・4）グリッドにままとって分布しているが、20・21号住居跡は、住居東側部分が調査区外にあるため、全容は確認できない状況である。

また、22号住居跡については、（D-3・4）グリッドにおいて、その全容を確認することができた

ため、ここでは、22号住居跡の住居構造について、簡単にまとめることとする。

22号住居跡（第13～15図）

カマドについては、北壁の中央に設置されている。長さは108cm、幅は85cmで、壁の掘り込みは30cmと煙道部があまり外に延びない特徴をもつ。基本構造としては、両袖部にロームを馬蹄形状に掘り残し、その上に粘土を被覆し、袖部と天井部を構築している。このタイプのカマドは、志木市では、6世紀に入り採用され、7世紀後葉の長壘を補強材とするタイプが出現するまで使用されていた。

貯蔵穴は、平面形は長方形で、長軸105cm・短軸74cm・深さ64cmで、住居北西コーナーのカマド左横に設置されているが、志木市の7世紀代の住居跡では、カマド右横の方が多い傾向と言える。

柱穴については、住居の四隅に4本（P1～P4）が検出されており、主柱穴は4本で構成されている。主柱穴の配置としては、P1の位置はややカマド側にずれ、P3の位置についてもやや南東にずれ、住居四隅と柱穴を通した対角線上にはP1とP3はのらない状況である。これについて、椀国男氏の研究（椀 1967・1975）によれば、中心線を基準とする方法が採用されたと考えられる。また、P5については、入口梯子穴と考えられる。

さらに、22号住居跡については、第14図に示したとおりに住居全面から多くの炭化材が出土し、焼土も広い範囲で検出されたことから、焼失住居と考えられる。炭化材については、サンプリングを行い、その後樹種同定による分析を行った。

分析の結果は、付編59ページに掲載したが、「柱および梁に、全てかどうかは不明であるがクヌギ節の材が、垂木にはクヌギ節とコナラ節の材が使用されていた。また、屋根葺材としてはウシクサ族（ススキ、オギ、チガヤなど）が使われていた可能性がある。」というように大変貴重な基本資料となった。

（2）住居跡出土の土器について

ここでは、住居跡毎に出土遺物について考えてみることにする。また、土師器の時期の特定については、筆者が行った志木市の編年（尾形 2000・2001）を基準とする。

20号住居跡出土土器（第10図）

出土遺物はすべて土器で、1～3は土師器環形土器である。

1～3は、いわゆる比企型環であり、法量としては、1は口径12.2cm、2は推定口径12.8cmであり、やや小型化の傾向が見られる。器形の特徴は、1・2の口唇部内面に沈線がまわり、口縁部と底部との境に段ないし稜をもつが、まだ、水口由紀子氏による「B系列」（水口 1989）である須恵器蓋形土器の模倣タイプではなく、「定型化した比企型環」である（尾形 1999）。さらに1・2の胎土については、色調が暗赤褐色を呈することから、入間系土師器のA5類の「定型化タイプ」（尾形 2008）と考えられる。

以上、20号住居跡の出土土器をまとめると、口径12cm台とやや小型化傾向にあることから、志木市の編年の13期（7世紀3/5段階）に位置付けられる。

21号住居跡出土土器（第12図）

出土遺物はすべて土器で、1・2は土師器環形土器、3～5は土師器甕形土器、6は土師器甕形土器である。

まず、土師器環形土器の1は、口径13.0cmの黒色系有段環である。胎土の色調は暗橙色を基調とし、

胎土には砂粒をやや多く、角閃石・金雲母・小石を含むものである。この特徴をもつ黒色系土器は、北関東系の搬入品ではなく、在地系土師器である（尾形 2005・2006）。また、2は無彩系有稜環と思われるもので、これも在地系土師器と考えられる。

土師器甕形土器は、いずれも長胴化が完成を遂げているもので、口縁部と胴部との境はスムーズで、横ナデによる段差はない。口径と胴部最大径を比較すると、3はやや口径が大きく、4はやや胴部最大径が大きい。この特徴は、志木市の編年の13期（7世紀3/5段階）に比定されるであろう。

土師器甕形土器については、7世紀全般に大きな器形の変化はないが、内面の胴部中位以下に見られる細長いへら磨きが未だ顕著に間隔が開いたものではないことから、志木市の編年の13期（7世紀3/5段階）の特徴でよいものであろう。

以上、21号住居跡の出土土器をまとめると、土師器環形土器の1の口径が13.0cmとまだ小型化傾向にないことから、志木市の編年の11期（7世紀1/5段階）に比定されるが、長胴化を遂げた土師器甕形土器や土師器甕形土器の特徴から、およそ13期（7世紀3/5段階）に位置付けることができよう。

22号住居跡出土土器（第16図）

出土遺物は土器（1～11）と土製勾玉（12）である。土器については、1～8が土師器環形土器、7・8が土師器甕形土器、9は土師器鉢形土器、10は土師器甕形土器、11は須恵器蓋形土器である。

土師器環形土器については、1～3が赤色系土器で、そのうち1・2はいわゆる比企型環である。4・5は黒色系有段環、6は無彩系有稜環である。

まず、いわゆる比企型環の1・2は、1が口径12.6cm、2が推定口径12.0cmで、やや小型化傾向にあるものである。いずれも水口由紀子氏による「B系列」（水口 1989）である須恵器蓋形土器の模倣タイプに類似している。3は、6世紀代の赤色系有段環が扁平したタイプと思われる。1～3の赤色系土器は、いずれも胎土の色調が暗赤褐色を呈することから、入間系土師器と考えられる。

次に4・5の黒色系有段環については、4が口径14.1cm、5が口径16.0cmと大形のものである。これらの土器は、21号住居跡のものと同様に北関東系の搬入品ではなく、在地系土師器と考えられる。そのため、搬入品である黒色系有段環であれば、6世紀中葉の特徴を有しているが、在地系土師器の場合は、バラエティーが豊富であることから、単純に法量の大小で時期の特定は難しい。しかし、全体に小型化傾向にないという特徴により、7世紀後葉以降には下らないものと考えられる。6は無彩系有稜環で、志木市の編年の11期（7世紀1/5段階）以降に普遍的に見られるものである。

土師器甕形土器は、いずれも長胴化が完成を遂げているもので、口縁部と胴部との境に段をもち、口径と胴部最大径を比較すると、7は胴部最大径が大きく、8は口径が僅かに大きい。この特徴は、21号住居跡同様に志木市の編年の13期（7世紀3/5段階）に比定されるであろう。

土師器甕形土器については、内面の胴部中位以下に見られる細長いへら磨きはやや間隔が開いているが、胴部全体に施されていることから、志木市の編年の13期（7世紀2/5段階）の範ちゅうでよいものであろう。

以上、22号住居跡の出土土器をまとめると、土師器環形土器では、やや7世紀の古い段階の特徴を有するが、1・2のいわゆる比企型環の特徴から、志木市の編年の13期（7世紀3/5段階）、そして、土師器甕・甕形土器の特徴からも、およそ13期（7世紀3/5段階）に位置付けることができよう。

[引用・参考文献]

- 尾形剛敏 1999「いわゆる「比企型坏」の編年基準の要点」『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会
- 2000「志木市における古墳時代の土師器の編年（1）—5世紀から7世紀の坏形土器の変遷—」『あらかわ』第3号
あらかわ考古談話会
- 2001「志木市における古墳時代の土師器の編年（2）—5世紀から7世紀の甗・甗形土器の変遷—」『あらかわ』第
4号 あらかわ考古談話会
- 2005「第4章 まとめ」『城山遺跡第42地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第10集
- 2006「七世紀における「在地系土師器」の出現と歴史的意義—武蔵野台地北西部の無彩系・黒色系土師器の一事例
—」『埼玉考古Ⅱ』埼玉考古学会
- 2008「古墳時代後期の土師器の再認識—（仮称）「入間系土師器」の実態と生産地推定を例として—」『埼玉考古』
第43号 埼玉考古学会
- 棚 国男 1975「竪穴住居の設計計画（上）」『考古学雑誌』第52巻第4号 日本考古学会
- 1975『古墳の設計』株式会社 築地書館
- 水口由紀子 1989「いわゆる“比企型坏”の再検討」『東京考古』第7号 東京考古学会

[付 編]

自然 科学 分析

I. 中道遺跡第38地点におけるローム層中のガラス質火山灰

菱田 量 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

中道遺跡第38地点は、志木市柏町に所在する台地上の遺跡である。遺跡周辺部は、武蔵野台地の北部地域に属し、北側は柳瀬川の谷によって開析されている。本遺跡の発掘において、立川ローム層が堆積している部分が見られた。このような立川ローム層は、富士火山や浅間火山などに由来するテフラ（軽石・スコリア・火山灰などの火山噴出物の総称）を起源とした粒子が主体となって、形成された風成堆積物である。また、立川ローム層中には、AT（町田・新井 1976）やUG（山崎 1978）のガラス質火山灰が含まれていることが知られている。ここでは、ガラス質火山灰の層準を明らかにするため、ローム層中の火山ガラスの分布状態について分析した。さらに、火山ガラスの形態的特徴や屈折率特性などから、既知のテフラとの同定・対比を行った。

2. 層序の概要

分析試料は、あらかじめ採取されていたものである。各層の記載を示す。

Ⅲ層：黄褐色軟質ローム。いわゆるソフトロームである。

Ⅳ層：黄褐色硬質ローム。試料№1

Ⅴ層：暗褐色硬質ローム。試料№2、№3の一部

Ⅵ層：黄褐色硬質ローム。試料№3の一部、№4～№6

Ⅶ層：暗褐色硬質ローム。試料№7、8

Ⅸ層：暗褐色硬質ローム。試料№9

3. 分析方法

分析試料は、Ⅳ層からⅨ層にわたっており、Ⅴ層下部からⅦ層上部の間（試料№3～7）は、連続して5cmごとに採取されている（分析結果の第75図参照）。試料数は9で、それらについて以下の分析をおこなった。

(1) 1φ (0.5mm:30メッシュ)、2φ (0.25mm:60メッシュ)、3φ (0.125mm:120メッシュ)、4φ (0.063mm:250メッシュ)の4枚のふるいを重ね、流水下で湿式ふるい分けをする。各ふるいに残った残渣について、超音波洗浄器により洗浄し、それぞれ乾燥・秤量して粒度組成として表す。

(2) 3～4φ (0.125～0.063mm)の粒子を重液（テトラブromoエタン：比重2.96）を用いて重鉱物（有色鉱物）と軽鉱物（無色鉱物）に分離する。

(3) 分離した軽鉱物について、スライドガラス上に適宜散布する。これらの鉱物粒子を偏光顕微鏡観察により同定、計数し、軽鉱物組成を求める。軽鉱物は火山ガラスと長石類（主として斜長石）について分類する。なお、火山ガラスの形態分類は町田・新井（1992）の分類基準にしたがう。ここでは、便宜的に次のように記号をつける。バブル型平板状 (b1)、バブル型Y字状 (b2)、軽石型繊維状 (p1)、軽石型スポンジ状 (p2)、急冷破砕型塊状・フレーク状 (c) に分類する。

(4) 火山ガラスの屈折率については、横山ほか（1986）の方法に従い、温度変化型屈折率測定装置 (RIMS86) により測定し、範囲 (range) および平均値 (mean) で表す。

4. 分析結果 (第 75 図・第 28 表)

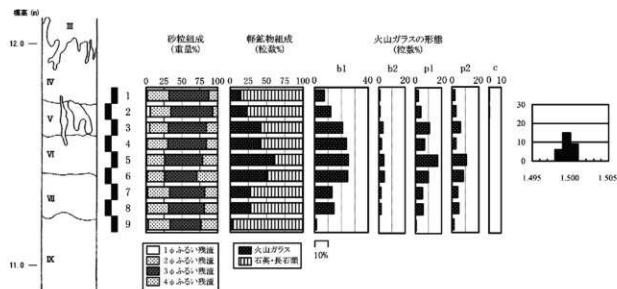
砂粒分の粒度組成については、全体に 2、3、4 φ 残渣が大部分を占め、1 φ 残渣は少ない。

軽鉱物組成については、試料 No. 1～8 にバブル型平板状の火山ガラスが卓越しており、全体に分散して含まれる。しかし、No. 9 は火山ガラスが少ない。No. 3～6 では、軽石型繊維状・スポンジ状のものも比較的多くみられる。全体にややばらつきがあるものの、VI 層中の No. 5 で、火山ガラスの含有率がピークをなし、軽鉱物中に 60.4% 含まれる。

No. 5 の火山ガラスの屈折率測定結果は、range: 1.4985-1.5009、mean: 1.4995 である。

試料No.	砂粒分の粒度組成 (重量%)				火山ガラス						合計
	1 φ	2 φ	3 φ	4 φ	石英・長石 Qu・Pl	平板状 b1	Y字状 b2	繊維状 p1	スポンジ状 p2	破砕型 c	
1	1.4	30.8	55.2	12.6	207	20	2	6	6	1	35
2	5.8	28.6	58.4	7.1	197	35	2	12	9	1	59
3	4.7	26.4	53.1	15.7	144	53	8	27	16		104
4	1.2	29.0	53.9	15.8	137	62	5	18	8		93
5	0.6	25.3	53.1	21.0	90	61	9	41	26		137
6	1.4	24.3	45.3	29.1	138	73	12	29	25		139
7	1.6	31.2	48.8	18.4	162	33	4	14	11		62
8	1.4	30.1	49.7	18.9	157	33	4	13	12		62
9	2.8	30.8	43.0	23.4	203	3		1	4		8

第 28 表 ローム層中の鉱物組成



b1: バブル型平板状 b2: バブル型 Y 字状 p1: 軽石型繊維状 p2: 軽石型スポンジ状 c: 急冷破砕型塊状・フレーク状

第 75 図 ローム層中の鉱物組成

5. ローム層中のガラス質火山灰 (図版36)

VI層中の試料№5をピークとして含まれ、ガラス質火山灰からなるテフラは、火山ガラスの形態的特徴と屈折率特性および、挟在する層位を考慮すると、町田・新井(1976)の「始良Tn火山灰(A T: Aira-Tn Ash)」である。

町田・新井(1976・1992)のATの特徴記載によると、ATにみられる火山ガラスの形態は、鋭い端をもつ無色透明の平板状のガラスで、気泡の側壁あるいは泡と泡との継目の部分のかけらのも(パブル型平板状・Y字状火山ガラス)が主体となることが示されている。また、その火山ガラスの屈折率のレンジは1.498-1.501である。

ここでの同定の根拠としては、以下のことが挙げられる。上記の特徴と比較すると、まず、ここでVI層を中心に見いだされたテフラ中には、パブル型平板状の火山ガラスが多く含まれている。さらに、その屈折率特性は、レンジ1.4985-1.5009を示し、従来の測定値とほぼ一致している。また、武蔵野台地の立川ローム層においては、一般的に、第1黒色帯(BBI;V層)と第2黒色帯(BBII;VII-IX層)の間(VI層)にATが挟在することが多い。こうした特徴とローム層の層序から、ここで見いだされたテフラはATに同定・対比される。

ATは、南九州の鹿児島湾北部の始良カルデラを噴出源とし、九州地方から東北地方まで広く分布している。また、ATの噴出年代は、その上下の堆積物の¹⁴C年代測定などから2.1~2.2万年前と推定されていた(町田・新井 1976・1983)。しかし、近年では、¹⁴C年代測定の中でも、液体シンチレーション法により、24,720±290 yrs BP(松本ほか 1987)、さらに、タンデトロン加速器質量分析法により、24,330±225 yrs BP(村山ほか 1993)、24,510±220 yrs BP(池田ほか 1995)という値が得られている。これらのデータから、ATの噴出年代は、従来考えられていた値より古くなっている。

[引用文献]

- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 1995『南九州、始良カルデラ起源の大隅降下軽石と人戸火砕流中の炭化木の加速器質量分析法による14C年代』第四紀研究34 377-379
- 町田 洋・新井房夫 1976『広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—』科学46 339-347
1983『広域テフラと考古学』第四紀研究22 134-148
1992『火山灰アトラス—日本列島とその周辺』277p 東京大学出版会
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史明 1987『始良Tn火山灰(AT)の¹⁴C年代』第四紀研究26 79-83
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦 1993『四国神ビストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討—タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の¹⁴C年代—』地質学雑誌99 787-798
- 山崎晴雄 1978『立川新層とその第四紀後期の運動』第四紀研究16 231-246
- 横山卓雄・権原 徹・山下 透 1986『温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定』第四紀研究2 21-30

II. 中道遺跡第38地点出土炭化材の樹種

植田弥生・鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

中道遺跡第38地点の22号住居跡(古墳時代後期)から炭化材など、多くの炭化した植物遺体が検出された。特に、柱穴内に残存した炭化材や、その産状から梁あるいは垂木と考えられる炭化材など、炭化材については比較的良好な状態で検出されている。また、屋根葺材として使われていたと予想される炭化した草本性の植物遺体も得られている。よって、これらの樹種を検討することにより、古墳時代後期における建築材としての木材利用の一資料が得られるものと期待される。以下には炭化材の樹種および草本性植物遺体の検討結果を示し、中道遺跡の古墳時代後期における住居の建築部材について記した。

1. 炭化材

比較的良好な状態で出土した炭化材9点の樹種同定を行った。今回樹種同定を行った9試料のうち、1点は柱(試料No⑨)で、その他は、産状から垂木と考えられている5点(②~⑤・⑩)と梁1点(⑧)、および不明(垂木?)2点(①・⑥)の9点である。

a) 方法

炭化材の3方向の断面の組織を観察し樹種同定を行った。横断面(木口)は炭化材を手で割り新鮮な面を出す。接線断面(板目)と放射断面(柾目)は片刃の剃刀を炭化材に軽くあて弾くように割り面を出す。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定しその周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM T-100型)で観察・撮影した。

b) 結果

第29表に樹種同定結果の一覧を、また、第76図に試料の出土状況とその樹種を示した。炭化材9点の樹種同定結果はコナラ属クヌギ節が7点、コナラ属コナラ節が2点であった。垂木にはクヌギ節とコナラ節が、柱にはクヌギ節が使われていた。また、試料④を除いて8点の試料はすべて芯持ちの丸太材であり、その直径は7~12cm、年輪は5~12年輪が数えられ、太さと年輪数はまとまっていた。試料④は中心部のない材であり、一部の破片の横断面は非常に年輪の間隔が詰まっためか目であった。

関東地方では縄文時代の居住材はクリが多く利用されていたが弥生時代以降になるとクヌギ節が多くなるようになることが知られている(山田 1993)。また、当遺跡の南方に位置する朝霞市の岡・向山遺跡における弥生時代中期および後期の住居跡の炭化材の樹種同定結果はクヌギ節とコナラ節が多く、この2種が検出数の大部分を占めていた(藤根 1994)。当遺跡の結果はコナラ節を少数交えクヌギ節が多く検出されており、すでに知られている事例と同様の傾向を示している。クヌギ節にはクヌギとアバマキがあり、コナラ節にはカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがあるが材組織からは種を特定することはできない。現在ではクヌギ節の材はシイタケ栽培のほだ木や薪炭材に利用され、コナラ節の材の方がおもに建築材として用いられている。しかし関東地方の弥生時代から古墳時代の住居址から



第76図 22号住居跡の炭化材の出土状態(1/40)

試料	樹種	直径cm	年輪数
①	クヌギ節	10	7
②	コナラ節	7	12
③	クヌギ節	10	5
④	コナラ節	—	—
⑤	クヌギ節	7	7
⑥	クヌギ節	9	7
⑦	ウシクサ族?	—	—
⑧	クヌギ節	12	9
⑨	クヌギ節	9	8
⑩	クヌギ節	7	7

表29 22号住居跡出土炭化材の樹種

は建築材としてクヌギ節も多く利用されていた。

c) 樹種の記載

コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* 図版 37 1a-1c:①

年輪の始めに 2～3 層の中型の管孔が配列し除々に径を減じ、その後円形でごく小型の管孔が放射方向に配列する環孔材である。管孔はほとんど単独で分布する。接線状に配列する柔組織が顕著である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は同性、単列のものと複合放射組織がある。道管と放射組織との壁孔は大きく不規則な配列をなす。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* 図版 37 2a-2c:②

年輪の始めに 1～2 層の管孔が配列し除々に径を減じてゆき、その後ごく小型の管孔が火炎状に配列する環孔材である。接線状の柔組織が顕著である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は同性、単列のものと複合放射組織がある。

2. 植物遺体

肉眼観察からイネ科植物とみられる炭化した植物遺体が中道遺跡 22 号住居跡より検出された。一般にイネ科植物は珪酸を吸収して細胞壁に沈積させること（植物珪酸体）が知られており、そのうち、葉に形成される機動細胞珪酸体についてはイネを中心とした形態分類の研究が藤原によって進められている（藤原 1976・1978）。こうしたことから、得られた植物遺体について、その植物珪酸体（機動細胞珪酸体）の検出を図り、形態を観察することによって給源母体となるイネ科植物についての検討ができると考え、それについて以下に示した。

a) 試料と方法

試料は、中道遺跡 38 地点の 22 号住居跡（古墳時代後期）より炭化材とともに検出された植物遺体（試料 Na⑦）で、産状から屋根葺材として使われていたのではないかと考えられている。この試料について、現生植物の標本作製と同様の方法を用いて植物珪酸体の有無を調べた。すなわち植物遺体を乾燥後管瓶にとり、電気炉を用いて灰化するのであるが、灰化する行程は藤原氏（藤原 1976）にほぼしたがって行った。その行程は、はじめ毎分 5°C の割合で温度を上げ、100°C において 15 分ほどその温度を保ち、その後毎分 2°C の割合で 550°C まで温度を上げ、5 時間その温度を保持して、試料の灰化を行う。灰化した試料についてその一部を取り出し、グリセリンにてプレパラートを作製し、生物顕微鏡下で観察した（600 倍）。

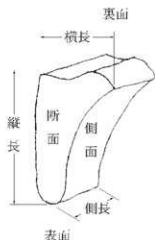
b) 結果および考察

観察の結果、機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体が認められた。以下にそれらの記載を示すが、各名称は第 77 図を参照されたい。

機動細胞珪酸体の断面形態は楔形をしており、裏面側においてこぶ状の凸部と溝状の凹部が認められる（図版 38-2）。縦長は大きなもので 66.9 μ m、小さいもので 35.3 μ m で、横長は 20～30 μ m である。側面形態は長方形（図版 38-1-b）で、裏面側にこぶ状のものがみられるものもある。側長は 15 μ m 前後である。表面および裏面形態は長方形を呈している。以上のような観察結果から、この機動

細胞珪酸体はウシクサ族と判断され、⑦はウシクサ族に属する植物と推測される。

また、キビ型(鼓型)の単細胞珪酸体が葉脈方向に連なった状態で観察される(図版38-5・6)。表面形態は、上部・下部ともに左右に広がり鼓に似た形状を示し厚みを持つが、下部の方が大きくなっている(図版38-7-a、7-b)。大きさは、縦が $22.2\ \mu\text{m}$ 、上部の幅が $12.7\ \mu\text{m}$ 、下部の幅が $14.4\ \mu\text{m}$ である。また、側面形態は棒状(厚さ $3.3\ \mu\text{m}$ 、図版38-7-c)、上部方向からは長方形(扇型)に観察される(図版38-7-d)。ススキについて大越氏(大越 1982)が示した形態を記すと、大きさは縦が $17.5\sim 27.5\ \mu\text{m}$ 、幅が $12.5\sim 17.5\ \mu\text{m}$ 位で、上部より下部の方が幅が広く、四隅が盛り上がり、その周辺には大きな縁がついている。今回観察された単細胞珪酸体もほぼ同様の形態と思われるが、縁については不明瞭である。また、キビ型の単細胞珪酸体についての形態分類の研究はまだ不十分であり、今回観察された単細胞珪酸体からは母植物についての言及はできないと現時点では考える。



第77図 機動細胞珪酸体の模式図

以上のように、検出された植物遺体については、機動細胞珪酸体からウシクサ族と推測される。しかしながら、検出された部位はその形状から主に茎の部分と思われ、茎には機動細胞珪酸体は形成されず、単細胞珪酸体が形成される。この単細胞珪酸体から母植物について記すことはできず、現時点では不明としたい。このように、機動細胞珪酸体からはウシクサ族と推測されるが、大半を占める茎から直接母植物について判断できないことから、検出された植物遺体についてはウシクサ族?にとどめたい。なお、ウシクサ族には全部で19属ある(北村・村田・小山 1964)が、ススキ属(ススキ、オギなど)やチガヤ属といった萱葎屋根など屋根葎材として使われる分類群が含まれる。

その他、ヨシ属やネザサ節型の機動細胞珪酸体が若干観察され、これらも屋根葎材としてつかわれたことも考えられる。しかしながら、珪酸体が連なった状態など、植物遺体を示す産状でないことから、試料⑦についてはヨシ属やネザサ節型のササ類ではない可能性が高い。おそらく植物遺体に付着していたロームなどの土壌よりもたらされたのであろう。

3. 22号住居跡の建築材について

柱および梁についてはいずれもクヌギ節の材が使われているが、試料点数が1点ずつであり、クヌギ節の材を選択して使用したかについては不明である。また、垂木にはクヌギ節とコナラ節の材がほぼ半々同定されている。朝霞市の岡・向山遺跡の事例(藤根 1994)をみると、弥生時代後期と時代は違うが、住居跡の構成部材による樹種の違いはなく、また、住居跡によって使用した樹種が違う可能性も指摘されている。22号住居跡においても垂木についてはクヌギ節とコナラ節の材が使用され、垂木における樹種の選択性は認められない。

以上のように、22号住居跡において柱および梁に、全てかどうかは不明であるがクヌギ節の材が、垂木にはクヌギ節とコナラ節の材が使用されていた。また、屋根葎材としてはウシクサ族(ススキ、オギ、チガヤなど)が使われていた可能性がある。

[引用文献]

- 藤根 久 1994「住居跡出土の炭化材樹種同定」『岡・向山遺跡』朝霞市文化財調査報告書第 17 集 156-166 朝霞市教育委員会・朝霞市遺跡調査会
- 藤原宏志 1976「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) 一 数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法」『考古学と自然科学9』15-29
- 1978「プラント・オパール分析法の基礎的研究(2) 一 イネ(Oryza) 属植物における機動細胞珪酸体の形状」『考古学と自然科学11』9-20
- 北村四郎・村田 源・小山謙夫 1964『原色日本植物図鑑 草本編(Ⅲ)』465p 保育社
- 大越昌子 1982「プラント・オパール」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書-自然編-』239-259 埼玉県教育委員会
- 山田昌久 1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』特別第 1 号 244p 日本植生史学会

图 版



1. 調査区近景



2. 基本土層



3. 2号石器集中地点出土状態



4. 20号住居跡



5. 20号住居跡・105・106号土坑



6. 21号住居跡



7. 21号住居跡遺物出土状態



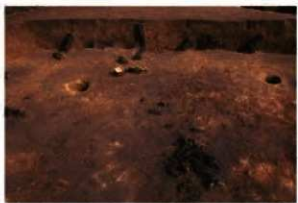
8. 21号住居跡貯蔵穴



1. 22号住居跡遺物出土状態



2. 22号住居跡遺物出土状態



3. 22号住居跡遺物出土状態



4. 22号住居跡遺物出土状態



5. 22号住居跡遺物出土状態



1. 22号住居跡炭化材出土状態



2. 22号住居跡炭化材出土状態



3. 22号住居跡炭化物出土状態



4. 22号住居跡貯蔵穴



5. 22号住居跡カマド



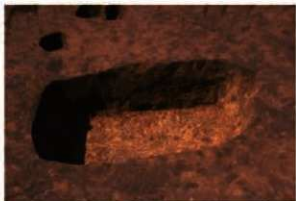
6. 22号住居跡



7. 20号溝跡



1. 89号土坑(B群2類)



2. 99号土坑(B群2類)



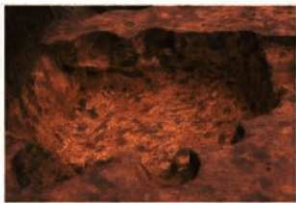
3. 113号土坑(B群2類)



4. 93号土坑(B群3類)



5. 102号土坑(B群3類)



6. 103号土坑(B群3類)



7. 98号土坑(C群)



8. 104号土坑(C群)



1. 118号土坑(C群)



2. 130号土坑藏坑部(E群1類)



3. 130号土坑主体部(E群1類)



4. (C-3・4)グリッド



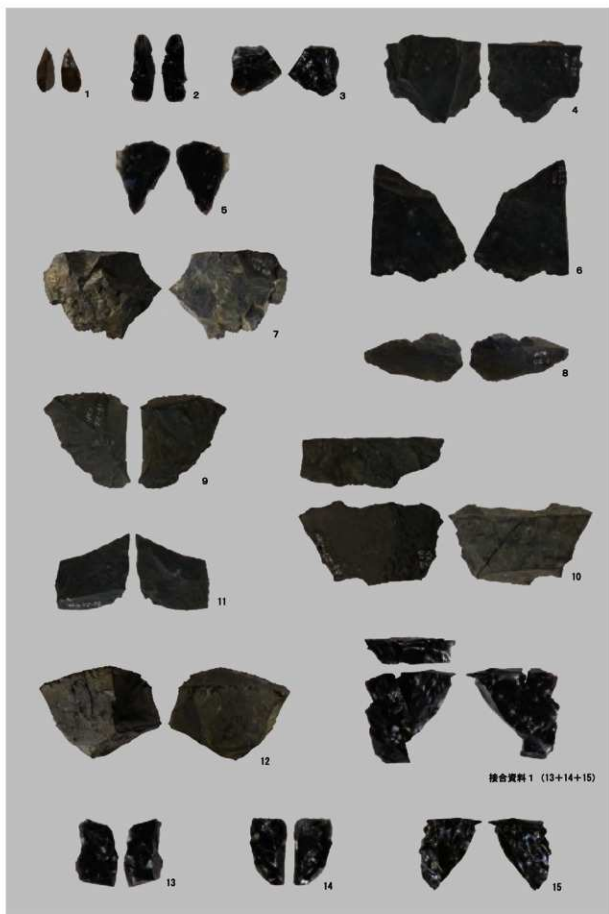
5. 2号井戸跡 上層



6. 2号井戸跡



7. 21号溝跡



2号石器集中部出土石器



1.20号住居跡出土遺物



2.21号住居跡出土遺物



22号住居跡出土遺物



1. 20号沟跡出土遺物



2. 89号土坑出土遺物



3. 130号土坑出土遺物



2号井戸跡出土遺物



遺構外出土遺物 1



遺構外出土遺物 2



遺構外出土遺物 3



1. 調査区近景



2. 7号住居跡



3. 7号住居跡遺物出土状態



4. 7号住居跡遺物出土状態



5. 58号土坑



6. 65号土坑



7. 68号土坑



8. 68号土坑遺物出土状態



1. 84号土坑



2. 87号土坑



3. 56号土坑(B群1類)



4. 60号土坑(B群1類)



5. 38号土坑(B群2類)



6. 51号土坑(B群2類)



7. 59号土坑(B群2類)



8. 64号土坑(B群2類)



1. 69号土坑(B群2類)



2. 72号土坑(B群2類)



3. 41号土坑遺物出土状態(C群)



4. 47号土坑(C群)



5. 49号土坑(C群)



6. 49号土坑遺物出土状態(C群)



7. 50号土坑(C群)



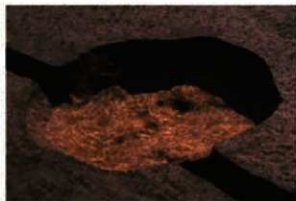
8. 54号土坑(C群)



1. 67号土坑(C群)



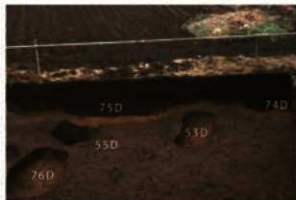
2. 70号土坑(C群)



3. 73号土坑(C群)



4. 土坑 東から(B群2類・C群・D群)



5. 土坑 西から(B群2類・C群・E群)



6. 57号土坑縦坑部(E群1類)



7. 57号土坑主体部(E群1類)



8. 1号井戸跡



7号住居跡出土遺物 1



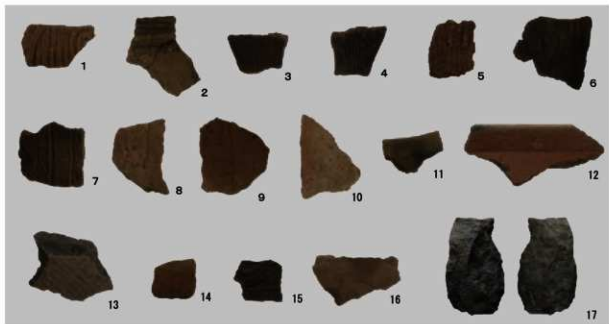
7号住居跡出土遺物 2



7号住居跡出土遺物3



1. 58号土坑出土遺物



2. 65号土坑出土遺物



3. 68号土坑出土遺物



1. 84号土坑出土遺物



2. 86号土坑出土遺物



3. 87号土坑出土遺物



1. 38号土坑出土遺物



2. 40号土坑出土遺物



3. 41号土坑出土遺物



1. 42号土坑出土遺物



2. 43号土坑出土遺物



3. 44号土坑出土遺物



4. 45号土坑出土遺物 1



1. 45号土坑出土遺物 2



2. 47号土坑出土遺物



1. 49号土坑出土遺物



2. 48号土坑出土遺物



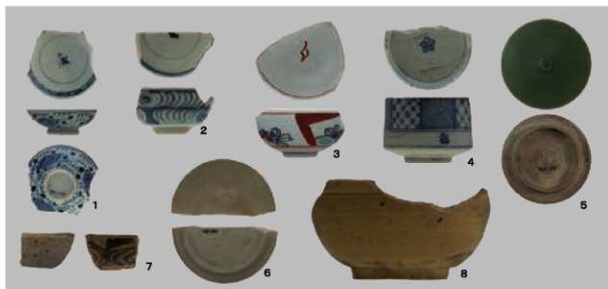
3. 50号土坑出土遺物



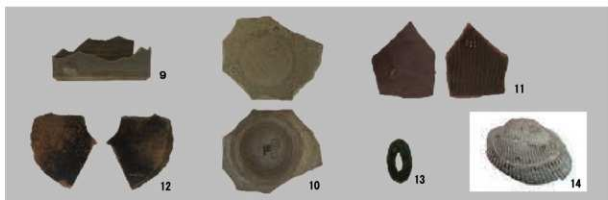
4. 51号土坑出土遺物



5. 52号土坑出土遺物



6. 55号土坑出土遺物 1



1.55号土坑出土遗物 2



2.57号土坑出土遗物 1



57号土坑出土遺物 2



1. 57号土坑出土遺物 3



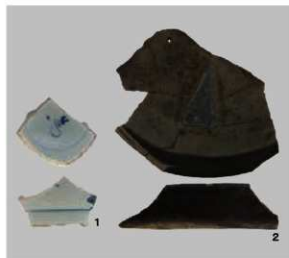
2. 62号土坑出土遺物



4. 72号土坑出土遺物



3. 66号土坑出土遺物



5. 73号土坑出土遺物



1. 74号土坑出土遺物



2. 75号土坑出土遺物



3. 1号井戸跡出土遺物



4. 遺構外出土遺物 1



遺構外出土遺物 2



遺構外出土遺物 3



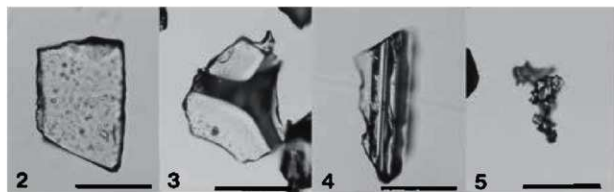
遺構外出土遺物 4



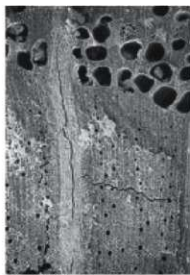
遺構外出土遺物 5



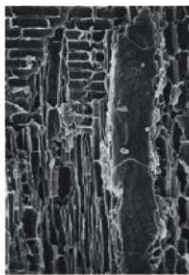
遺構外出土遺物 6



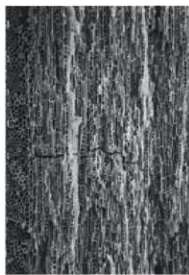
1 : A Tの火山ガラスを含む試料 (Na5)
2 : バブル型平板状火山ガラス 3 : バブル型Y字状火山ガラス
4 : 軽石型繊維状ガラス 5 : 軽石型スポンジ状火山ガラス
(スケール ; 1は0.2 mm, 2~5は0.1 mm)



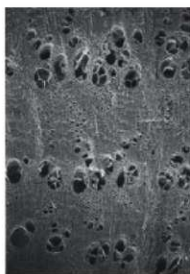
1a: コナラ属クヌギ節(横断面)①



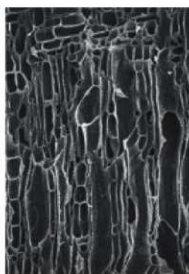
1b: 同(接線断面)



1c: 同(放射断面)



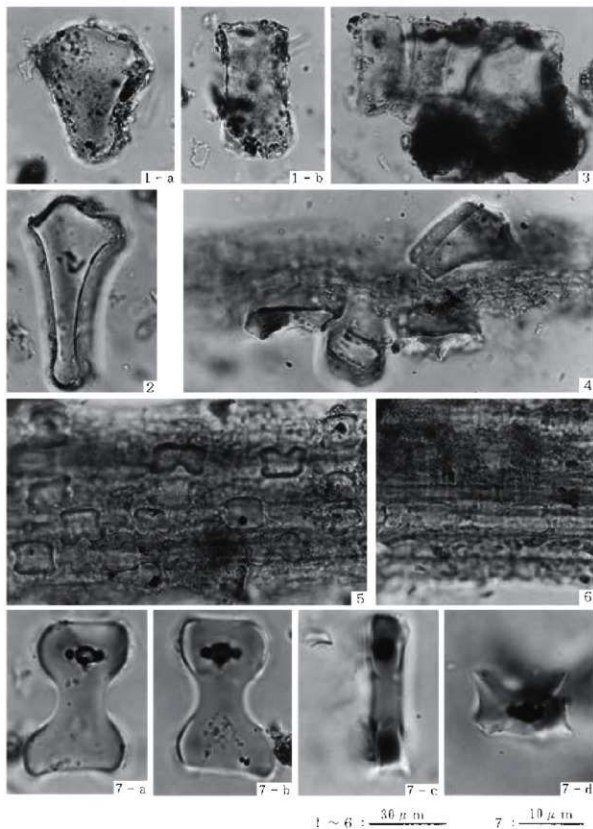
2a: コナラ属コナラ節(横断面)②



2b: 同(接線断面)



2c: 同(放射断面)



1～4：機動細胞珪酸体（1-a, 2：断面, 1-b：側面）
 5～7：単細胞珪酸体（7-a：表面表側、7-b：表面裏側
 7-c：側面（左が表側）、7-d：上面）

中道遺跡第38地点出土炭化物の植物珪酸体

報告書抄録

ふりがな	しきしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ7							
書名	志木市埋蔵文化財調査報告書7							
シリーズ名	志木市の文化財							
シリーズ番号	第66集							
著者氏名	尾形則敏 深井恵子 青木 修							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL.048 (473) 1111							
発行年月日	平成28 (2016) 年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村	遺跡番号	北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積 (㎡) (全体面積)	調査原因
<small>ミナミノミチ</small> 中道遺跡 (第38地点)	<small>しきま市柏町</small> 志木市柏町 5丁目2950-1・35	11228	09-005	35° 49' 47"	139° 34' 10"	19960313 ～ 19960517	1,019.82	共同住宅建設
<small>ミナミノミチ</small> 中道遺跡 (第39地点)	<small>しきま市柏町</small> 志木市柏町 5丁目2946-1・2	11228	09-005	35° 49' 45"	139° 34' 7"	19960206 ～ 19960312	1,209.91	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中道遺跡 (第38地点)	集落跡	旧石器時代 古墳時代後期 平安時代 中世以降	石器集中地点 1カ所 住居跡 3軒 溝跡 1本 土坑 46基 地下室 1基 井戸跡 1基 ピット	石器 土師器・須恵器・石製品・ 土器・土師器・須恵器 陶磁器・土器・石製品・ 銅製品 陶磁器・土器・銅製品 陶器・石製品		22Hからは、炭 化材が多く出土 した。焼失住居 と思われる		
中道遺跡 (第39地点)	集落跡	縄文時代 近世以降	住居跡 1軒 土坑 7基 土坑 42基 地下室 2基 井戸跡 1基 ピット	土器・石器・土製品 土器・石器 陶磁器・土器・土製品・ 石製品・鉄製品・銅製品・ 銭貨・瓦・板碑 陶磁器・土器・瓦・ 土製品・鉄製品・銅製品 陶器				
要 約								
<p>中道遺跡は、旧石器時代～近世にかけての複合遺跡である。今回報告する地点は、第38・39地点で、第38地点からは、旧石器時代の石器集中地点、古墳時代後期の住居跡、平安時代の溝跡、中世以降の土坑・地下室・井戸跡などの多くの遺構が検出された。特に古墳時代後期の住居跡(22H)では、床面及び覆土中から多くの炭化材が出土し、上層構造を考える上で重要である。樹種同定による分析により、柱および梁についてはクヌギ節が、垂木にはクヌギ節とコナラ節が使用され、さらに屋根葺材としては、ウシクサ属(ススキ、オギ、チガヤなど)の草本性の植物が用いられていたという結果が得られている。</p> <p>第39地点からは、縄文時代の住居跡・土坑・集石、近世以降の土坑・地下室・井戸跡などの多くの遺構が検出された。地下室からは、多くの陶磁器が出土した。出土遺物から近世(19世紀)ものと考えられる。</p>								

志木市の文化財 第66集

埼玉県志木市

埋蔵文化財発掘調査報告書 7

発行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号

発行日 平成28(2016)年3月31日

印刷 株式会社 白峰社